ランドスケープデザイン Designing environment and scenery for public.

隔月刊 August 2019

# LANDSCAPE DESIGN

No. 127

## 街をよくする まちづくり

Town planning to make town better






まち☆クリ「まちだアルタミラストリート」




「WORK PARK PACK」プロジェクト



笹塚ヒロバ！

# LANDSCAPE DESIGN

No.127 2019年8月号

［目次］


















# 緑を踏み締める感動を、もっと多くの人に知ってもらいたい。

## Green Turf Project
グリーンターフプロジェクト

### 最高のピッチ・コンディションを維持する



ベルマーレ設立当初から、グラウンドキーパーとして競技場の芝生を整備してきた、『チーム・GT』こと湘南造園の整備スタッフたち。彼らの整備する平塚競技場は、日本でもトップクラスのピッチ・コンディションを維持しています。この競技場でプレーした選手を引き付けて止まない良好な芝生は、現在６人のグラウンドキーパーによって守られ、他に平塚球場・馬入ふれあい公園サッカー場・川崎フロンターレ練習グラウンドなども整備をしています。

### 馬入サッカー場の天然芝を小学校へ移植



2005 年に馬入サッカー場の芝生を天然芝から人工芝へ張り替える際、平塚市は子供たちに『芝で遊び、親しんで欲しい』と、市内の希望する小学校の校庭に、サッカー場の天然芝を移植するプロジェクトを提案・実行しました。そのうちの富士見小学校では、ベルマーレの選手・関係者と一緒に子ども達が緑のタイルを敷き詰めました。その後、芝はしっかりと根付き、一面の緑のカーペットが広がっています。

**www.shonan-ls.co.jp**
**TEL.0463-32-5030**

SHONAN 石と緑のエキスパート
湘南造園株式会社
【本社】神奈川県平塚市万田 596-1 〒 254-0913



ランドスケープデザイン No.127
2019年8月発行

編集・発行人
丸茂 喬

［『ランドスケープデザイン』編集部スタッフ］
編集長
小林哲也

編集・デザイン
丸茂弘之
中村桂祐
輿田文英

営業・広告企画
中村桂祐

販売促進・海外事業
一ノ瀬健介

［協力スタッフ］
デザイン
村上 和（目次）

ロゴタイプデザイン
春口浩一郎

印刷・製本
㈱ディグ

取次店
トーハン、日販、大阪屋栗田

発行所
㈱マルモ出版
〒150-0036 東京都渋谷区南平台町4-8
南平台アジアマンション708
TEL.03-3496-7046 FAX.03-3496-7387
E-mail: design@marumo-p.co.jp
HP: http://www.marumo-p.co.jp
twitter:
http://twitter.com/marumo_p

ISSN 1341- 4747



表紙写真
左上・左下／まち☆クリ実行委員会
右上／編集部
右下／Hayato Kurobe

Honda環境・安全ビジョン

# 「自由な移動の喜び」と「豊かで持続可能な社会」の実現

次世代のために、今できること。これからすべきこと。Hondaは常に考え、積極的に行動していきます。

BLUE SKIES FOR
OUR CHILDREN

子どもたちに青空を

Hondaは「『自由な移動の喜び』と『豊かで持続可能な社会』の実現」をグローバル環境・安全ビジョンとして定めています。1970年代、当時最も厳しい排出ガス規制とされた米国マスキー法のクリアにチャレンジしたHondaの技術者は、「子供たちに青空を残したい」という想いのもと、開発に取り組みました。「自由な移動の喜びを次世代(for our children)に伝えていきたい。だからこそ、豊かで持続可能な社会(blue skies)を実現させたい」。これまでも、これからも変わらないHondaの環境への取り組みに対する想いの象徴です。

HONDA
The Power of Dreams

# LANDSCAPE DESIGN

No.127 August issue, 2019
[CONTENTS]






**LANDSCAPE DESIGN No.127**
August, 2019

**editing publisher**
Takashi Marumo

[LANDSCAPE DESIGN editorial staff]

**chief editor**
Tetsuya Kobayashi

**editor & design**
Hiroyuki Marumo
Keisuke Nakamura
Fumie Yoda

**sales**
Keisuke Nakamura

**sales promotion & international affairs**
Kensuke Ichinose

[cooperative staff]

**design**
Kazu Murakami (contents)

**logo design**
Koichiro Haruguchi

**printing**
DIG INC.

**agency**
TOHAN, NIPPAN, OSAKAYAKURITA

**publishing office**
Marumo Publishing Co., Ltd.
Nanpeidai Asia Mansions 708, 4-8, Nanpeidaicho,
Shibuyaku, Tokyo, 150 0036
phone: +81 (0)3 3496 7046
FAX: +81 (0)3 3496 7387
E-mail: design@marumo-p.co.jp

**HP: http://www.marumo-p.co.jp**
**twitter:**
**http://twitter.com/marumo_p**

ISSN 1341- 4747





**Cover Photo**
upper left and lower left /
MACHI☆KURI Executive Committee
upper right / Editorial desk
lower right / Hayato Kurobe

# 空調で、夏の屋外空間を
# もっと自由に、快適に。

## OUTER TOWER

アウタータワー



2018年夏、東京都環境局が東京ミッドタウン日比谷で実施の「暑さ対策技術等の展示」に選出されました。

※写真は試作機による実証実験時のものですので、実際の商品とは色・形状等が異なります。







## 人々が集い、楽しむ場所へ。
## 空調が、夏の屋外空間の可能性を広げる。
## OUTER TOWERがあると、
## 夏の屋外が快適空間に変わる。



**話＝原田悠生（ダイキン工業株式会社東京支社 空調営業本部事業戦略室）**

昨今の猛暑を受け、真夏の屋外での暑さ対策が喫緊の社会課題となっています。

また、アウトドア人気の高まりや飲食店でのテラス席設置の増加など、屋外の快適性向上に対するニーズは高まっています。これまでの対策として、冷風扇やミストといった水の気化熱を利用したものが主流となっていますが、湿気を出しているため体感としてなかなか涼しくなりにくい、という課題がありました。

今回ダイキンが新開発した屋外用エアコン「OUTER TOWER」ではヒートポンプ技術による熱交換を採用しているため、湿気が出る商材と比べしっかりと涼感が得られ、強力な冷風が前後左右から吹き出し約3m 四方をカバーします。また、室内機と室外機が一体になっており、電源とドレン排水場所さえ確保できればどこにでも設置できるのも特長です。形状も都市景観に馴染むシンプルなデザインのタワー型のため、カフェのテラスやビアガーデン、駅前や商業施設などのオープンスペース、屋外イベントやグランピングなどさまざまな屋外空間にクールスポットを創出できると考えています。

特集

# 街をよくするまちづくり

## Town planning to make town better.

いつの頃からか、ひらがなで表記されるようになった「まちづくり」。
道路やインフラなど計画的に整備をしてきた「街づくり」から、市民がいかに楽しく日常生活を送ることができるかというソフトの大切さに意識が向かったことが「まちづくり」と表記したことに関係しているのではないであろうか。市民が自分たちの住む「まち」を自分たちの手でよくすることができると気づき、行動を起こし、その活動が全国へと波及していくなかで、市民の暮らしにフォーカスした「街づくり」を表現するために「まちづくり」という言葉が生まれたと想像する。そして、それこそが市民にとって住みやすいまちをつくる「街をよくするためのまちづくり」だと考えたい。
現在、地域ごとにさまざまな方法で「まちづくり」が行われている。今号では、数人の市民により始まった活動が街全体を巻き込むほどにまで大きくなった事例、地元の企業と住民の協働によりオープンスペースを充実させたプロジェクト、そして公共空間の利活用の提案により地域による公共空間の活用を促す活動、これら3つのケースを紹介する。




PARK
PACK



# まち☆クリ「まちだアルタミラストリート」

## ～落書きを消してストリートギャラリーへ。「まち」づくりからはじまる「ひと」づくり～

東京都町田市
写真･資料＝まち☆クリ実行委員会
文＝成瀬敏一（DesignStudioコネクト）

**Turn off the graffiti on the wall and turn the wall into an art gallery. "Machida Altamira Street project"**

Machida city, Tokyo
Photo & Data by MACHI ☆ KURI Executive Committee
Text by Toshikazu Naruse [DesignStudio CONNECT]




落書きだらけの整備前の計画地



町田駅北口を出て歩くこと5分、ドン・キホーテの横の薄暗い路地裏に突如現れるストリートギャラリーがある。この場所に似つかわしくない、その通りの名前は「まちだアルタミラストリート」。この通りは、以前は落書きが溢れ、通ることをためらいたくなる場所であった。この状況を改善しようと、地元の有志による活動「まち☆クリ」が立ち上がり、住民主体で落書き消しを行い、ストリートギャラリーがつくられるまでにいたった物語を紹介する。



アート作品が展示されたストリートギャラリー

## 1st ステップ

### まち☆クリとは ～街にあふれる落書き～

人と人が行き交い活気溢れる「町田」は「西の歌舞伎町」と呼ばれ、賑わいの反面、治安の悪い街とも言われていた。当時の町田市が行った市民意識調査での不満の第1位は「治安が悪い」であった。そこで2013年に一般社団法人町田青年会議所が治安向上事業として「まち☆クリ ～町田クリーンアップ作戦～」を立ち上げ本事業はスタートした。2016年には、一般社団法人町田青年会議所から「まち☆クリ実行委員会」へ事業が移管され、市民団体である「まち☆クリ実行委員会」が主導し事業を実施している。

治安が悪いというイメージは、「落書き」等がされていたりすることによる「体感治安」が大きく影響している。2013年当時、町田駅周辺の市街地には、「落書き」や「ステッカー」が多く存在し、それらが放置されてしまっている状態であった。この状態をこのまま放っておいては、今後イメージが良くなっていくどころか実際の犯罪率の上昇にも繋がりかねない。

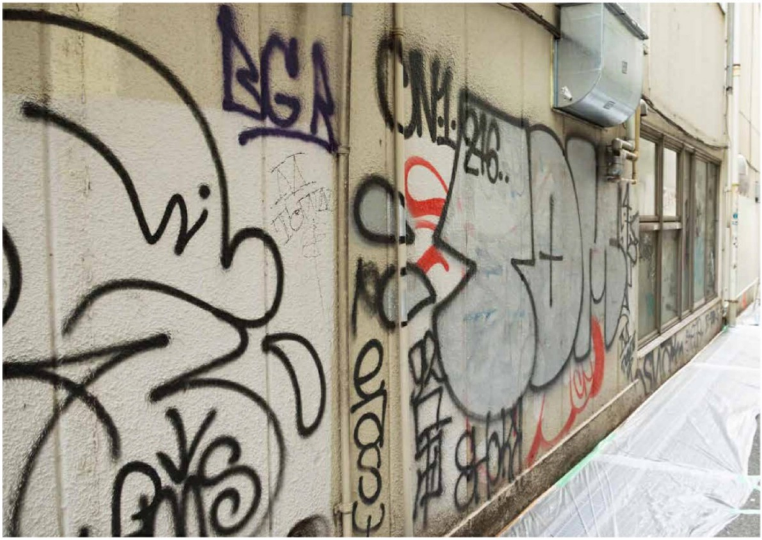
**「愛の反対は憎しみではなく無関心である byマザー・テレサ」**

自分達が住み暮らす地域に関心を持つこと、地域を愛する想いを持つことで、より安心して暮らせる場所に変化させることができる。「まち☆クリ」とは、「落書き」を消すという活動を通じて、そのような意識をもってくれる仲間を増やし、「街を変える」人を育てていく事業である。





2013年当時、町田駅前は落書きで溢れていた、当時の市民意識調査で不満の第1位は「治安が悪い」だった












消すべき落書きや剥がすべき無断シールが貼られている場所を特定する





調査により特定した場所を地図上に落とし込みマップ化する

## 2nd ステップ

### ゲリラ的な展開 ～実践からはじめる～

2013年にはじまった「まち☆クリ」は、当初は志に賛同してくれる仲間で集まり、小さな規模でスタートした。活動を続けていくなかで、落書きを消している際に声をかけてくれた一般市民の方なども多数参加をして頂けるようになり、当初は70人程度ではじまった事業も、2013年の最後の回には172人にまで参加人数が増えていく活動となった。

当時、公共物の落書きを消すといった活動事例は他団体でも行っていたが、民有地の落書きまでを消す活動はあまりみられなかった。「まち☆クリ」では、建物の所有者との交渉を重ね、落書きを消す為の承諾書を取り交わし、「民有地」の落書きを消すことに取り組んだことも、この活動の特徴の一つである。

その後、「まち☆クリ」は多様な展開をみせた。地元のプロサッカーチームである「FC町田ゼルビア」「ASVペスカドーラ町田」をはじめ、地元アイドルグループや地元企業など、町田で活躍する多くの方々が、一緒に「まち☆クリ」を盛り上げようと積極的に参加頂けるようになった。また、地元の都立高校生も参加してくれるようになり、この高校生による取り組みは東京都で新しく設けられた教科「人間と社会」の教科書でも取り上げられている。これらの積み重ねにより、開催規模は大きくなり、2016年には最大750人の参加者が集まり、これまで延べ3,883人の方々に参加頂ける事業となった。








【左】落書き消しとシールをはがすための７つ道具。【中】参加者は５～８人ほどの班に分かれ各班は7つ道具が入ったかごを持ち街へとくり出す。【右】７つ道具は地元企業の新光商事株式会社の倉庫に保管されている

2013 年から 2018 年まで
延べ 3,883 人の地域の手が
街中の落書きを消した。


















## 3rd ステップ
### まち☆クリの転換期

街の落書きは確実にその数が減っていく一方で、「まち☆クリ」で消すための落書きがなくなるというジレンマに陥ることになる。そのような中「まち☆クリ」は新たな転換期を迎えることになる。それはアートとの融合であった。「落書き」を消した部分をキャンパスとして、街の新たな魅力になるようなアートを設けたいと考えた。2013年に小規模であるが「落書き」を消した部分に期間限定でアートを展示するという取り組みを行ったのが、その芽生えであった。しかしその後は、地元出身の有名アーティストとのタイアップなど様々な手法を模索したが、著作権やビジネス上の問題などで実現には至らなかった。

そこで私たちは、著作権フリーで誰もが見たことのあるもので、アートギャラリーに変える場所にふさわしいものは何かを意見交換し、世界最古級の壁画と言われている世界遺産のスペインのアルタミラ洞窟壁画の案が上がった。また、落書きが多く書かれている路地裏の薄暗い環境が、洞窟の環境に類似していることも、場所のもつポテンシャルを活かすことになると考えた。そこで、スペイン政府観光局に伺い、事業目的を説明したところ、壁画利用の承諾を頂けるとともに、本事業に対するスペイン政府観光局の後援を頂けるまでになった。地域での取り組みの継続が、グローバルへと繋がっていく、そんなことを体感した瞬間であった。






まちだアルタミラストリート入口の看板（上）と壁画（下）

## 4th ステップ
### 「地元お祭りへの出店」と「クラウドファンディング」による資金調達

ここで「まち☆クリ」事業を進めていくうえでの、資金源について触れておきたい。「まち☆クリ実行委員会」は、活動の目的に賛同してくれる地元の有志により構成されているボランティア団体である。会費等も特に徴収していない為、資金源は常に課題となる。

私達の活動資金の多くは、地元で開催されるお祭りや各種スポーツ大会等に模擬店を出店し、活動の紹介とあわせて、綿菓子、焼き鳥などを販売することによる売上により成り立っている。独立独歩の精神で活動している為、いま街にとって必要であると自分たちで考えたことを、すぐに実践できる強みがある。

一方、「まちだアルタミラストリート」の計画には多くの費用が必要となった。自分達で出来ることは自ら行うようにしたが、それでもパネル作成、施工費等で、約100万円近くの事業費が必要な計算となった。そこで私達が注目したのが、インターネットを介して、活動の目的などを伝え、それらに共感した人から資金を募る仕組みである「クラウドファンディング」であった。多くの皆様のご支援のおかげで、無事目標額を達成することができた。また、クラウドファンディングの運営手数料は町田市の「まちだ〇ごと（まちだまるごと）大作戦18-20」の対象事業に認定頂き、助成金により実施することができた。市民主体で行うまちづくりにおいて、クラウドファンディングは非常に有効な仕組みであると考える。







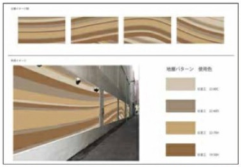

## 5th ステップ
## アートとの融合、今後への展開

資金の問題も解決し「まちだアルタミラストリート」の事業を本格的に展開する段階となった。ストリートギャラリーの中には、アルタミラ壁画のパネルを展示すると共に、「アルタミラ壁画」と「まち☆クリ」という2つのキーワードを現代の若者の視点で読み解いたアート作品を展示できたらと考えた。

そこで、地元のデザイン専門学校である「町田・デザイン専門学校」に協力を依頼し、「古代の覗き窓」というテーマを設定し、デザインコンペを開催した。提出された作品数計87点から選ばれた8作品をストリートギャラリー内に展示することとなった。

当初計画では、落書きを消した壁面に作品を展示するだけの予定だったが、審査員の方より、背景の壁面を洞窟のように地層で表現してはどうかという提案があがった。予算的な問題もあり、知人・友人などに声をかけ、自分たちで自ら施工をすることになった。みんなで施工をしていく過程で生まれてきた気持ちは「この場所に二度と落書はさせてはいけない」という思いであった。このような思いの積み重ねが、「街を変える力」になっていくのであろう。

まち☆クリの活動は、落書き消しという手法を通して、治安向上、世代間交流、地域ネットワーク形成、地域愛の醸成、まちづくり等、色々なところに展開できる活動である。私達と同じく、落書きの問題を抱えている地域に、まち☆クリのノウハウを展開していくことが、今後の目標の一つである。



地層パターン。デザインは審査員である赤瀬氏による



落書きのある壁面を、アルタミラ壁画の洞窟を連想させる地層のギャラリーへと塗り替えた。作業は地元の塗装会社の指導のもと、地域住民、関係者によりセルフメイドで実施。使用した塗料は、塗料メーカーより提供された。

デザインコンペに提出された
87点全作品



# 「まち☆クリ まちだアルタミラストリート」事業を振り返って

**文＝赤瀬公男**
**（株式会社ACデザイン代表取締役、まちだアルタミラストリートデザインコンペ審査員）**

今回の事業を、パブリックアートという視点で振り返ると2つの特徴がある。

ひとつ目は「誰でも参加できる、参加したくなるアートづくり」である。今回の事業では地元の学生から作品を募り、ギャラリーの背景はセルフメイドでつくられた。その結果、有名な作家やプロによる完成された作品でなく、将来への発展の可能性をもつ、関わったみんなで育てていきたいと思える作品や空間がつくられたのではないだろうか。関わった人々の中に、この次はさらによいものを作ってみたい、来訪者の中から私もアートに触れてみたいという思いが生まれ、それらの思いが今後の「まちだアルタミラストリート」を更に磨き上げていくことになるだろう。

ふたつ目は「思いをつくりだす」というプロセスである。落書きで溢れていた裏通りの空間に対し、「落書きを消す」「ギャラリーをつくる」「作品を考える」「まち☆クリへ参加する」という各プロセスを通じて、多くの人々の思いが注ぎ込まれた。それら多くの思いがインタラクティブに作用しあっているのが、今回のまちだアルタミラストリートである。たくさんの思いが集まったこの空間には、今後落書きをされることはなくなるだろう。

そして、この2つの特徴は、この事業を継続していくことで、その効果がさらに発揮されていくだろう。このストリートが起点となって、「街が人を育てる」という流れが生まれることを願う。

審査風景



**まちだアルタミラストリート**

【所在地】
東京都町田市原町田 4-2-14 南東側壁面

【主催】
まち☆クリ実行委員会

【後援】
町田市、町田商工会議所
町田市中心市街地活性化協議会
スペイン政府観光局

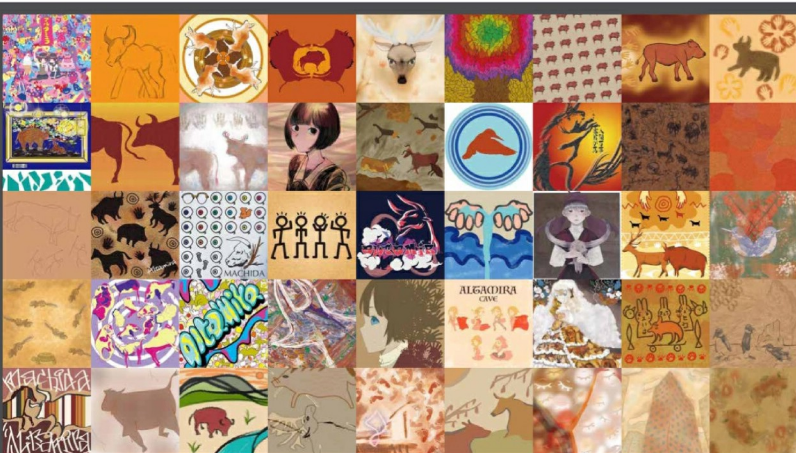
【デザインコンペ協力】
学校法人東京町田学園 町田・デザイン専門学校

【壁画施工協力／塗料協力】
株式会社清水建装／関西ペイント販売株式会社

【エントランス看板デザイン協力／
キャラクターデザイン協力】
倉橋伸治（478）／
町田の地域情報メディアサイト まちだけ。

【企画・プロデュース】
赤瀬公男（株式会社 AC デザイン）
成瀬敏一（Design Studio コネクト）






## 公共空間の再構築を目指す社会実験

# 「WORK PARK PACK」プロジェクト

東京都渋谷区

主催＝一般社団法人渋谷未来デザイン
共催＝ULTRA PUBLIC PROJECT※1
特別協力=東京急行電鉄株式会社／渋谷ストリーム／Rhizomatiks Architecture／一般財団法人渋谷区観光協会／Flying Tiger Copenhagenを運営するZebra Japan株式会社
写真＝編集部、渋谷未来デザイン＊（p20～21以外）

一般社団法人渋谷未来デザイン（以下、渋谷未来デザイン）は公共空間の再構築を目指す取り組みとして、渋谷川沿い水辺空間「渋谷リバーストリート」利活用の社会実験プロジェクト「WORK PARK PACK（ワークパークパック）」を2019年３月１日（金）より実施中。これは、「WORK（ワーク）」の意味を広義にとらえ、ビジネスパーソンだけではなく、渋谷で生活、活動するすべての人とオープンにWORK の可能性を創造し議論するプロジェクト。「パブリックスペース×WORK」を実際の公共空間にて、公共空間の可能性を引き出す道具であるPARK PACK※2を活用し、渋谷川沿いならでは利活用のアイデアを検証する社会実験である。

※1 ULTRA PUBLIC PROJECTとは
hizomatiks Architecture、ティー・ワイ・オー、電通ライブの３社のメンバーで立ち上げたユニット。Tokyo Midtown DESIGN TOUCH 2018 より、新たに、日建設計、プロペラ・アンド・カンパニーが加わる。“We are the city.” の旗印の下、ハード面の開発ではなく、人を中心にしたさまざまなソフトウエアの視点で街づくりを考え、提案していく。

※2 PARK PACKとは
移動式の公園「PARK PACK」は、デザインイベント「Tokyo Midtown DESIGN TOUCH 2018」（2018年10月19日～11月4日）を主催する東京ミッドタウンより、「みらいの公園」を作ってほしいとのオファーを受け、イベントのコンテンツとして発案したもの。「PARK PACK」の中に備わったさまざまなツールによって、公園が、あたらしい未来の遊び場になったり、ライブステージに変わったり、ミュージアムになったりと、多様なアクティビティやプログラムに変わる。


SANSUI
MMS

# 渋谷川の変遷

田原光泰（白根記念渋谷区郷土博物館・文学館 学芸員）






上／図1：明治初期の玉川家の庭園と渋谷川（玉川家庭園屏風）。描かれている水量の豊かな流れは渋谷川で、川をせき止めて水車へ水を導いている様子がわかる。下／図2：川の水源がある大名屋敷



写真1：大正10年頃の渋谷川。現在の渋谷駅南の稲荷橋付近といわれる。板柵などの護岸の上に、家屋が川にせり出している





写真2,3：渋谷川下流の洪水被害状況。左／昭和4年5月23日の山下橋付近。右／同年9月10日の恵比寿橋付近

渋谷川は、新宿御苑の池や明治神宮の「清正の井」などを水源として流れる全長約5kmの河川である。港区に入ると古川と呼ばれ東京湾に注ぐ。現在、上流域は暗渠化され、二級河川の「渋谷川」と呼ばれるのは、新渋谷橋（国道246号線）から天現寺橋までの2.4kmとなっている。

## 1.明治以前の渋谷川

江戸時代、江戸中心部から西に向かうと、渋谷川を越えたところで、武家屋敷や町は急速に少なくなる。渋谷川は都市と郊外のはざまを流れる川であったといえよう。渋谷川のもう一つの特徴は、その水源のいくつかが大名屋敷内にあるということである（図2）。新宿御苑はもともと内藤家の屋敷であったし、「清正の井」のある明治神宮も井伊家の下屋敷であった。そして屋敷を流れでた川は、今度は水田の中を流れ、途中でいくつもの水車を回していた（図1）。このような都市と郊外のはざまを流れる川としての性格は、明治時代に入っても大きく変わることはなかった。

## 2.昭和初期の改修工事

しかし明治時代の後半になると、本流の周辺では都市化が進みはじめ、しだいに流域の様子も変わってくる。河岸ぎりぎりまで建て込む家屋（写真1）、そうした急速な宅地化がもたらす雨水の流入増加は、渋谷川流域に深刻な洪水の被害をもたらすようになった（写真2,3）。そのため昭和2年に、東京府による大規模な改修工事が計画され、4年から6年にかけて、渋谷川の下流、宮益橋から慶応橋（現在の天現寺橋付近）の間で工事が行われた（写真4）。

場所によって異なるが、この改修によって川は基本的にコンクリート三面貼りの姿となり、それまで蛇行の激しかった流路は直線状に変更され、川の姿は大きく変わった。現在の流路や形状の原型は、このときにほぼ定まったものである。そして昭和7年の渋谷区の成立、東京市への編入とともに、渋谷川流域はすべて市内に入ることになり、渋谷川は文字どおり都市の川となった。なお、8年以降、上流でも工事は進められたが、戦争などの影響もあってか完成には至っていない。

## 3.戦前の下水道計画

このころの急激な宅地化は、水害とは別に、河川の汚染などによる衛生問題も引き起こしていた。そのため東京府では、大正時代から、渋谷町などを含む東京市隣接の

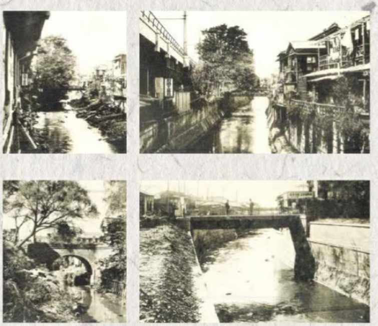


写真4：渋谷川改修工事における改修前（左）・改修後（右）の様子。上／金王橋付近。下／恵比寿橋付近

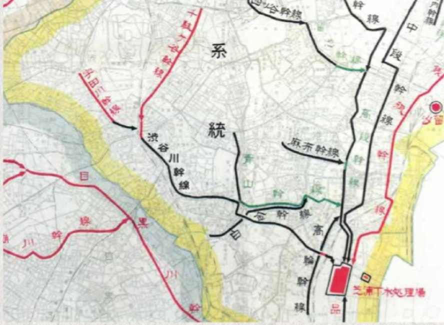



図3：「東京都下水道計画図」（昭和36年12月現在）（部分）。黒い線が昭和36年段階での既設下水道幹線、赤い線が予定線。既設の渋谷川幹線は明治通りの下に建設されたもので、このあと渋谷川上流を暗渠化して千駄ヶ谷幹線が完成する



写真5：昭和63年 改修工事中の渋谷川。左／氷川橋付近。右／庚申橋付近

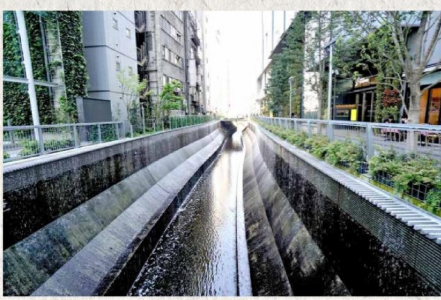


写真6：現在の渋谷川（稲荷橋下流から渋谷リバーストリートを見る）（撮影＝編集部）

各町村において下水道に関する調査を進めていた。それに基づき昭和5年、東京都市計画郊外下水道が策定された。この計画では、渋谷川の支流は暗渠化を予定していたようだが、本流に関しては河川に沿って下水道幹線を別に造ることが決定されていた。下水道幹線に集めた下水は、羽田に建設予定の下水処分場に送るという壮大な計画であったが、戦時下にあって事業化はほとんど進まなかった。

## 4.戦後の下水道計画

そして戦争が終わると、東京都では将来の都市中心部の発展をみこして、下水道計画の見直しを進めることとなり、あらためて東京特別都市計画下水道を昭和25年に策定した。この計画が渋谷川をはじめとする中小河川にとって画期的だったのは、河川の上流部そのものを暗渠化するということであった。つまり、上流を下水道幹線として利用する現在の渋谷川の形は、このときに決定されたといえる。しかし戦後の復興の中で、下水道事業は後回しにされてきた。

## 5.オリンピックと上流の暗渠化

その状況が一転するのが、昭和34年に決定されたオリンピック東京大会の開催である（図3）。このあと急速に渋谷川流域の暗渠化が進み、渋谷川本流も39年の大会開催の前年までにほぼ暗渠化が終了する。これにより、暗渠の中を流れてきた湧水を含む下水は、渋谷駅近くにおいて、別に造られた下水道幹線に流されることになり、稲荷橋から姿を現す川は、ほとんど水の流れのない川となった。こうして渋谷から、川や水の流れる風景は失われたのである。

## 6.現在の渋谷川

昭和40年代に入ると、昭和初期に改修された護岸も老朽化が目立ちはじめた。そのため昭和末期から平成14年にかけて再び大規模な護岸改修工事が行われることになった（写真5）。その間に東京都において、下水処理水を利用した清流復活計画もたてられ、平成7年、落合水再生センターから送られてきた高度処理水が、並木橋の下から渋谷川に流され始めた。こうして川は現在のような姿となり、再び水辺の景色が生まれたのである。

現在も進む渋谷駅周辺再開発の中で、渋谷川流域は駅周辺整備の一環として、東横線跡地とともに整備されることになった（写真6）。そして平成30年、再生水はより上流の稲荷橋付近から壁泉という形で放流されることになり、現在、渋谷川は沿岸の遊歩道（渋谷リバーストリート）とともに新しい水辺空間を形成している。

p20〜21の写真・図版は『特別展　「春の小川」の流れた街・渋谷 ―川が映し出す地域史―』より転載（特記除く）

# 渋谷リバーストリート活用社会実験の背景と概要

後藤太一（渋谷未来デザイン プロジェクト・デザイナー）

## 公共空間の再構築を目指して

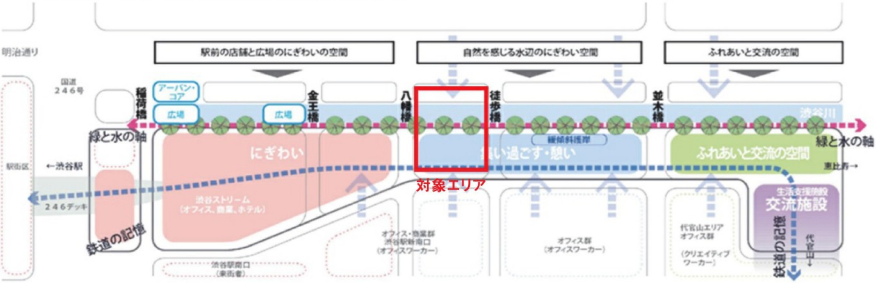
ニューヨークのタイムズスクエアなど海外の先進事例では、多くの市民が多様なかたちで街路を活用することで都市の活力を高めることに成功している。これに比べて、日本の都市では整備が先行して活用が後手に回ることが多く、結果としてポテンシャルを十分に発揮できないことも多い。

渋谷も例外ではない。百年に一度と言われる規模で渋谷駅周辺の再開発が進む中、それに伴って公共空間も多数生まれている。その多くは、とても清潔で機能的であり美しい。しかしながら、活用方法の検討が不十分なままで整備が先行した結果、供用開始時点では管理上の禁止行為にしばられがちで、活用が進まないことが多い。

本社会実験は、このような課題認識に基づき、渋谷未来デザイン※（以下FDS）が調整主体として、地域・企業・クリエイターなどと協働しながら積極的な活用を図り、その成果を検証することで、公益性と事業性を両立した渋谷リバーストリートの管理と活用の仕組みを検討するものである。

## 取り組みに至る経緯

渋谷リバーストリートは、渋谷駅周辺とりわけ渋谷駅南街区「渋谷ストリーム」とともに、渋谷川および旧東急東横線高架跡地に再整備された約600mに渡る帯状の公共空間である。2013年6月に都市計画決定した渋谷駅南街区プロジェクト（現・渋谷ストリーム）に合わせて整備された後に、2018年3月に河川敷地占用許可準則に基づく都市・地域再生等利用区域の指定により渋谷区が河川敷地の占用主体となり、さらに2018年9月の公募型プロポーザルで東京急行電鉄㈱（以下、東急電鉄）が施設使用者に選定された。東急電鉄はプロポーザル提案書において、企業との連携をテーマに、FDSとも連携し、地域活性化に繋がるようなイベント実施の検討を明記しており、これを受けて今回の社会実験が企画された。




ゾーニングイメージ（渋谷川環境整備協議会「広場整備コンセプト」から抜粋）

## 社会実験の概要

本社会実験は、2019年2月28日に渋谷ストリームホールで開催された「ミズベリングフォーラム2019」で公表、3月の先行期間を経て、4月から10月までの半年間に渡って行われる。

先行期間では、実験パートナー及び第一弾のアイデアを募集したところ、300を越えるアイデアが集まり、4月からはその実現に取り組みつつ、効果的かつ持続的な仕組みを探索する本格的な社会実験を開始した。

具体的には、整備コンセプト「周辺の活性化の始点となる、川沿いのオープンスペースの創出」を前提に、以下三つの検証テーマを掲げ、定量的データによる裏付けを基に、まちの価値を向上させ文化を育む仕組みを探っている。




道行く人々に声をかけてアイデアを募集する







集まったアイデア（左）の中から要望の多かったものを集計し、投票受け付けを行う（右）

(1) 地域還元：さらなるにぎわいだしや地域活性化の具体的な内容（コンテンツ）

(2) 収支構造：河川および地元への還元と経費の捻出を両立する収支構造

(3) 現場運営：にぎわいだしを強化しつつ良好な水辺空間を保全・創出する体制・仕組み

現場では、市民や企業と場所の接点を強化するため、ULTRA PUBLIC PROJECT（以下、UPP）が開発した「PARK PACK」のコンテナを3基設置し、「WORK＝つくる」をコンセプトに、コンテナ内と周囲の屋外空間にて、様々な企業や団体と連携した取り組みを実施している。

社会実験の座組みは、主催FDS、共催UPPに加えて、多くの協賛・協力・後援をいただいている。4月からは、渋谷区が後援から共催（予定）に関与を深め、渋谷ストリーム（東急電鉄）と一般社団法人渋谷駅前エリアマネジメントの協力も得ている。今後、コンテナを現場に設置した取り組みを6月末まで行った後、その成果を検証・評価して、9月の「ソーシャル・イノベーションウィーク」という渋谷のフラッグシップ・プロジェクトにて成果を発表する予定である。



けん玉イベント「Shibuya Spring Sesh」（2019.4.13）。ニュージーランドやアメリカからもプレイヤーが駆けつけたこのイベントには、日本各地からけん玉プレイヤーたちが集結した＊




＊

**WORK PARK PACK プロジェクト**

| | |
|---|---|
| 主　催 | 一般社団法人渋谷未来デザイン |
| 共　催 | ULTRA PUBLIC PROJECT |
| 特別協力 | 東京急行電鉄株式会社／渋谷ストリーム／Rhizomatiks Architecture ／一般財団法人渋谷区観光協会／ Flying Tiger Copenhagen を運営する Zebra Japan 株式会社 |
| 後　援 | 渋谷区 |
| 場　所 | 東京都渋谷区渋谷三丁目23番（渋谷川2-1区間） |
| 期　間 | 2019年3月1日（金）～2019年9月30日（月） |

FUTURE DESIGN SHIBUYA 渋谷未来デザイン

※一般社団法人渋谷未来デザインは、ダイバーシティとインクルージョンを基本に、渋谷に住む人、働く人、学ぶ人、訪れる人など、渋谷に集う多様な人々のアイデアや才能を、領域を越えて収集し、オープンイノベーション により社会的課題の解決策と可能性をデザインする本格的な産官学民連携組織です。 http://fds.or.jp

（2019.4.22　16：00開催）

【トークセッション】

# ストリートの未来を話そう
## ～対話とアイデアでつくる渋谷川～


加藤 翼氏


後藤太一氏

［ファシリテーター］

**齊藤精一**氏（株式会社ライゾマティクス代表取締役、一般社団法人渋谷未来デザイン FUTURE DESIGNER）

［登壇者］

**加藤　翼**氏（100BANCH コミュニティマネージャー、株式会社ロフトワーク コミュニティデザイナー）
**後藤太一**氏（一般社団法人渋谷未来デザイン プロジェクト・デザイナー）
**田原光泰**氏（白根記念渋谷区郷土博物館・文学館 学芸員）
**永井礼佳**氏（カフェ・カンパニー株式会社 新規事業開発部）
**山羽真梨那**氏（城西国際大学メディア学部／渋谷未来デザインサポート・スタッフ）
**山中伸悟**氏（Zebra Japan株式会社 マーケティング部マネージャー）
**吉澤裕樹**氏（東京急行電鉄株式会社 渋谷開発事業部 渋谷運営グループ兼沿線生活創造事業部 エンターテインメント戦略グループ主査）

### 「WORK PARK PACK」を運営してみて

**齋藤**　渋谷川「WORK PARK PACK」プロジェクトは今年の3月から始まりました。第1回目は私も登壇させていただいた河川空間活用アイデアミーティングを通して、水辺からの街づくりについて考える「ミズベリングフォーラム」のイベントの日に発表し、それ以降いろんな展開をしています。まず、実際に運営をしている山羽さんからお話を伺いたいと思います。

**山羽**　渋谷リバーストリートに設置されているPARK PACKの3台あるコンテナの内の一つを使って、道行く皆様からこの水辺空間を使ってどんなことをしてみたいかを、手形の付箋をパネルに貼っていただいたり、A4サイズの紙に絵を描いていただいたりなどして、約1ヶ月間、様々なアイデアを募集していました。平日の渋谷はオフィス街なので、働いている方が多かったのですが、代官山まで歩いている大学生も見かけました。土日は家族連れやご夫婦といった幅広い年齢層の方々が通っている印象を受けました。今年4/13（土）に行われたけん玉のイベントでは、世界チャンピオンが子どもたちにけん玉を教えたこともあります。また、ここが渋谷川だということを知らず、中には驚かれている方もいました。



＊

**齋藤**　渋谷川をこうして活用できるようになったのは、色々な調整があって、行政関係者にもガイドラインの中で、特例で認めていただき、このような試みが実現できたんですよね。

　アイデアを募集したところ、ちょい飲み屋（屋台）をやってみたいという意見が多かった。しかし、屋台はいざやるとなると実現が難しい。本日はその辺りも追求し、そもそも川辺はどのように活用したらいいのかということを考えていきたいと思っています。まずは、後藤さんからこのイベントを開催するにあたっての経緯をお聞きしたい。

**後藤**　私は渋谷ストリームがオープンし、渋谷リバーストリートをもっと活用できるのではないか、ということを問題意識として感じていました。そこで、渋谷川を所有している東京都や借りている渋谷区、管理している東京急行電鉄等に相談にいったところ、いろんな箇所の手続きが非常に入り組んでいることが分かり、それを確認し整理することが最初の課題でした。今回のような社会実験は新たな制度を導入する前に時間を区切って行うものです。だからどのようなやり方が良いのかという明確な答えはなく、失敗を重ねながらも良いやり方を皆で


齊藤精一氏


田原光泰氏


永井礼佳氏


山羽真梨那氏


山中伸悟氏


吉澤裕樹氏

見出していく必要があります。その舞台を渋谷未来デザインがつくることができればと思っています。

**齋藤**　先ほどお話しした屋台のようなアイデアは、一人一人が頑張っても、全体像を分かっている人でないと実現するのはとても大変です。ですから、渋谷未来デザインという組織の観点からしっかりと行政や法律的な事情も解決していくことが必要ですね。

実際に運営・運用を約一ヶ月やってみてどうでしたか。

**後藤**　やってみて学ぶことが多いと思いました。いろんな人にご迷惑をおかけしたと思いますが、そこは皆で一緒に学んでいきたいと思っています。現在も知らなかったことがたくさん出てきて、それを整理している最中です。

**山羽**　渋谷ではよく「多様性」という言葉が使われます。約1ヶ月間、老若男女問わずいろんな方々のお話を聞いて、多様性とはこういうことなのだと体感しました。

**吉澤**　今回の試みは面白いと思いますが、もう少しいろんな活動がどんどん出てきてもいいのかなと。ですが、運営の準備や仕込みが大変そうですよね。

**齋藤**　私はいろんな行政や企業と組んでイベントを企画する立場ですが、実際に運営をしてみるととても難しいことが分かります。せっかくこのような枠組みをつくったのだからできるだけ活用したいという思いは同じですが、運営はお金だけでなく、人間のモチベーション的なコストも考えなければなりません。ですが、誰かがモノを動かしたり、誰かと話したり、何かアクションを起こしたりしなければ前には進んでいかないと思います。

## 渋谷川のポテンシャル

**齋藤**　100BANCHを運営しているお二人は、この渋谷川に対してどのようなポテンシャルを感じていますか？

**加藤**　100BANCHはオープンからもうすぐ2年目を迎えます。100BANCHができた当初は、渋谷川は裏道で、100BANCHにくる人や社員しか通らない道でした。ですが、去年の10月にこの空間がオープンしてから人の流れが明らかに変わりました。また、PARK PACKの迫力・存在感は大きいと思います。ここで開催された、けん玉のイベントのような風景が日常的に見られれば良いなと思っています。渋谷は公園が少ないので、目的がなくても集まる場があることは都市の余白として必要だと思っています。

**永井**　コンテンツを持っている人はたくさんいて、また、その場所を探している人もたくさんいます。だけど、それを企業にもちこんでも新しい事例や決まっていないことは手間がかかるため参加を躊躇することもあるかと思います。現在は社内以外でも個人でいろんな活動をしている人がいます。このような、川という外の空間で自分たちのしていることを表現できる機会はなかなかありません。そこをどのようにしてうまくつなぐかが課題だと思います。このようなトークセッションを定期的に行っていくのは良いと思います。

**齋藤**　渋谷川のどのようなところに魅力を感じるかを山中さんにお聞きしたい。

**山中**　まず、弊社Flying Tiger Copenhagenには2つのコミュニティがあります。1つが「パーティー部」、ホームパーティーを皆で楽しもうというコミュニティ。もう1つは昨年立ち上げた「あそ部」、弊社の取り扱うグッズを使って遊ぶコミュニティです。そのような何ができるか分からないコミュニティの中で、まだ使い方も分からない場所



手形の付箋にアイデアを書いてもらう*



Flying Tiger Copenhagen あそ部オフ会（2019.5.11）。 川沿いを150人の参加者が思い描く公園に飾り立て、思い切り遊んだ（写真＝Flying Tiger Copenhagen）

があったら面白いのではないかと場所探しをしていたところ、渋谷未来デザインからこのプロジェクトのお話があり、この場所を使わせていただくことになりました。表通りのイメージはありますが、この空間に関しては特定のイメージがない、いい意味で色がないと思っています。この空間をどう料理するかといったクリエイティビティを皆で確かめ合う・共有することができたコミュニティのつながりは強くなるのではないかと思っています。

**齋藤**　皆さんの話をお聞きしていて、やっぱりこの場所にポテンシャルを感じる人は多いのだと思いました。渋谷がどんどん変わっていく中でこの渋谷川も変わっていっているのだという印象を受けます。

## 集まったアイデアとその実現について

**齋藤**　今回のプロジェクトでどのようなアイデアが集まったのでしょうか。

**山羽**　ここ1週間、考えていただいたアイデアの投票を受け付けていました。オフィス街なので、働いた後にちょっと飲みたいという要望が多かったようです。自然との触れ合いの場を求めている方も多く、動物との出会いの場や芝生をひいてピクニックをして飲みながら映画を見てみたいという要望もいただきました。また、小学生の要望で多かったのが意外にも流しそうめんでした。人との出会いを求めている方も多く見受けられました。

**後藤**　短期間で300以上のアイデアが集まったのはとてもうれしいことです。私たちは課題を解決するだけではなくて、何が地域のため、河川のためになるのだろうかということを常に考えています。もう1つは、このアイデアを誰が実現するのかということです。アイデアを出していただいた人はいるけれど、企業も交えながらアイデアを実現していくという役割を渋谷未来デザインが担った時に、どのような企業・団体と一緒にやったらいいのだろうということを真剣に考えています。中には実現が難しいものもありますが、できるだけ挑戦してみたいと思っています。

**齋藤**　ほとんどの人が、ここに川があることに気づいていなかったはずです。今回のプロジェクトは各々がこの川がどのような空間だったのかということを考えるいい機会にもなっていると思います。ですから資金やモチベーション、協力体制的なものが許すのであれば、これらのアイデアをどんどん実現していくべきだと思っています。このような投げかけをしなければ現実のカタログから選ぶような安易なプロジェクトで終わってしまう気がします。

## 渋谷リバーストリートの活用法

**齋藤**　私は渋谷川が再度表に出てきたとい








子供向けワークショップ「渋谷川に鯉のぼりを流そう」（2019.4.29）。透明なプチプチをキャンバスに、自由に絵や模様を描いて自分だけの鯉のぼりを作り、5月5日のこどもの日まで、川沿いに掲揚した（3点とも＊）

うことがすごいと思っています。谷があるから渋谷という地名であり、これだけの文化が集まってきています。このような谷の一番下に脈々と流れる渋谷川が再度表に出てきたことに対してはいかがでしょうか。

田原　渋谷川は子どもの頃、たまたま工事があって空き地になった時などに間近で見る機会がありましたが、普段は川沿いに東横線が走っていてビルに挟まれているため見ることができませんでした。谷は自然と水が集まるところで、同じように人も集まってきます。今回、渋谷川がこのように開けて人が集まってくる場所になり、これからいろんなことができるようになったのだということを改めて実感しました。

齋藤　渋谷ストリームがオープンして半年位、100BANCHができて2年位でしょうか。オープンして分かったこと、こういうことをしたらいいのではないか、こういう人がいたらいいのではないかということを吉澤さんと永井さんにそれぞれお聞きしたい。

吉澤　渋谷で川が見えている空間はほとんどありません。また、水の流れは理論では語れない可能性を秘めているのではないかと思っています。ですから渋谷区には新しいもの・要素が生まれるといった提案を提出しています。渋谷ストリームの開業時にはいろんなイベントを企画しました。ですが、弊社だけでは、やり切れていないこともあるので、これからいろんな人といろんなことをやっていければいいなと思っています。

齋藤　「いろんな人といろんなことをやっていければいい」ということは重要なことです。つまりその管理はどうするのか、こんな借り方・貸し方はできないのかという問題が出てくる。

永井　私が100BANCHの運営で入っていた時は、この場所を借りるためにはいくら必要なのか、会社のロゴを出すことができるのか、音や電源はどうするのかというような問い合わせをいただきました。やりたいことがあっても行政や運営会社との折り合いがつかないまま実現できなかったプロジェクトもあることを聞いていたので、そこを解決できるポイントがあれば、より、この空間を有効活用できるのではないかと思っています。

齋藤　今回300以上のアイデアが出てきている中で、そもそもどこに問い合わせればいいのかが分からない。そのようなことに関しては、1つはルールに則ってやる、もう1つは正面を切って規制を緩和するということ。規制緩和は戦略特区である以上、大義名分としてあると思います。そうしていかなければ場所は変わっていかないと思います。最後になりますが、渋谷リバーストリートの可能性について今回このようなアイデアが出てきてどのように感じたか。加藤さんにお聞きしたいと思います。

加藤　100BANCHもここ一帯が実験をする場所となり、街に開いていくという発想で始めているので、コンセプトも実験所ではなく「実験区」としました。100BANCHのプロジェクトの中にも、昆虫食や電動キックボードのシェアリング、バスを改造して移動型の住居をつくるバスハウスといったリスクの高いプロジェクトもありますが、少しずつでも街に開いてそのような実験をしていかなければ当たり前にならないと思っています。プロジェクトは誰かがリスクを背負って実験をしていかないと生まれません。そういう人がどれだけいるのかが重要だと思います。

齋藤　おっしゃる通りだと思います。WORK PARK PACKは実験段階ということもありますが、そこをつくりあげていかなければ短期の実験の場で終わってしまいます。皆さんがこれだけポテンシャルを感じていて、渋谷の谷が体現でき、しかも表とは全く異なる表情を見せている。このような素晴らしい空間を有効活用しない手はないと思います。本日はありがとうございました。

# 笹塚ヒロバ！
## ～みんなでつくる駅前広場～
### 京王電鉄笹塚駅

東京都渋谷区
事業者＝京王不動産株式会社
協力＝VUILD株式会社
写真＝Hayato Kurobe、VUILD株式会社*

**Station square to be made with local residents.**
**"SASAZUKA HIROBA!"**

Shibuya, Tokyo
Project by KEIO REALTY & DEVELOPMENT CO., LTD.
Photo by Hayato Kurobe, VUILD Inc.*




SASAZUKA TERRACE
笹塚テラス
LAWSON
RACE

## 「笹塚ヒロバ!」とオリジナルベンチ

京王電鉄株式会社と京王不動産株式会社は、京王線笹塚駅前のビルを改修し新たに長期滞在者向けの宿泊施設「KARIO SASAZUKA TERRACE」をオープンした。ビルの改修にあたり、日ごろから交流のある地元商店会と協議し「KARIO SASAZUKA TERRACE」につながる広場のリニューアルを行った。この広場を「笹塚ヒロバ!」と命名し、笹塚駅前広場を地元と笹塚を来訪する人の交流の場となることを目指し、そのデザインコンセプトを「みんなでつくる駅前広場」とし地元とともに広場のリニューアルを進めてきた。

この広場のシンボルとしてオリジナルベンチを設置することが協議において決められた。ベンチの製作にあたりVUILD株式会社の協力のもと、木工用3Dプリンターで切り出されたベンチのパーツを地域住民参加のワークショップにより組み立てられた。木材の一部には多摩産材が使用され、新宿と高尾を結ぶ京王電鉄のつながりを線路だけではなく、産地とのつながりを意識してもらう試みもしている。さらに広場をペイントするイベントなどベンチを活用した催しを定期的に開催し、「笹塚ヒロバ!」から地元とのつながりを育み、地域活性化を目指している。また、「KARIO SASAZUKA TERRACE」の地下1階には地域交流ラウンジ「笹塚アキチ!」が開設され、「笹塚ヒロバ!」とともに様々なイベントや催し物などを通して情報発信の場としての活用が期待される。

駅は、地域に住むほとんどの人が毎日利用する場所である。そこを拠点に何かを発信していくことは、地域活性化や街づくりに対して大きな効果が発揮できると考えられる。そのためは事業者が率先して地域と共に活動することが必要だ。　（文＝編集部）







活動的な街の人の流れをイメージした波を打つようなデザインが特徴的なベンチは、曲線により座面の高さが異なるためおとなから子どもまで幅広い層が活用できる。また移動が可能なため広場のレイアウトが自由に変更できる



## 地域と一緒に行う街づくりはお互いの顔が見えていることが大事



**話＝松石徳仁**
**（京王不動産株式会社 営業企画部企画担当上席課長）**

文責＝編集部

### 広場をともにつくる

笹塚駅前広場は毎年2～3回ほど町内会や商店会のお祭りなどに提供しています。本プロジェクトは広場前の建物を宿泊施設を含めた施設へのリノベーションが主たる目的で、広場については派生的なところがあります。しかし、工事期間中は工事ヤードとして広場を閉鎖したため、地域の広場としての親しみをもう一度持っていただきたいと思い、広場のリニューアルとベンチの作成を企画しました。

広場のリニューアルは町内会、商店会の方たちと意見交換をしながら一緒につくっています。町内会、商店会の方たちはリニューアルにあたり、広場が整備されることであまり好ましくない人たちが長時間滞在することへの懸念を抱いていましたが、新しい試みについては歓迎したいとおっしゃっていただきました。

皆さんと打ち合わせをする中で、子どもたちも遊べるようなものを置いたらどうかということになり、ベンチの設置が決まったという経緯があります。笹塚は人に対してフレンドリーな地域性であることも手伝って、私たちも日ごろから親密なお付き合いをさせていただいていることもあり、地域の方と一緒につくることは自然な流れであったと思います。

VUILDさんは、不動産･建築の企画プロデュース企業である株式会社スピークの林厚見さんからご紹介いただきました。林さんに、デジタルをキーワードに地域に対して親密感を高める素材、主に土や木を使い加えてワークショップも展開したいと相談したところVUILDさんの名前が挙がり依頼したというのがVUILDさんに決めた経緯です。加えてVUILDさんには町内会、商店会の方たちとの打ち合わせで話し合った好ましくない人が長時間滞在しないこと、子どもたちが遊べることという2つの条件をお伝えしました。

### 事業の観点から地域をみる

ワークショップの呼びかけは、商店会のお祭りにブースを出店させていただきそこで募集しています。私たちにとって初めてのワークショップではありましたが、参加された方たちの楽しそうな様子を見てうれしくなったことを覚えています。地域の方たちと一緒に何かをつくることで様々な人の意見を聞くことができるので、私たちにとっても大きなメリットがあると思います。ただ、あまりやり過ぎてしまいますと行政の領域にまで踏み込んでしまうことが危惧されますので、事業者としてどこまで関わるかは予め決めておく必要があります。ですが今後も、地域の方たちと一定の距離感を保ちながらワークショップや共同事業を続けていきたいと思っています。

街づくりの上位計画は行政によるものであると認識していますが、その前段階でいろいろと関われることがあると思います。私たちの



主たる業務はプロパティマネジメント（主に不動産に関す資産の管理を行うこと）ですが、その観点から、街の課題を地域の人たちと一緒に解決していくことができるのではないかと考えております。

今回、宿泊施設を作るにあたり浮かび上がった課題として、違法民泊問題がありました。勿論、違法は論外で行政に動いていただくほかないのですが、正規の民泊は街にとってプラスになるはずです。我々は広場づくり、街づくりのワークショップを通じてお互いに顔の見える状況を作ることで、街の問題を一緒に事業の観点から解決していくことができるのではないか？という感触を得ることができました。


広場を俯瞰する

### 地域を一緒に考える

VUILDさんは地産地消を目指しているところがあります。今プロジェクトでは多摩産材を使っていますが、京王線は八王子まで走っていますので八王子と笹塚を繋げる意味でもよかったと思っています。鉄道会社の役割として外からのお金で地域を豊かにすることと、地域内の相互取引により資本の外部流出を避け、地域に還元することがあると思います。今回の多摩産材の活用はまさに後者です。

地域の方たちが地域を自分たちのものとして考えてもらえることにどれだけ貢献できるか。地域の課題を地域と一緒に解決していくことは鉄道会社や不動産会社にとっても有益なことだと思います。問題や課題を自分たちの力で解決するような気運がある街は、いい街をずっと維持できるはずで、それは我々事業者の利益にも通じると考えています。

（2019年5月8日京王不動産株式会社にて）




ワークショップでは切り出した木材のヤスリ掛け、防腐剤の塗布、組立てが行われた

# 地域が自立する健全なまちづくりのために

**笹塚駅前広場のリニューアルにおいてベンチ製作に協力したVUILD株式会社は、テクノロジー技術により、モノづくりを市民の手に戻すという大きなビジョンを掲げている。そのことにより市民活動が一部の人のものではなく地域全体としてより活発化することが期待できる。さらに、市民がモノづくりの行程そのものを手中にすることで、日本の物流が大きく変わると秋吉浩気氏（VUILD株式会社代表取締役）は期待を寄せる。VUILD株式会社が取り扱う木工用3Dプリンター「ShopBot」とそれをより効果的に活用するためのプラットフォーム「EMARF」がそれを可能にすると秋吉氏は話す。それらテクノロジーを駆使し建築、家具、公共空間のフィールドに新風を吹かせる秋吉氏に話を聞いた。**

写真＝黒部駿人（特記を除く）　文責＝編集部

## テクノロジー技術で社会を変える

話＝秋吉浩気
（VUILD株式会社 代表取締役）


写真＝編集部

### CNC木材切削機「Shopbot」

当社は米国製のコンピュータ数値制御（CNC）木材切削加工機「Shopbot」の販売代理店です。これまでこの種の機械は1500万円とか3000万円もするような高価なものでしたが、Shopbotはそれこそ新車1台分の価格で購入ができ、実際アメリカでは個人がShopbotを使い、ホームセンターで合板を購入し家具をつくったり小屋を建てたりしている状況が生まれています。大きな家具から建築的なものまで、その製作が個人の手に戻ってきていることは革新的なことだと思っています。

日本では50年、100年かけて育てられた良質な木が流通過程の中で規格材に加工され、中央に集約され中央の工場で製品化され、生産者と消費者が完全に分断されているのが現状です。生産者がShopbotを持てば消費者は良質な材を使った製品をリーズナブルな価格で直接手にすることができます。例えば、UberやAirbnbというプラットホームがあります。Uberはタクシー運転手とタクシーを利用したい人を、Airbnbは部屋を持っている人と部屋を借りたい人を直接つなげるプラットホームです。つまり、提供者と利用者がタクシー会社や不動産会社を介さずにつながることができるシステムです。それと同じようにShopbotが材を持っている人と家具や建築をつくりたい人を直接繋げることが可能になります。そのためのプラットホームである「EMARF」を当社で立ち上げていますが、そのソフトを介して生産者と消費者が直接つながる社会をつくることが当社のビジョンです。

現在、北は北海道から南は熊本まで35台のShopbotが購入されています。素材の生産者や工務店が中心ですが、2020年に100台を目標に掲げています。

キャリアの第一号は「カマタ ブリッヂ」という賃貸住宅でした。ここでShopbot付き賃


CNC木材加工機「Shopbot」。（写真＝VUILD株式会社）



貸住宅を展開しました。日曜大工の延長としてShopbotがあり、日々つくり続けるみたいな暮らし方もいいかなと。いずれは団地に1台Shopbotもあり得るんじゃないかと考えています。

また、学芸大学のキャンパスに移動式のShopbotを持ち込み、13組の親子にその場でオーダーしてもらった家具のパーツをつくり組み立ててもらうというワークショップも開催しました。普及するうえでオンラインだけではなく、こうしたリアル体験の場をつくることも必要だと考えています。僕らはこれまでにない新しい市場をつくろうとしています。ですから毎日が真剣勝負です。

## 市民の力でつくり、自治する社会

こうした普及活動という水平展開をしながら、同時に家具だけではなく建築とかオープンスペースやソーシャルデザインへの活用など垂直方向の展開も考えているところです。ソーシャルデザインの領域になりますが、現状の地域おこしは人に依存していることが多いのではないかと思います。リーダーシップのある人がみんなを引っ張っていっているのが現状で、その人がいないと何も成り立たない状況になっている地域もあるのではないでしょうか。つまり何が問題かと言うとそこには再現性が無いということです。

ところが、データーとテクノロジーがあれば確実に再現できます。この再現性こそデジタル技術の大きなメリットだと考えていて、今号で紹介されている笹塚駅前広場でつくったベンチもデーターとして誰でも共有ができ、再現できるわけです。その際、EMARFというプラットホームが必要にはなりますが、笹塚駅のベンチと同じものが熊本でもできてしまうんです。特定の人に頼らなくても、地域の人たちだけで必要なモノがつくれるわけです。地域の公共空間を市民の力でつくれるようになると楽しいですよね。

自分たちの街や地域を自分たちの力でつくり自治していく社会に興味を惹かれます。公共空間の場合、自分たちでいろいろな意見を出すことはできますが、結局はその意見を集約しデザインするプロが必要であり、それを生産するプロも必要になります。

プロフェッショナルが来ないと何も実現しないという世界観を変えたいです。自分たちに必要な空間を自分たちでつくることは、健全な世の中のあり方ではないかと考えているところがあり、そのネックとなっているモノをつくる能力がないことをテクノロジーで解決したいとの想いで活動しているところです。

## 公共空間、ランドスケープへの活用

僕の考える公共空間は、行政施設だけではなく企業が所有する公開空地ですとか企業のオフィスビルの空地なども対象です。特に今は、企業が所有する土地をパブリックに開放する動きが顕著で、その動きに賛同します。笹塚駅前も京王電鉄さんが所有している土地ですし、ある地域では企業所有の土地を公共に道路用地として提供した事例もあります。そこに当社で制作したバス停を設置していますが、行政はそういう動きを支援すればいいと思うし、どんどん民営化していくといいなと思っています。

自分たちが暮らす街において、自分たちがつくった領域が増えていけば自分たちの街と

**川崎の仮設橋**
川崎市の依頼により期間限定で設置。ShopBotで切り出した木材を現場で市民と組み立てた。







いう意識が強くなると思います。それを子どもたちに経験してもらうことで、将来パブリックな領域も自分たちの領域として捉え、まちおこしにつながるような活動が盛んになるのではないかと期待しています。

ランドスケープの領域においても様々なツールの提供ができると思います。加えて地域材を使えば材の移動距離が最短化できます。木は全国にありますので、近場で調達することで市民に対して自分たちが吸っている空気はどこから来ているのかということもリンクできるのではないでしょうか。

本来、木を切って植えてを繰り返しながら酸素と二酸化炭素のバランスが保たれていることを実感することは大事なことだと思います。建築とかランドスケープ資材などは、優秀な大工さんや優秀な設備がないとできないことが多いと思いますが、それら条件が揃わなくても地域内で完結できるときっと楽しいですよね。

### 地域内完結で社会は変わる

他者や他の地域に依存しなくても、地域だけで生きていける時代になったとき社会はどう変わるのか。誰かに助けを求めなくても何らかのアクションが起こせることが健全な社会ではないかと思っていて、それこそ昔はそうやって生きていたわけです。

民芸品や生活用品など、そこに暮らす人たちが地域性を反映したモノづくりをしていましたが、それらはどれもデザイン性が高く、また暮らしにおいてもとても文化度が高い社会であったと思います。そういうことを現代の技術を使って地域に返すことで、文化や生活のあり方をつくり直せることができたらと考えています。

この地域でどう生きてきたのかを語れるようになるには、モノづくり、つまり生産の問題をクリアした先にあるのではないかと思います。

現代の大きな産業構造として、できるだけ安く買って高く売る。自分とは関係のない地域だからと安く叩いて買う。その差益によって社会が回っているのが今の資本主義社会だと思います。そしてそれは環境負荷などなかなか目に見えてこない問題に蓋をして動いている社会でもあります。

ですからできる限り目に見える形でモノを動かすことが大事であり、地域内完結をすることで他地域に影響を及ぼさない社会構造を実現するためのひとつの技術がShopbotであると考えています。

（2019年4月23日 VUILD株式会社にて）




**福岡の休憩所兼遊具**
福岡市の依頼で設置。東京から福岡へ設計データを送り福岡で木材を切り出し組み立てた。テクノロジー技術により部品はもとより材の移動も最短距離で行える。







**南砺サマーキャンプ**
富山県南砺市利賀村にて国内外の建築専攻の学生が参加したサマーキャンプ。自由にレイアウトを変えられるカスタマイズ家具を製作。木材の伐採見学から、設計・制作、そして展示・利用までのプログラムを実施。地域材を活用し、地域で暮らす人々が自分たちの必要なモノをつくることのできる自立分散型のエコシステムの形成を目指した。





**カヤック屋台**
未使用時はコンパクトに収納できるのでトラックなどによる運搬を効率化でき保管の場所も確保しやすい。












**EMARFとは**
Shopbotを効果的に使うためのプラットホーム。デザイナーは自分のデザインを自由に投稿し、消費者が気に入ったデザインを購入（無料のものもある）し生産できる。アメリカの顧客がフィンランドのデザイナーのデザインで日本の材を使って家具をつくることも可能だと秋吉氏は期待を寄せる。

**好評発売中！**

LANDSCAPE DESIGN No.99よりシリーズ掲載してきました戸田芳樹氏による「デザインを読み解く」に戸田氏自ら加筆し、1冊の本にまとめました。昭和を代表する作庭家10名による11作品を、あるときはランドスケープアーキテクトとしての視点、またあるときは日本庭園を基本とした見方でそのデザインの意図を著者が探り、解説します。本のサイズはヨコ162mm、タテ257mmと、本を片手に作品を見て歩くのにちょうど良いサイズに再編集。紹介している11作品を、この本とともに歩いてみてはいかがでしょう。




■ 掲載作品と作庭家

01. 大田黒公園／伊藤邦衛
02. 朝倉彫塑館／朝倉文夫
03. 玉堂美術館 庭園／中島 健
04. 三井倉庫箱崎ビル／小林忠夫
05. 京王プラザホテル 北側4号街路／深谷光軌
06. 清瀬金山緑地公園／鈴木昌道
07. 成城五丁目 猪股庭園／田中泰阿弥・蛭田貫二
08. 東渕江庭園／小形研三
09. 日本庭園 花田苑／中島 健
10. 砧公園 世田谷美術館／野沢 清
11. 都立猿江恩賜公園 日本庭園／伊藤邦衛

書籍名／昭和の名庭園を歩く～作庭のおもいとかたちを紐解く～
著者／戸田芳樹　サイズ／ヨコ162、タテ257mm　本文84ページ
定価／ 1,000円+税

**【お申し込み方法】**
このページをコピーしていただき、下記の欄に必要事項をご記入の上、FAXにてマルモ出版までお送りください。
その後、下記お振込み先にご入金いただきお申し込みの受付完了とさせていただきます。
ご入金金額は本代**1,080円**（税込価格）に**送料（1冊170円、2冊以上500円）**を加算した金額をご入金ください。

**【お振込み先】**
1.三菱UFJ銀行 渋谷中央支店　（普）5294495　株式会社マルモ出版
2.郵便貯金口座　口座番号 00170-4-70822　株式会社マルモ出版
（※1、2のいずれの場合も振込手数料のご負担をお願いします）

**【お問合せ先】**
株式会社マルモ出版　TEL.03-3496-7046　e-mail:maru@marumo-p.co.jp

**FAX. 03-3496-7387**

| ご注文日 | 年　　月　　日 | | ご注文冊数 |
|---|---|---|---|
| ご注文者様 | お名前・お勤め先 | | 冊 |
| | ご住所　〒 | 電話番号 | |

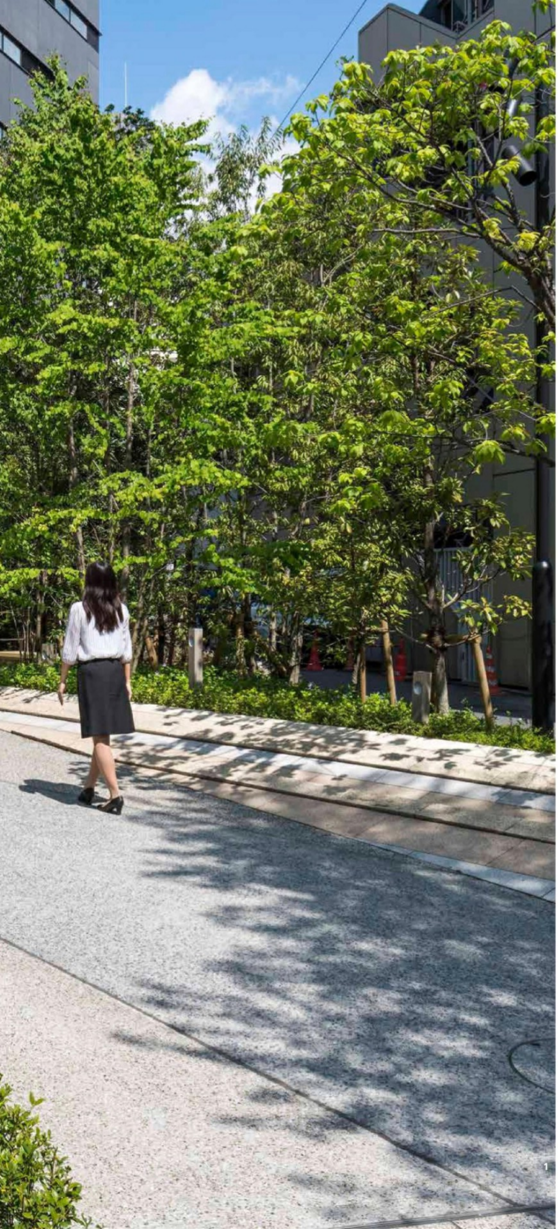


# LANDSCAPE WORKS



photo by Nacasa & Partners Inc. [Hiroshi Tsujitani]


ARTISAN
JAHO
G-BASE



1

# G-BASE田町

東京都港区

設計＝清水建設株式会社一級建築士事務所
ランドスケープデザイン＝株式会社フィールドフォー・デザインオフィス
デザイン監修＝株式会社佐藤尚巳建築研究所
写真＝株式会社フィールドフォー・デザインオフィス
清水建設株式会社一級建築士事務所

## G-BASE TAMACHI

Minato-ku, Tokyo

Architekuture design by SHIMIZU CORPORATION
Landscape design by FIELD FOUR DESIGN OFFICE
Design supervise by Naomi Sato Architects
Photograph by FIELD FOUR DESIGN OFFICE
& SHIMIZU CORPORATION

## G-BASE田町のランドスケープデザイン

**文＝坂巻直子**
株式会社フィールドフォー・デザインオフィス

スタートアップ企業をターゲットにしたテナントオフィスで企業と周辺環境の成長を目指し、事業者・設計者・施工者で共有したコンセプトは「大樹と林床」である。

建物を「大樹」に、その足元に広がるランドスケープを「林床」に見立て、敷地全体で生命観を表現している。地上18階建ての高層棟の外装にランダムなリブに木目が転写されており、そこに表出される光の陰影は樹肌を感じさせる。建物内の共用部には、樹皮を残したヒノキやナグリ加工の木枠など天然木が採用されている。

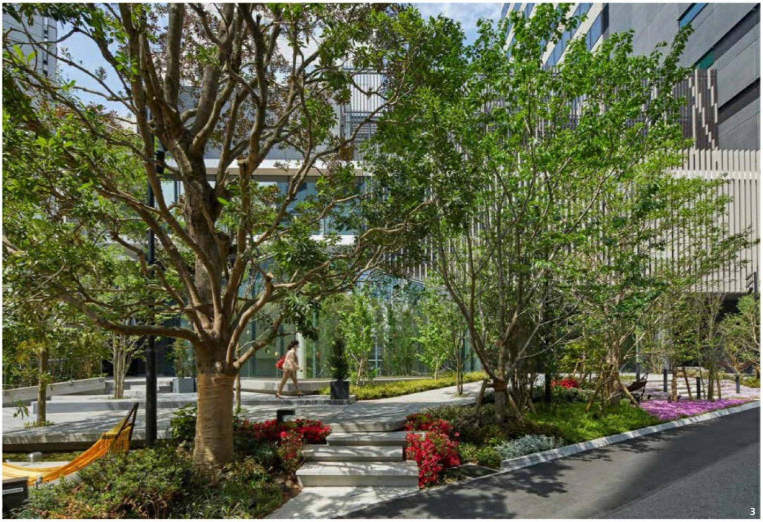
整形の建物に対して不整形のランドスケープは、前面道路から長さ50m、高低差1.5mのアプローチ空間となっている。雁行した動線と舗装と植栽帯の積層するデザインによって、奥行きと立体的な緑が体感できるだろう。

ここにはカフェをはじめ、いくつかの溜まり場が設置されている。溜まり場ではパソコン作業、打合せや卓球を行うことができ、オフィスワーカーの多彩な働き方をサポートする。

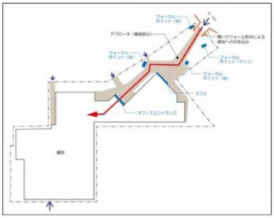
企業と周辺環境の成長性を敷地全体で表現するとともに、ランドスケープはオフィスとまちの接点となり、地域住民や訪問者も利用できる心地よい緑陰を提供している。



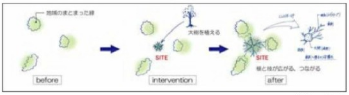
アプローチの一部には舗装上にも落葉樹を植栽し、木漏れ日の中をくぐりながら建物に向かう道となっている。敷地内すべての樹木の材料検査を行い、アプローチ内は枝の形にもこだわりながら、樹木を事業者とともに選定した



3



雁行するアプローチとフォーカルポイントの設定




敷地の考え方



断面図



4

ベンチそのものではなく、座る行為をデザインと捉え、座り方にバリエーションが生まれるようハンモックを設置した。天気の良い日に管理室によってハンモックの布を出し入れしている。寝転がったり、座ったり、向かいのベンチと対峙できる位置に設置した



5



6

高層棟18階の屋上はオフィスワーカーが利用できる屋上庭園で、東京タワーが一望できる。天然木のベンチ、リクライニングチェアやテーブルやキッチンがあり、日常的なリフレッシュ空間だけでなく、イベント時に利用できる。植栽にはハーブなどエディブルな種類を混植している。高さ1.5Mのオリーブを寄せ植えし、その前にはサイランを植栽した。目線の下にはカラーリーフを多用し、彩りを添えている



7



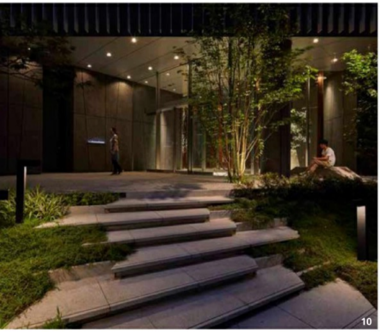


8




9

夜も木々の木漏れ日が感じられるような景観となっている。均一に照らすのではなく、踊り場やフォーカルポイントに光が集約されている。このようにメリハリのついた陰影は景観にリズムを与えている



10



11

【対談】

# 都市に大樹と林床をつくる

**宮崎浩英**（清水建設株式会社 設計本部業務施設設計部）
**坂巻直子**（株式会社フィールドフォー・デザインオフィス）

文責=編集部



写真＝編集部

## コンセプトは「大樹」

**坂巻直子氏（以下、坂巻。敬称略）**　ランドスケープがこの事業に参画したときは、ビルを木に見立てた「大樹」という方針が固まった状況でした。大樹の意図するところは、スタートアップしたばかりの企業を誘致しその成長力を木の生命力になぞらえたということと、計画地周辺に緑環境が少ないため緑を創出しその効果に期待するという2つの想いからとのことでした。

　大樹という方針が固まっていた一方で、外部空間のあり方はこれからという状況でした。計画地は、西側は三田通りに面し南側は第一京浜に面している複雑な形状をした土地です。このような複雑な敷地に対して、今回の配置計画の考え方を教えていただけますか。

**宮崎浩英氏（以下、宮崎。敬称略）**　本プロジェクトはこのことにより、第一京浜に面したウナギの寝床のような南北に細長い土地と三田通りに面した約20m四方の土地が合体した複雑な形状の計画地でありながら、20m四方の正形の土地に容積をまとめて建てようという発想からスタートしました。

　計画当初は、南側の細長い敷地は車寄せのための車道にと考えたのですが、この事業の当初から参画していただいていた佐藤尚巳建築研究所の佐藤氏から「大樹」という方針になぞらえ緑道を通りながらオフィスに入るという都市の中に緑地を挿入する案が挙がりました。併せてフィールドフォーの坂巻さんから建物を大樹と見立て、細長い土地を「林床」として考えてはどうかという提案があり、緑を抜け建物へと導く細長い土地の計画の方向性が定まっていきました。

　そして、その細長い緑の環境は街に対してもオープンであり、周辺環境を豊かにするだけではなく、建物の容積を確保し事業性を担保するというスキームにつながっていきました。

**坂巻**　そうだったんですね。私が参画したときは緑については具体的に話されていなくて、むしろその土地のブランドイメージを演出するためにある程度の閉鎖感を出したいとお聞きしていました。そして、それは緑に委ねるのではなく構造物で視線を遮り高級感を出すという方針でした。打合せの場では「フォレスト」という言葉も出ましたが、私はそれを豊かな緑量と生物多様性に対応した多様な樹種があり、そして憩いの場所も揃っていることと解釈し、「林床」という考え方を提案しました。

　林床に至った根拠のひとつは、働く場所としてのランドスケープという考え方とその使い方やプログラムをデザインに盛り込みたいと考えたこと。ふたつ目はオープンエンドとしてのランドスケープ、つまり街との接点をどうつくるか、街に対してどこまでオープンにするかが大事になると考えたことです。働く人には新しい環境を提供し、地域の人にとっては今までにない使い方ができる場所でありたいということから「林床」というデザインコンセプトに至りました。

　建物を「大樹」としたときその足元に拡がるランドスケープはその根の部分にあたり、街に対して根を伸ばしていくイメージでランドスケープを展開するという考え方を示しました。

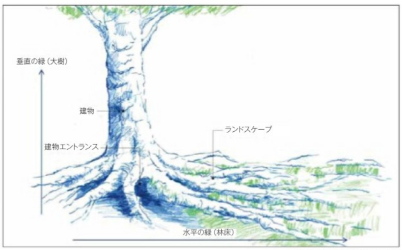
　一方、三田通り側は建物1階の駐車場にアートワークと光を挿入し、第一京浜とは異なる顔づくりをしています。2つの顔を対比させることで、敷地全体の個性をひき立てています。

## 「林床」が示したG-BASE田町のかたち

**宮崎**　ワーカーに対しては働きやすさ、企業に対しては付加価値を提供したいと考えていたところはありました。その後、場所を選ばずに仕事ができるという意味で




計画地の環境




「大樹」と「林床」の考え方

「サードプレイス」という言葉が出てきて、屋外でも仕事ができるワークスタイルを提案しようという方向に向かいました。

実際のオフィスをいくつか見学していくなかで、ワーカーが自由にコミュニケーションを取れる仕掛けが随所に施してある様子を見て、この林床もワーカーが豊かに働けるような仕掛けをつくっていこうと。ベンチはもとよりハンモック、卓球台を設置するアイデアが生まれるに至りました。高層棟につきましても東京タワーを一望できる屋上庭園をつくっています。またエントランス内部についても森とか外部を感じられる仕掛けを随所につくっていますが、その方向に向かって意思統一ができたのは「大樹」と「林床」という大きなコンセプトがあったからだと思います。

**坂巻**　「大樹」と「林床」というコンセプトが決まってから建築の中も含めて、街としての木をどうつくるかということが比較的早い段階から考えられていましたが、設計にあたっては敷地条件など物理的な制約の中でかたちにする苦労もありました。ランドスケープにつきましては、良くも悪くも細長く不整形で第一京浜からエントランスまでの高低差が1.5mありますが、形も含めその高低差を活かそうと考え、「積層」というワードを建築とランドスケープをつなぐものとして導き出しました。これはデザイン上のコンセプトで、物と物とが重なり合うことでできる陰影により微地形を見せようというものです。重ねていくことで高低差1.5m、大人の身長にも満たないような高低差のある地形をアプローチに沿って見せていこうと考えました。

例えば、10～20cmほどのわずかな段差がつくる陰影が随所に見ることができるデザインにしています。また植栽地が舗装の下に入り込む、逆に植栽地に構造物が入り込み互いに干渉し合いながら根(舗装)と林床(植栽地)が重なり合う大樹の足元としています。

アプローチのデザインにおいてもうひとつ特徴的なことは、アプローチを雁行させていることです。全長50mほどの短いアプローチですので雁行させ奥行感を出したいと考えました。ストレートにエントランスを見せずとも、アプローチの要所にアイストップを設け、先の景色が見え隠れすることで歩行者を奥まで導くことでこの敷地全体に対する興味に繋がると提案し、採用していただきました。

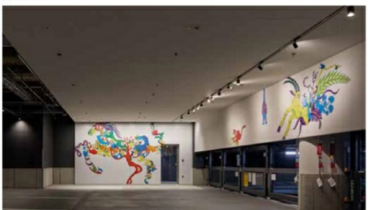
**宮崎**　建築のハードな部分、ランドスケープでは「積層」というコンセプトで構成していきましたが、建築と接する部分はとてもデリケートで、建築とランドスケープの双方にそれぞれの想いもあります。

例えばカフェの出入り口やエントランスなど、建築とランドスケープが接触するところではお互いすり合わせながらインテリアとも調和できるよう調整しました。エントランスの内部については、同じフィールドフォー・デザインオフィスに依頼していますが、コンセプトはランドスケープを中に引き込むこととしました。ステンレス板への映り込みにより外部の景観を中に引き込み、内と外の連続を感じられるように工夫しています。また本物の丸太を使い外部の樹木が中に入り込んできているデザイン



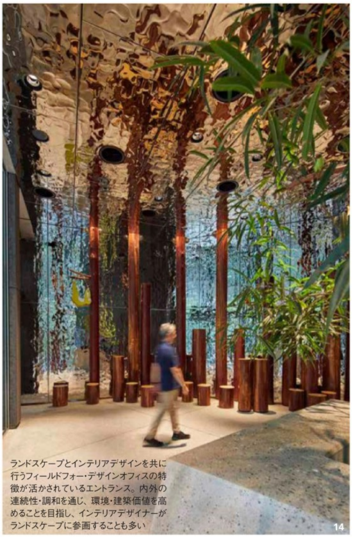
12

低層棟の１階にはオフィスワーカーが利用する自転車置き場とシャワーのあるラウンジがある。ラウンジと隣接した小さな屋外スペースは終日日影の三角地である。ここに人工芝を敷設し、敷地形状をした卓球台を設置した。体を動かしてリフレッシュできる場として、屋内外の利用の一体性を高めている



13

アートワークと光を挿入した建物１階の駐車場



ランドスケープとインテリアデザインを共に行うフィールドフォー・デザインオフィスの特徴が活かされているエントランス。内外の連続性・調和を通じ、環境・建築価値を高めることを目指し、インテリアデザイナーがランドスケープに参画することも多い

14

としています。

**坂巻**　エントランスについては外部の要素を中に引き込み、ビルの起点にするという考え方でした。林床をエントランスの内部にまで侵入させたということです。使用している丸太は半年程かけて乾燥させ樹皮を残したヒノキで、床材は外部と同じコンクリートの洗い出し舗装としています。

### ひとつになった建築とランドスケープ

**宮崎**　設計者としては建物の配棟計画とランドスケープがうまく合致し、この特殊な土地ならではのひとつの解を示せたのではないかと感じています。ランドスケープの考え方、つまり都心の密集地にまとまった緑を提供すること、その具体的な手段として建築（大樹）の足元の緑（林床）が街につながっているという都市に対して緑地のあり方のひとつの答えを示すことができたのではないかと考えています。

アプローチに面している低層棟のファサードデザインもランドスケープを強く意識しルーバーを採用していますが、実はこのルーバーは一つひとつその塗装を施すレベルを変えることで建物に近づくにつれてその見え方が変わるようにデザインしています。

私自身これほどまでランドスケープを意識して設計した経験は初めてでした。このプロジェクトでは建築以外の余白の部分、つまりランドスケープを絶えず意識しながら設計を進めてきたという実感があります。特に、もともとは入口からエントランスまで車寄せにする計画であった場所に、ランドスケープが展開されたことで敷地の西側に隣接している私道までもが魅力的な道に変わりました。小さなエリアではありますが、極端に言えば街が生まれ変わったと言ってもいいと思っています。都市に緑が挿入され、大樹の根が街に拡がるイメージが実現されたと思います。



コンクリート洗出し舗装

**坂巻**　私も宮崎さんと同様に、これほど建築と密に設計した経験は初めてでした。他の近接した職能と比較すると、ランドスケープ分野は自然物を空間素材として扱うため、どうしても緑に固執してしまうところがあると思います。できるだけ多種な緑を入れようとか、多くの量を入れようと考えがちですが、今回建築とコラボレーションしたことで緑は設計要素のひとつであり、ベンチや舗装材など人工物との関係性における緑のあり方について改めて考えさせられたところがあります。

利用者の活用の仕方や建築との調和を考えたときに緑ではなく、舗装や構造物など人工的な手段を選ぶほうが敷地全体としての心地良さや使い勝手の良さの向上につながることが実感できました。ほぼ終日日陰となる卓球スペースは、まさにそのような例です。

**宮崎**　このプロジェクトの特徴的なところは、プロジェクに関わる人たちによって案が生まれ、その案がブラッシュアップされ、現在の形に収束したことだと思います。当初、「大樹」という大きなコンセプトから始まりましたが、皆が漠然と考えていたところにランドスケープから「林床」という考え方が提案されたことで全体の目指す方向が明確になりました。その考え方はインテリアにまで波及しましたし、途中設計の変更もありましたが、「大樹」と「林床」というコンセプトからブレることはまったくありませんでした。ひとつのマイルストーンとして関係者全員がイメージを共有できた結果だと思います。

**坂巻**　ランドスケープはファシリテイターであるかも知れません。建築設計者は、事業収益の向上という目標を叶えつつ、設備も含めてそれを充足する機能とデザイン性を満たし、期日内に完成させることが職務としてあると思います。一方、ランドスケープアーキテクトは、外部空間のデザインに加え街に対してどういう効果をもたらすことができるかを示す役割も兼ねるべきだと思います。パブリック性をどこまで許容すべきかを事業主に対して示すことは、ランドスケープの大事な職務なのではないでしょうか。

街と併存することで生み出される付加価値、街と繋がることで向上する経済価値について事業主にしっかりとお伝えしなければいけないと考えています。G-BASE田町では、その点も含め事業主、建築とランドスケープ、そして施工者とともにひとつの形を示すことができたのではないかと思います。

2019年4月26日
フィールドフォー・デザインオフィスにて

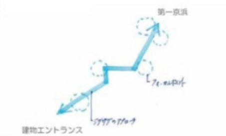
---

### 3つのデザイン・ストラテジー

敷地はもともと2つの所有者と区分に分かれており、今回の事業のために統合された変形地である。第一京浜と三田通りの2本の幹線道路にまたがっている。整形の地上18階建て高層棟と地上3階建ての建物が三田通り側に寄せて配置されたことで、第一京浜側の不整形地にアプローチ空間が生まれた。前面道路から長さ50m、高低差1.5Mのこのアプローチ空間が今回のランドスケープの対象地である。ここを通行動線としてだけでなく、「新しい働き方」ができるオープンスペースを作り出した。やや特異とも言える土地形状と微地形を敷地のポテンシャルとしてくみ取り、「林床」というテーマに重ねて3つのデザインストラテジーを立てた。

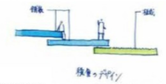
**① 雁行したアプローチ**

オフィスのエントランスは第一京浜から50メートルセットバックしている。雁行したアプローチによってあえて見通しを遮り、奥行き感を与えている。アプローチの折れ点はフォーカルポイントとし、シンボルツリーやサインを設置し、景色にリズムを与えている。




**② 微地形の顕在化**

第一京浜からオフィスのエントランスまでは高さ1.5Mの高低差があり、公道から建物に向かってあがっている。舗装と植栽帯をわずかに積層させ、舗装端部の各所に陰影が生まれている。積層した陰影によって、この土地に繊細な地形が存在していることを気づかせてくれる。

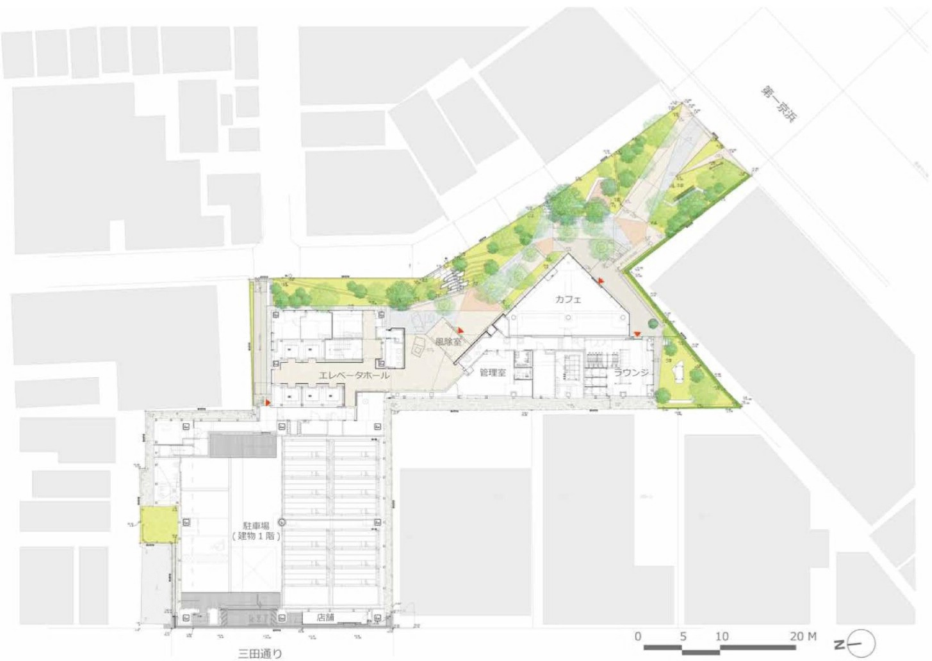


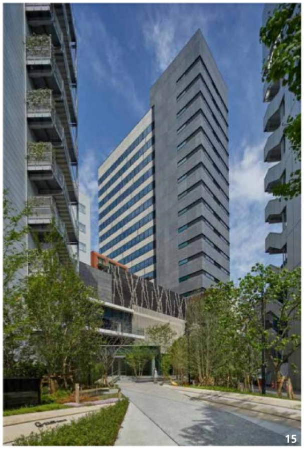
**③ 多様な居場所**

「屋内だけでなく、屋外も働く環境である」という考えのもと、ランドスケープにも個人に合わせた多彩な居場所を設置した。ベンチにはミニテーブルと電源が取り付けられており、軽微なパソコン作業ができる。ハンモックでくつろぎ、併設されたカフェでコーヒーを飲みながらミーティングを行える。終日日影の場所は、体を動かしてリフレッシュできる卓球スペースとした。このようにサードプレイスとなる場を散りばめている。









15

## G-BASE 田町

| | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都港区芝5丁目29-11 |
| 事業者 | 三井不動産株式会社、清水建設株式会社 |
| 主要用途 | 事務所、店舗、駐車場 |
| 基本設計 | 建築／清水建設株式会社一級建築士事務所（小山裕之、宮崎浩英）<br>ランドスケープ／株式会社フィールドフォー・デザインオフィス（坂巻直子）<br>インテリア／株式会社フィールドフォー・デザインオフィス（大久保敏之） |
| 実施設計 | 同上 |
| 施工監理 | 建築／清水建設株式会社一級建築士事務所<br>（小山裕之・國立篤志・三角兼一郎・宮崎浩英・小野島新・下坂裕美）<br>ランドスケープ／株式会社フィールドフォー・デザインオフィス（坂巻直子・大山奈津美）<br>インテリア／株式会社フィールドフォー・デザインオフィス（大久保敏之） |
| 計画・設計協力 | デザイン監修／株式会社佐藤尚巳建築研究所<br>外構照明デザイン／ICE都市環境照明研究所（武石正宣・加藤由子）<br>アートデザイン／山崎若菜 |
| 施工者 | 清水建設株式会社<br>ランドスケープ／日比谷アメニス（植栽）、日本道路（舗装・ファニチャー）、ユービーコム（ファニチャー）、トーエネック（電気）、日比谷総合設備（設備） |
| 仕　様 | 人工木デッキ（屋上）／ハンディテクノ、舗装（部分）／日本玉石、照明／山田照明ほか |
| 竣　工 | 2018年1月 |
| 規　模 | 敷地面積2,331㎡ |
| 植　栽 | 高木/カンヒザクラ、オオシマザクラ、ヒトツバタゴ、カツラ、ヤマボウシ、シラカシ、ソヨゴ、ヤマモモ、シロダモ、タブノキなど。低木/アセビ、コクチナシ、イヌツゲ、セイヨウイワナンテン、マホニア・コンフューサ、ヒラドツツジ、フイリアオキなど。地被類/フッキソウ、ピンカシバザクラ・マジョール、タイム・ロングカリウス、シロタエギク、ノシラン・ビッタータスなど。 |
| 写　真 | 株式会社ITイメージング（土戸雅裕）／ 1,4,7,9,11<br>株式会社ナカサアンドパートナーズ（辻谷 宏）／ 2,3,5,6,8,10,12,13,14,15 |

# モノトーンの超越<br>「新疆瑞豊ワイナリー」

中華人民共和国新疆ウイグル自治区

ランドスケープデザイン＝章 俊華、R-Land北京源樹計画設計事務所
文･写真･資料＝章 俊華（千葉大学園芸学研究科）

## Xinjiang Ruifeng Winery

Xinjiangweiwuerzu, China

Landscape design by Junhua ZHANG Yuanshu Institute of Landscape Planning and Design, Beijing.
Text & Photograph by Junhua ZHANG（Graduate School of Horticulture, Chiba University）





重複の円形は空間のリズムを織り成している



砂利を敷いた作業路。機能と鑑賞の両立


夕日を浴びる交差状の園路が場の領域を区切る


夕日の葡萄畑の円と直線。この場所の空間性が伝わる

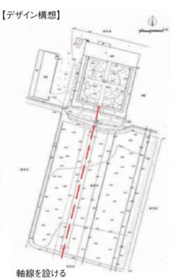
## モノトーンの超越

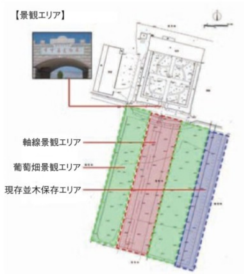
現地は広く平坦な長方形の敷地で、東側境界には大きく高く成長した新疆ポプラが一列にそびえ立ち、北側にはワイナリーがあり、西側と南側は道路に面している。生産性と景観性とを重視したい所有者の意向に応えるため、季節毎の風景表現に注意しながら、生産型緑地の機能性と景観性の追求という一つの矛盾の解消を試みようとデザインした。
まず北側にあるワイナリーの入口に合わせてこの敷地の主軸空間を作り、中央にある幅8mの地被帯には洋風な噴水を3ヶ所組み込ませた。その両側には3mと5mの通路を、1.3mと2mの地被帯と幅12mの林帯には新疆ポプラの高木を配した。この場所はワイナリー文化の雰囲気と細やかな装飾からできたワイナリーの地域特性から、イメージ作りを現した。次に、中軸両側に広がる葡萄畑は、4株毎に直径5m高さ50cmの白い石積みの環状プランテーションを作った。その上にφ60mmのステンレス管を設置した。この環状プランテーションの脇には、60cm幅の砂利道が17本縦に並び、更に7個のプランテーション環毎に45°の角度をつけた1m幅の小道を5本通すことで、葡萄の苗が植えてある、それぞれのプランテーションへ足を運びやすくできるようになっている。左右の葡萄畑にはそれぞれ4箇所と3箇所に約35㎡の舗装地を配置して、約930本の柱を均等に分散させた。縦横に交差した直線と約400個の環状プランテーションが繰り返し無数に出現し、独特の空間構成を作り出している。
直径5mの環状プランテーションは堅いイメージをなごませ、この場の「隅々」にまで自然の流露と材料の原始的な表現が満ちあふれている。φ60mmのステンレス管は荒々しく積み重なった石を整然とまとめ、シャープなカーブラインを強調し、更には不意に射し込む快い陽の光の反射を期待している。I字型支柱は塗装を一切せず、鉄の錆びた色が時空の歳月を記憶しつつあり、同じ高さの支柱は直線と曲線、粗と精、散と集といった相反するもののバランスをうまくとっている。 60cm幅の作業用通路の砂利は硬さの中に柔らかさを、荒々しさの中に細やかさを、通常用いられる単調な工法を変え新たな配慮を施した。高さ50cm環状プランテーションはこの場所の表情をはっきりと表し、冬の広々としたたたずまいを創り出している。敷地東側に植えた新疆ポプラは軸線空間の中で縦横に受ける体感を強調し、どの方向から見てもこの場の存在を引き立たせている。重複、機械的、均衡、この場所をデザイン表現した言葉——モノトーンの超越。

## Transcendence of "Simplicity" - Landscape Design of Xinjiang Ruifeng Winery

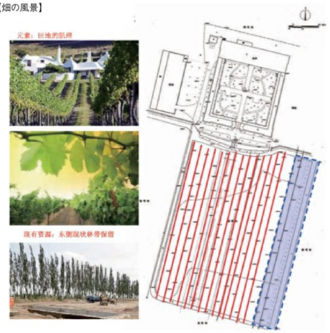
Firstly, the main entrance of the winery on the north side has been extended and has been designed to be the central axis of the area.
The center is comprised of greenbelts of ground cover which are 8 meters wide and there are three groups of continental fountains above ground level. There are paved belts measuring 3 meters and 5 meters and ground cover belts measuring 1.3 meters and 2 meters together with 12 meters forest belts located on each side respectively.
Here, we have attempted to subtly express a continental style representing the cultural atmosphere and diversity of the winery whilst detailed decoration has been created to characterize the regional features of the winery.
Secondly, in the grape growing areas which are located on each side of the central axis and where four grape vines constitute one group, circular planting pools with a diameter of 5 meters have been built to a height of 50cm using square white stones. 60mm wire drawing stainless steel has been installed around the top of each pool.
17 pebble paths which are 60cm wide have been created and are arranged longitudinally so as to conveniently access every point of the grape growing area. A further 7 paths one meter in width have also been created and these paths run obliquely at an angle of 45 degrees to the other paths and connect with each other.
There are also three paved areas of approximately 35 square meters located at each side of the central axis and around 930 steel I-columns equally located throughout the entire growing area.
The crisscrossing straight lines and approximately 400 circular planting pools all come together to create a very unique special atmosphere.



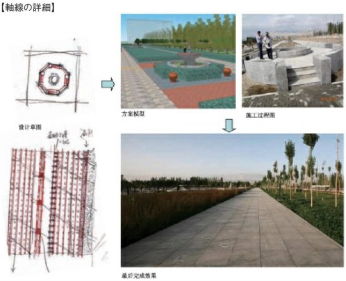
【畑の風景】




【円形の石積み】




【軸線の詳細】

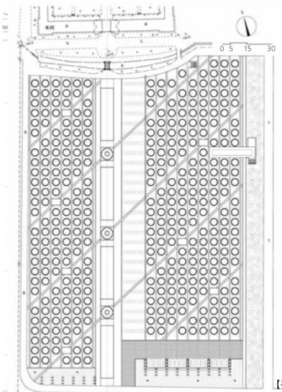



【Ｉ字型の支柱】




【作業路の詳細】




【平面図】







伸びる葡萄の蔓、収穫の期待



満開の地被の組合せは大自然の心を抱かせる

**新疆瑞豊ワイナリー**

| | |
|---|---|
| 所在地 | 中国新疆庫爾勒市和碩 |
| 事業主 | 新疆庫爾勒市和碩建設局＋新疆瑞豊ワイナリー |
| 主要用途 | ワイナリー、葡萄畑、生産緑地 |
| 設　計 | 基本構想・基本計画・基本設計／章俊華（千葉大学園芸学研究科）<br>実施設計・施工監理／章俊華（千葉大学園芸学研究科）、R-Land<br>北京源樹景観計画設計事務所（白祖華、胡海波、張篠婷、范雷、<br>于沣、湯進、銭誠 |
| 施工者 | 巴州大自然園林緑化工程有限責任公司 |
| 計画設計期間 | 2012年3月～2012年5月 |
| 施工期間 | 2012年6月～2013年7月 |
| 規　模 | 2.75ha |



雪景色（施工中）



# 岸根公園 護岸デッキ改修

神奈川県横浜市

改修設計＝樋口建築造園計画
資料提供＝横浜市環境創造局北部公園緑地事務所
協力＝株式会社藍工業
写真＝編集部（特記を除く）

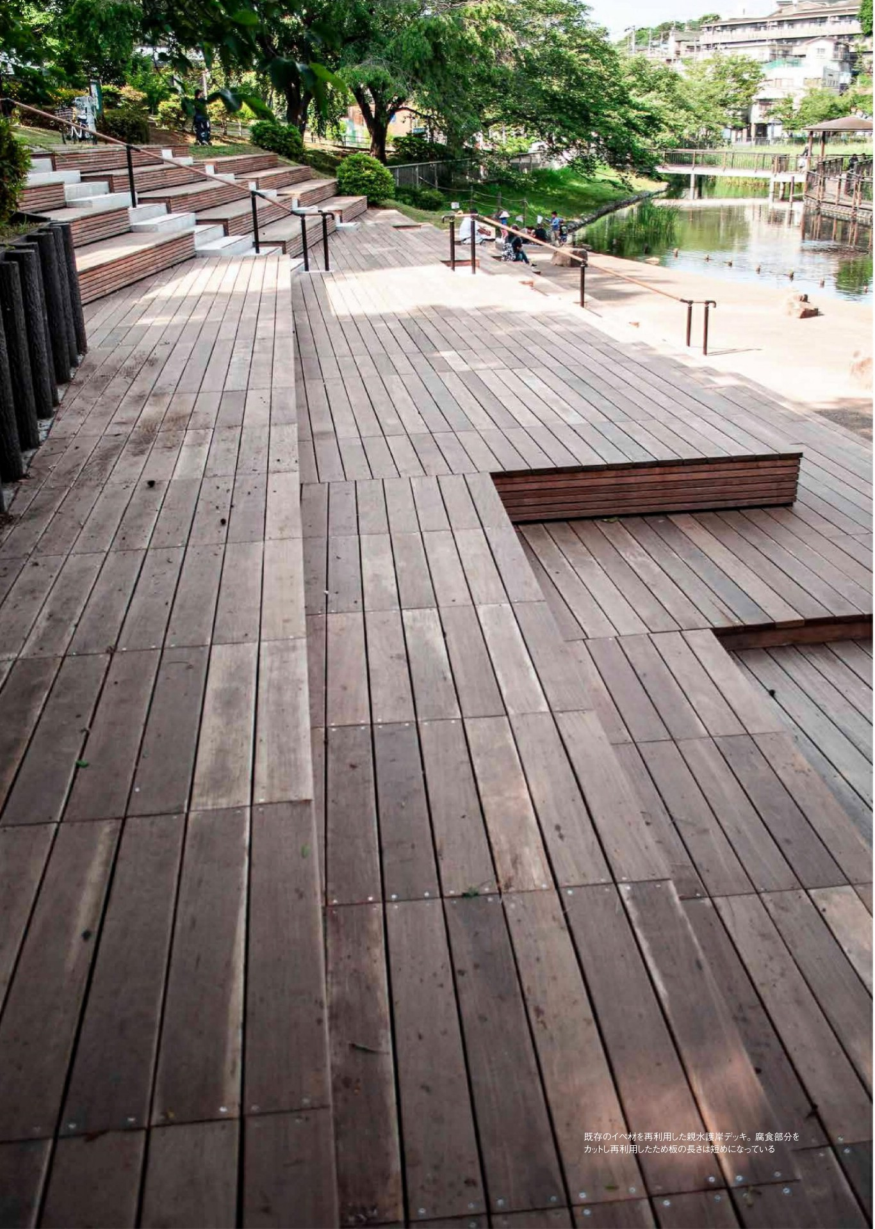
## Wood deck repair work in Kishine Park

Yokohama city, Kanagawa

Repair design by Higuchi archiland
Cooperation by Yokohama city & AI INDUSTRIAL CO.,LTD.
Photograph by Editorial desk



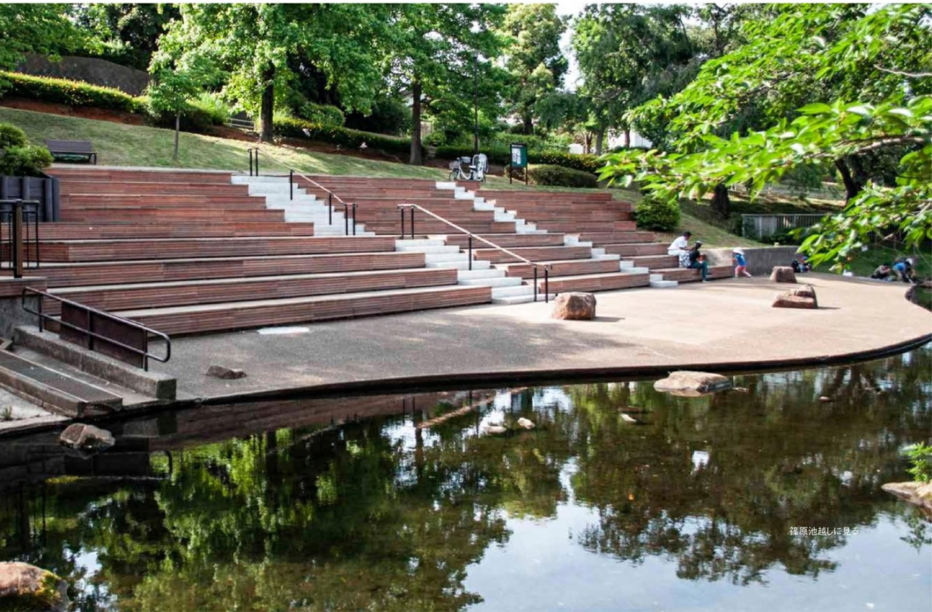
重複の円形は空間のリズムを織り成している



既存のイペ材を再利用した親水護岸デッキ。腐食部分をカットし再利用したため板の長さは短めになっている



幕板以外はすべて再利用材を使用
しコストを抑えた改修ができた



篠原池越しに見る



## 木材の再利用による改修

**話＝藤田 智（横浜市環境創造局 北部公園緑地事務所）**

設置から20年が経ち老朽化が目立ってきたため全面的に改修をすることになりました。改修にあたり、それまでのようにすべてを木材でやり直すとコストがかかり過ぎてしまうため、芝やコンクリートと組み合わせて木材の使用量を減らすことを考えました。設計を依頼した会社が木材について藍工業の宮本社長に相談したところ、ここで使われているイペという木材は長く使える材ですからそのすべてを捨てる必要はなく、再利用できる木材は再利用しましょうと提案を受け、どのくらいの量の木材が再利用できるか調査をお願いしました。結果的に、段になっているところの床板はすべて再利用材で賄え、幕板に新材を使用し、15㎡程度の平場部分に藍工業さんが担当している都内の現場で使われていた古材を再利用すれば、これまで通り全面木材が実現できることがわかりました。コストも複数の資材を組み合わせたデザインと大きく変わらない金額で改修できることが分かったため、全面木材による改修を決定しました。

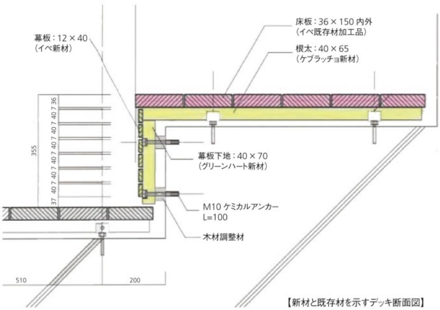
改修に際して、材の再利用ということはまったく頭になかったので、設計を依頼した樋口建築造園計画の藤原さんを通じて宮本さんから再利用の提案をされたとき、正直半信半疑でした。設置から20年経った木材を再利用し、宮本さんからはさらに15年の腐食保証をしてもらい、イペという素材の耐久性に驚かされました。この岸根公園には池の上に桟橋を渡らせていますが、その桟橋の改修についても、今後はまず材を再利用するところから考えたいと思っています。

利用者に温もりや安心感を与えてくれる天然木材はできるだけ使いたいと考えていますが、耐久性やメンテナンスの点で他の資材を使わざるを得ないこともあります。ですが、緑の豊かな環境においては、やはり自然素材を使うことが相応しいと思います。

（文責＝編集部）



篠原池の対岸から見る




【新材と既存材を示すデッキ断面図】

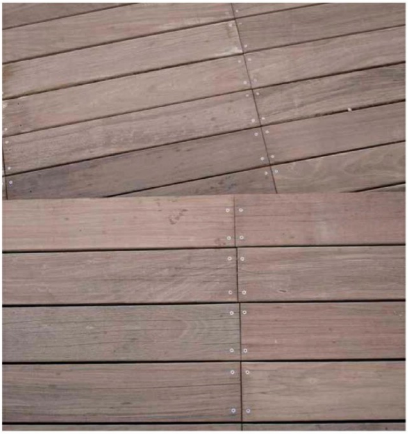


幕板と床板。幕板は腐食対策のためスリット状にしている

# 改修プロセス

改修前の調査では板の裏側はほとんど問題が無いものが多かったが、腐食が進み鉛筆が刺さってしまう“ふけ”の状態の材は廃棄している。再生可能な材は株式会社藍工業の長野工場においてカンナがけした後に設置した。新材とほとんど見分けがつかないほどに再生されている。







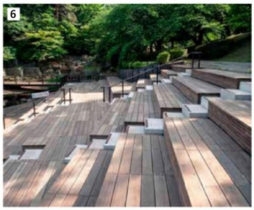











1 木材を剥がす作業。 2 木材がはがされたデッキの状態。 3 デッキがはがされた平場部分。 4 平場部分に使用されていた20年が経過したイペ材。 5 表側と裏側の比較。 6 完成。
（写真＝株式会社藍工業）

**岸根公園 親水護岸デッキ改修**

| | |
|---|---|
| 所在地 | 神奈川県横浜市港北区根岸町725 岸根公園 |
| 事業主 | 横浜市環境創造局北部公園緑地事務所 |
| 主要用途 | 親水護岸デッキ |
| 設　計 | 樋口建築造園計画 |
| 施工者 | 株式会社植勘 |
| 仕　様 | 木材／株式会社藍工業<イペ（新材及び既存材加工品）、ケブラッチョ（新材）、グリーンハート（新材）> |
| 施工期間 | 2018年12月10日～2019年3月27日<br>デッキ工事期間／2019年1月15日～2019年3月8日 |
| 規　模 | デッキ面積約250㎡ |



ひょうたん原っぱ



せせらぎ広場



篠原池




**岸根公園**

横浜市営地下鉄「岸根公園」駅から徒歩1分というアクセスが便利な運動公園。市街地にありながら、多くの木々に囲まれた憩いと癒しの空間を提供している。広々とした芝生広場の「ひょうたん原っぱ」は様々な使い方がされ市民の憩いの広場となっている。園内には篠原池のほか、野球場、県立武道館などのスポーツ施設もある。
また、「忍者とりで」は、ローラーすべり台などの遊具があり、子どもたちに人気のスポットとなっている。
【面積】140.587 ㎡
【指定管理者】公益財団法人 横浜市緑の協会

# WORKS MOVEMENT

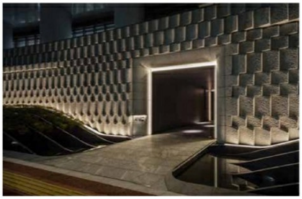
ここでは、ランドスケープデザインに関する現在進行形のプロジェクトや、ブランニュープロジェクトをいち早くお届けします。

## パークコート青山 ザ タワー

三井不動産レジデンシャル株式会社、Iconique特定目的会社



街のランドマークとなる建築とみどりの丘の基壇部



水景と石による柔らかな曲線が織り重なるエントランス



街角を演出する曲線で構成した石のモニュメント

パークコート青山 ザ タワーは、赤坂御用地や青山霊園の豊かな緑地の近傍に位置し、交通量の多い外苑東通りへ印象的なシーンを見せる集合住宅である。建築の基壇部に人工地盤による更なる緑の大地をつくり、外苑東通りに対して新たな緑の景を創出している。人工地盤上部は緩やかな傾斜を持たせた芝庭と四季を彩る中高木植栽、水盤やアートを配したプライベートガーデンとし、屋内ラウンジと連続する上質な場をつくり上げている。また、エントランスや外周部には、曲線で構成された水景や石のデザインにより、建築と呼応した優美さを醸し出している。竣工より1年が経過している本プロジェクトであるが、今後も印象的なランドマークとして街を演出していくことが期待される。

●用途／共同住宅●発注者／三井不動産レジデンシャル㈱・Iconique 特定目的会社●ランドスケープ設計／大林組設計本部ランドスケープ課●建築設計／大林組設計本部●施工／大林組●敷地面積／約3,910㎡●建築規模／地上26階・地下1階●竣工／2018年3月●所在地／東京都港区南青山2

## 渋谷スクランブルスクエア 展望施設『SHIBUYA SKY（渋谷スカイ）』

東京急行電鉄㈱、東日本旅客鉄道㈱、東京地下鉄㈱

渋谷駅に直結し、2019年11月に開業する渋谷スクランブルスクエアは、渋谷エリアで最高峰となる約230ｍ・地上47階建ての規模を誇る大規模複合施設である。同施設において特筆すべき点は、日本最大級の屋上展望空間を有する展望施設『SHIBUYA SKY』。スクランブル交差点を眼下に見下ろすことができる広場であり、東京の街はもちろん、遠方に富士山の姿も望める展望スペースとなっている。俯瞰で渋谷の街を見下ろすことで、新しい気付きが得られることもあるだろう。

また「SHIBUYA SKY」では、数多くのプロジェクトで世界的な注目を集めるクリエイティブ集団 ㈱ライゾマティクスの“ライゾマティクスデザイン（真実を見つめ課題を解決に導くデザイン）”部門を演出プランナーとして採用、高層の展望施設という範疇に留まらず、渋谷上空でしか見ることのできない眺望施設と空間演出によって、来場者の想像力を刺激する新しい体験を提供する。







上／六本木方面の眺望イメージ（画像提供：渋谷駅街区共同ビル事業者） 下左／屋上から見る夜のスクランブル交差点 下右／屋上からの富士山の眺望（下左右画像提供：渋谷スクランブルスクエア㈱

●主要用途／大規模複合施設（建築の用途は事務所、店舗、駐車場ほか）●事業主／東京急行電鉄㈱、東日本旅客鉄道㈱、東京地下鉄㈱●建築設計／渋谷駅周辺整備計画共同企業体（㈱日建設計、㈱東急設計コンサルタント、㈱JR東日本建築設計、メトロ開発㈱）●デザインアーキテクト／㈱日建設計、㈱隈研吾建築都市設計事務所、㈲ SANAA事務所●屋上展望空間／約2,500㎡●屋内展望施設／約3,000㎡●開業／第I期（東棟）：2019年11月●所在地／東京都渋谷区渋谷 2-24-12



お気に入りの場所を見つけてピクニック

## 十和田湖畔の中・長期滞在オフィス＆カフェ「yamaju」

風景屋 ELTAS

2F建のリノベーション。1Fは平日オフィス、休日がカフェ。2Fは4泊以上のゲストハウスとして、令和元年6月中旬に開店しました。「yamaju～あずましい湖を楽しむうつわ～」。南部地方の方言で「心地いい、落ち着く」という意味の「あずましい」。それを楽しむ装置としてのうつわのような建築。yamajuはより長い時間を十和田湖とともに、綺麗を超えた美味しい空気のなかで過ごしてもらうための媒体です。そんな想いから、カフェのメインはピクニック。ミラノから取り寄せたリラックスチェア、竹のおべんとう箱を竹カゴに入れて、湖畔へ出かけていきます。そして、長期滞在する人は晴耕雨読。晴れた日は自然の中で過ごし、雨の日は仕事する。そんな気候とともに日常の時間の過ごし方を選択する場所です。

建物の周りに広がるのは数万年かけて形成された日本で唯一の二重カルデラ湖と、原生的な森。樹齢数百年を超える樹がそこかしこに存在します。建築の外構の樹はブナ、クロモジ、オオカメノキ、ハウチワカエデ。ブナとブナ樹林帯の御三家といえる樹々です。土は地域の人がつくった純十和田湖産。湖畔の軽石と腐葉土を混ぜたオリジナルです。今後はyamajuを基点として、人が使わなくなった土地を自然に還す実生育てや、土づくりも始まります。湖畔でぼーっとあずましく過ごしませんか。（文＝風景屋 小林徹平）





●主要用途／オフィス、カフェ、ゲストハウス●企画・計画・運営／風景屋 ELTAS●建築設計／飯塚哲平、山下祐平●施工／㈲大平建設●延床面積／380㎡●構造／1F S造、2FW造●竣工／2019年6月15日●所在地／青森県十和田市奥瀬十和田湖畔休屋486●URL／https://yamaju-laketowada.jp/

### WORKS MOVEMENT 情報投稿募集

**「WORKS MOVEMENT」コーナーでは、毎号につき最新のランドスケープデザインのニュースを取り揃えております。1年以内に竣工したプロジェクトや、今後オープンを迎えるプロジェクトなどを紹介します。ここで紹介したものの中で編集部として注目したいと考えた物件や、読者の反響の多かったものについては、「LANDSCAPE WORKS」での紹介へと繋げていきます。この機会に、ぜひ御社の関連プロジェクトをお気軽にご投稿ください。**

『ランドスケープデザイン 127号』への掲載は
**2019年7月15日（月）**までに
データを揃えてメールまたは郵送にてお送りください。

<掲載内容>
- 写真　1～5点
- 物件名
- ランドスケープ設計社名
- 概要　300～400字
- データシート　事業主／主要用途／設計／施工／規模／竣工／所在地をデータとしてまとめ、お送りください。

※写真解像度は、350dpi
※テキストデータは、docファイルまたはtxtファイル

お送り先
〒150-0036　東京都渋谷区南平台町4-8　南平台アジアマンション708
TEL：03-3496-7046　FAX：03-3496-7387
E-mail：design@marumo-p.co.jp（中村宛）

# 被災地、石巻からの手紙

拝啓
いつも大変お世話になっております。一般社団法人石巻・川の上プロジェクトの三浦信行でございます。このたび、マルモ出版の皆様より地域のコミュニティセンター「川の上・百俵館」にご寄付いただきました「MyGARDEN」や「LANDSCAPE DESIGN」をはじめとするたくさんの書籍について、心から御礼を申し上げさせていただきたく、お手紙を送らせていただきました。

大変おかげさまで、いただきました多数の書籍は、多くの地域の方々に読んでいただいております。地域ではまちづくりのプロジェクトが進行しており、その観点からLANDSCAPE DESIGNに大変興味を持って読まれる方が多くいらっしゃいます。また最近、百俵館近くに、防災集団移転地である「二子団地」がまちびらきし、多くの方々が移られてきました。二子団地の特徴としまして、すべての家が一戸建てとなっており、各家には庭が配備されております。多くの移転者の方々は、待望の家ができたことで工夫を凝らした庭をつくろうと試行錯誤されている様子がうかがわれます。そういうことからでしょうか。MyGARDENは大変多くの方に読んでいただいており、私どもとしても大変感謝の気持ちでいっぱいでございます。

ご存知のように、川の上地区は、東日本大震災後に大きく変化をした地域の一つです。震災による直接的な被災は少なかったものの、それゆえに、被災された沿岸部の方々が移転する防災集団移転地に選ばれました。もともと川の上地区には約400世帯の住民が住んでいましたが、新たに約400世帯の人たちが移転することになりました。そして昨年、前述のように、震災から7年という長い歳月を経て、石巻市最後の防災集団移転地「二子団地」がまちびらきしました。

こうしたなかで、既存住民と移転住民がどのようにして手を取り合って新たなコミュニティをつくれるだろうか、そして、このさき地域の人たちがいきいきと暮らしていくために何かできないだろうか…という思いから、私たちは2013年に活動をスタートしました。私たちは、まず幾度となくワークショップを重ね、新しいコミュニティには「居場所」「教育」「暮らし方」を考えることができる「場」が必要であるという考えに至りました。そして、この場の創出にあたり、大正時代につくられた旧大谷地農協の精米所を地域の人たちと一緒に改修作業をして、新旧住民をつなぐ図書館カフェ「川の上・百俵館」を2015年4月に開館しました。このときは住民たちが資金を出し合うとともに、多くの方たちのご支援によって改築工事を成し遂げることができました。


写真は百俵館・米カフェ代表の高橋信子さん

百俵館は完成しましたが、このような場をどのように活かすかは、やはりそこにいる人の存在、そして、それをご支援いただく多くの方々のご協力がなくして成し得るものではございません。おかげさまで開館から4年がたち、来年は5周年を迎えようとしています。マルモ出版の皆様には開館当初より、大変温かいご支援をいただき心から感謝の気持ちでいっぱいでございます。ここに近況のご報告とともに、心から御礼を申し上げさせていただきたいと思います。是非、ご機会ございましたらまたお立ち寄りいただけますと幸甚でございます。

敬具

一般社団法人石巻・川の上プロジェクト
代表理事　三浦信行







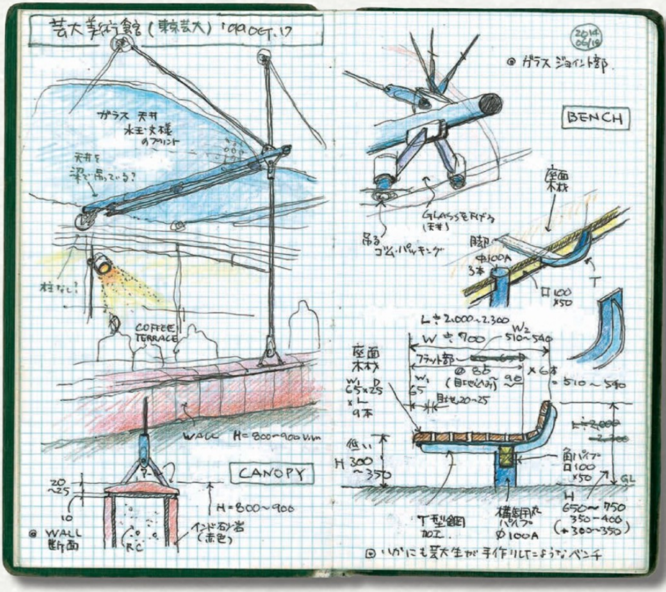

# ランドスケープをメモる ❽

間野賢二

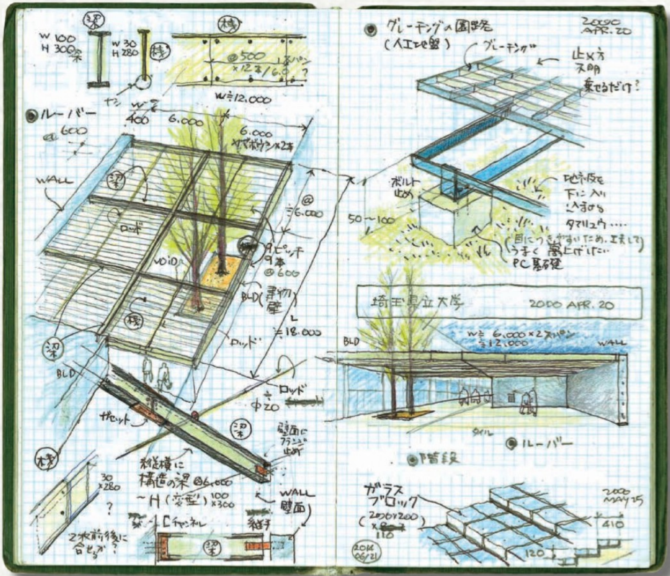
landscape design memo
mano note

## フィールドサーベイ-1（大学・美術館）

**言うまでもないが、空間を知るには現場に限る。とりわけランドスケープでは、その場に立つことで感覚が解き放されて刺激され、理解がいろいろと深まる。また、新しく発見するようなことも多く、現場ならではの楽しみが味わえる。そんなサーベイのことをメモにつづってきた。**



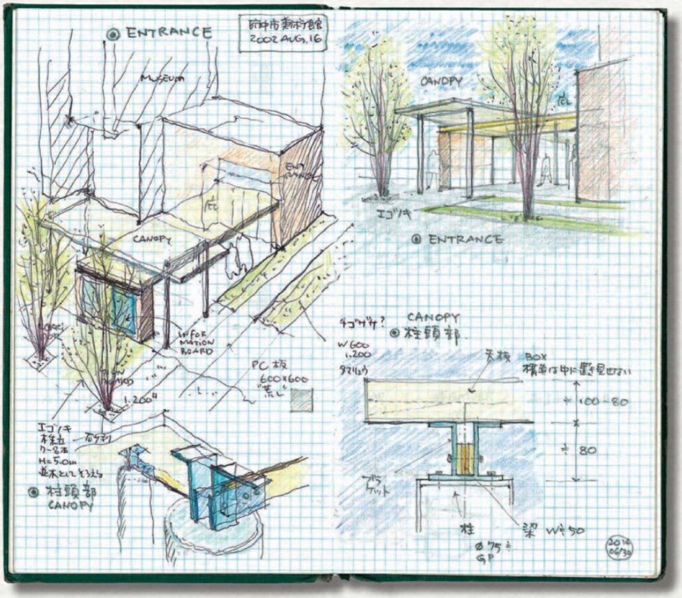

東京芸術大学を訪れる。
その美術館に居心地のいいカフェテラスを発見。キャノピーや腰壁がつくる佇まいに、センスのよさを感じた。
また、草原にそっと置かれたベンチも風情があり、そのさりげなく素朴な造形にも共感する。
校内はそれとなくアートの香りが漂い、芸大のプライドを見た気がした。



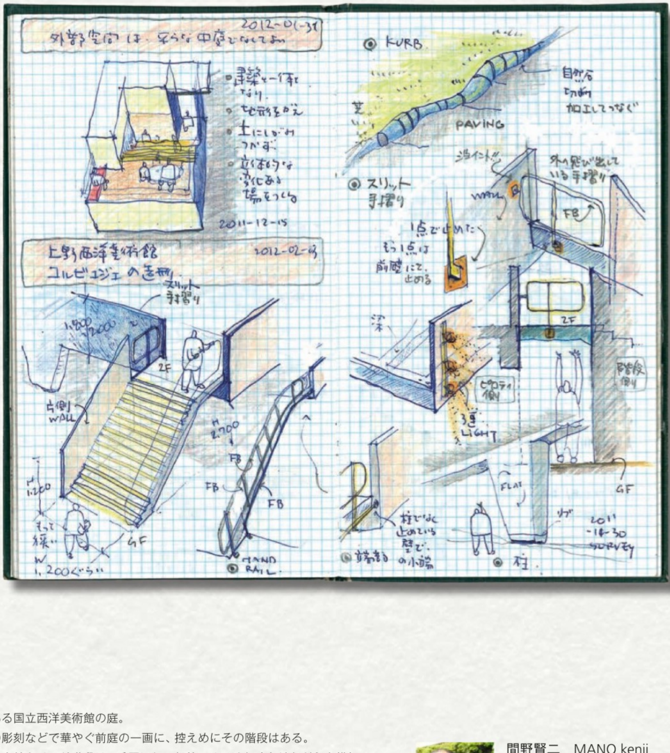

埼玉県立大学のキャンパスを見て回る。
低層棟が入組んで複雑な平面を形成し、また、立体的には連続したルーフテラスが地上と混然一体となっていて、
味わったことのないような豊かな空間をそこに感じた。
そんな新鮮な空間体験をしながらも、ついディテールに目が行き、そのまとめに終始してしまった。

landscape design memo

mano note




東京都下にある府中市美術館を見学した。
ランドスケープは、秩序をもった幾何学的な空間が美術館らしいモダンな造形とともに端正にまとめられていて、
抽象絵画を思わせる。
キューブ（矩形）がデザインに多用されているのに気づき、
そのきっちり整ったイメージを玄関口のスケッチで表そうとした。




上野にある国立西洋美術館の庭。
ロダンの彫刻などで華やぐ前庭の一画に、控えめにその階段はある。
本館２階を結ぶその外階段は、重厚にして軽快、そっけなくありながらも繊細。
そんな趣ある光景と美しいディテール、納まりのよさに深く共鳴してきた。
また、植込みの縁石も個性的。

次回の「フィールドサーベイ」では、伊勢神宮などを紹介したい。



**間野賢二　MANO kenji**

ランドスケープアーキテクト
千葉大学園芸学部造園学科卒（1973年）
SHAH ALAM Central Park（Malaysia）
東京ディズニーランド・東京ディズニーシー（植栽）
合歓の郷・つま恋（YAMAHA Resort）
中央区築地川公園、新仙台天文台（外構）
岡谷市湖北火葬場（外構）など

ランドスケープアーキテクトのための

# 日本庭園講座

## ～智恵と技術を学ぶ～

## 第四回「桂離宮の美と技を語る③」

企画・文＝戸田芳樹（株式会社戸田芳樹風景計画代表）

資料・文＝野村勘治（有限会社野村庭園研究所代表）

### はじめに

2回にわたる連載で桂離宮の全貌が少しずつ捉えられて来たが、いよいよ具体的な空間デザインを述べてみたい。私も桂離宮には数回訪ねているが、5年前に鑑賞した時にはデザイン情報があまりに多く、最後には頭が痛くなった記憶がある。それ程、見どころ満載の桂離宮であるが係員の後をついて行くと、あっという間に見学は終わってしまい、庭園が唯単に美しいだけで終る可能性すらある。空間のかたちには必ずその背景がある事を今まで学んだが、その知識を踏まえてこの章を読み進めていただきたい。（戸田芳樹）

| 1.桂離宮庭園のコンセプト<br>～3つの世界～ | 2.桂離宮庭園のプログラムと空間システム<br>～4つの構成～ | 3.桂離宮庭園のデザイン技法<br>～2つの目的と4つの技法～ |
|---|---|---|
| (1)白楽天の世界<br>(2)源氏物語の世界<br>(3)茶の湯の世界 | (1)軸の構成　(2)空間の構成<br>(3)移動の構成　(4)時と行為の構成 | ●デザインの目的<br>(1)もてなしのデザイン　(2)用と景のデザイン<br>●デザインの技法<br>(1)ゆらぎとずらしのデザイン　(2)軸とベクトルのデザイン<br>(3)空白と補足のデザイン　(4)時間とスピードのデザイン |

### 3.桂離宮庭園のデザイン技法 ～2つの目的と4つの技法～

#### (3)主要エリアのデザイン

**戸田芳樹氏（以下、戸田。敬称略）** 広くてバラエティに富んだ桂離宮の中で、特にデザインの密度の濃い3つのエリアを選び、その空間デザインを解きほぐしてみたい。選んだエリアは「空間の構成」で述べた「真・行・草」にたまたま当てはまるが、特に意図して選んだ訳ではない。

- 松琴亭に至る露地空間（行の空間）
- 書院坪庭と書院群（真の空間）
- 笑意軒とその周辺（草の空間）

#### I.松琴亭に至る露地空間

**野村勘治氏（以下、野村。敬称略）** シークエンスにより表現された代表的空間が露地であり、前述した「移動の構成」からさらにポイントを絞り、松琴亭に至る道のりを述べていきたい。松琴亭は一般の露地より遥に長く作られており、シークエンスには仕掛けがたっぷりと施されている。この空間を図上で検証して「暗と明・結界」「視点場と視標」「石組の構成」のキーワードで作庭の技法を明らかにしていきたい。

①「暗と明・結界」

日本庭園の園路は暗と明を繰り返しながら人々を奥へ奥へと誘い込む。ここでは池に接する園路が圧倒的に長く「明の空間」が連続するが、場面の切り替え点には「閉じた暗空間」を潜らせメリハリを付けている。

1 紅葉馬場の霰こぼし舗装は美しく、樹木で覆われた「開いた明空間」から松琴亭に向かって露地はスタートする。

2 左に折れわずかに上る飛石からは露地に入る緊張感のある「閉じた暗空間」で、ステップの頂部に露地に入るサインとしての結界Aがある。

3 左に一旦筋を違えた飛石を踏んで右へと進み先方に外腰掛が現れ「開いた暗空間」となり場面が転換－aする。

4 暗から明へと飛石伝いに進むと大飛石で一気に「開いた明空間」に進み、外腰掛前の「行の敷石」が行く手を示す。

5「閉じた暗空間」における「行の敷石」は左右の拡がりを強調しているが、一旦敷石に立つと延長軸に早変わりして行く手の活込燈籠がアイストップとなって導く。そして少し敷石を残し手前から左の飛石へターンして場面転換－bに進む。松琴亭は前方にあるはずだが手前の樹木によりまだ見えない。

6 左にターンした飛石の足元は凸凹で暗く、視線が下方を向く「閉じた暗空間」となり渓谷の水音と、奥の石橋の景に引かれて進んで行く。左前方の滝音と共に石橋を渡ると右手に水面が大きく広がり、明るくおおらかな姿の松琴亭に出会う。

7 場面転換－cからは「開いた明空間」で桂離宮随一の絶景が連続して望まれ、飛石を伝いながら徐々に洲浜に近づく。水面に近い場面転換－dを経て浜道を進むと、わずかに他より高く黒い飛石が視点場を示す（場面転換－

ⓔ)。ここから右に90°振る景色こそ絶景でクライマックスを見納めに外露地は終わる。

[8]結界[B]のサインは織部燈籠で「閉じた明空間」の内露地がスタートする。ここでは横一文字の「乗越石」が別世界に入った事を明確に伝えている。

[9]さらに進むと白川橋を含めた内露地は「開いた明空間」で、卍亭に進む結界[C]を横にして場面転換ーⓕがあり、松琴亭が間近に迫ってくる。

[10]白川橋の渡りは「閉じた明空間」で、放射状の飛石のある「閉じた暗空間」へと進む。

[11]そして「流れ手水」を使って茶室に導かれ、露地のシークエンスはここで終了する。

[12]最後に松琴亭の脇の結界[D]を通り前面にまわると古書院まで臨むパノラマが見え、来訪者全員を感激させる瞬間が待っている。

この様な長大な露地は桂離宮以外では稀で、様々に変化する景観はまさに客をもてなすエンターテインメント空間に相応しい作りとなっている。

②視点場と視標

松琴亭に至る長い露地のシークエンスを述べたが、歩行を誘導する視線の構成も見ていかなければならない。視点場と視標の関係を燈籠等の点景物を対象として、ひとつひとつ明らかにしていきたい。

1.外露地入口の飛石は踏石が視点場❶となり、左前方に円形活込燈籠(視標①)に視線が流れる。踏み出しは視標と逆の右に外し、二石目で視線を戻し左右の均衡をコントロールしている。軸を外して踏み出すのは桂離宮ならではの手法で注意して見ておきたい。

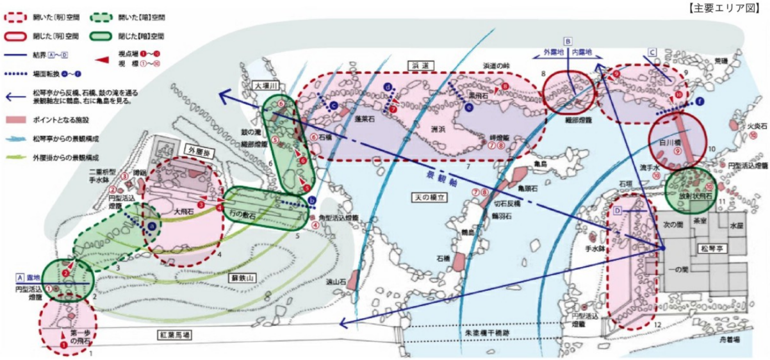
2.暗空間に入った視点場❷の飛石から右前方の円形活込燈籠を視標②として見せる。ここの飛石も一旦軸を外し景の均衡をとると共に目を一瞬落させ次へと視線の方向を促し、場面転換を鮮やかなものとしている。

3.敷石の途中、見返しの視点場❸から二重桝形手水鉢(視標③)、円形活込燈籠を見せて景観を整えている。

4.進行方向は視点場❹から敷石の終点の角形活込燈籠の視標④に向かっている。燈籠は敷石から30°振って進行方向を暗示し、一気に場面転換する景観の予兆としている。

5.左に曲がった視点場❺から前方に視標⑤の織部燈籠があり、ここでは進行方向に対して45°振って渓流奥の切石反橋へと視線を導く。

【主要エリア図】





紅葉馬場より左折、露地のスタート [1] [2]


外腰掛が見える [3]


「行の敷石」と燈籠、左手の飛石を進む [4] [5]


「鼓の瀧」が聞こえ奥の石橋が見えて来る [6]


桂離宮随一の見せ場 [7]


見返しの絶景 [8]


内露地は浜道の峠の頂上から始まることが分かる。右に織部燈籠 [8]


白川橋周辺の明るい内露地は次第に暗くなる [9]

6. 石橋の手前の視点場❻からは前方に石橋、左方に視標⑥の「鼓の瀧」が眼下にあり重心を一旦左にかけている。そして石橋に立てば右手が「天橋立」のパノラマ景観となり、桂離宮ならではのシークエンスの巧みさが体験出来る。

7. 洲浜に近づいた視点場❼から視標⑦の岬型燈籠を前方に見ながら天橋立、松琴亭の佳景が連続するシークエンスが楽しめる。

8. 園路の中で目立つ黒飛石は視点場❽となり、振り向けば岬型燈籠、切石反橋（視標⑧）を通して月波楼、書院の絶景が見られる。

9. 内露地に入った視点場❾から視標⑨の白川橋と松琴亭の側面が現れ、明らかに別空間に移動した事がわかる。

10. 視点場❿から左に「火炎石」右に「流手水」の視標⑩を見ながら白川橋を渡る。橋上の浮遊感と意味を込めた飛石の構成が心に響くスポットとして受け止めたい。

### ③石組の構成

桂離宮の中で石組は松琴亭周辺まわりに集中しており、建物側からのパノラマと石組の軸線構成について述べたい。松琴亭側から天橋立を眺めていると、不思議と囲まれている様な感覚を覚える。そこで天橋立の護岸や中島の位置を観察すると、松琴亭から円弧状に主要な石組が並んでいる事に気付く。ここでは次々に景を連続させ、絵画の様に仕上げていく技法を使っているようだ。絵画的に構成した石組は中世の頃からあり、雪舟の庭園や狩野元信の退蔵院庭園等、絵師作の庭園に見られた。また、外腰掛から見ても地形と石組による半円形の空間デザインの意図が見られ、まとまりのある景観が作られている。

次に切石反橋の中心を通って露地の石橋、鼓の瀧に到達する軸線に注目したい。反橋の石組をよく見ると鶴亀石組である事にまず気付く。橋の左手前の橋添石は鶴の羽石で石橋が首、右手の樹木で見えにくいが亀頭石と亀甲石が水面に写る。この鶴亀の中心を通る軸の設定は銀閣寺東求堂からの景と同じで、月を愛した足利義政へのリスペクトがあったのであろうか。

**【コラム-1】廻遊式庭園の明と暗**

近世の廻遊式庭園のルーツとされるのが茶庭だが、浮世と区別する出入口を家の脇に別に設け、奥の市中の山居へと導く細い露天の道を通したのが始まりである。大空間である浮世から極小の空間である茶室との間にあって、こんな言い方は身も蓋もないが、徐々に慣らしていく気圧調整空間の様なものであった。

露地は腰掛、中門、時として中潜りなど明と暗、開と閉を繰り返し、同時に待機も含めたホストによるコントロールに客は翻弄される。最たるものは中潜りで、障害物競走まがいの結界となるが、尋常の度を超している。日頃鍛えてない高齢者には諦めてもらうしか無いが、これを潜る時、視野は低くなり地表の景色をしっかり見る事になるなど、浮世の世界をすっかり忘れている事に後から気付かされる。

明暗、開閉の空間操作は小空間に導く為だけでなく、いかに浮世を忘れさせるかにもあったと言える。その意味でも桂離宮はアプローチを直角に曲がる度に浮世を振り払う一方、約束事の中門を最初から取り払い、水辺の露地にさり気なく峠を設え、いささか大げさに乗り越え石を横たわらせ、秀景の妨げにならぬ様、配慮している。空間は広くとも狭く見せ、平均台の様な白川橋を最後に用意して松琴亭の躙り口へと招き入れている。束縛となるようなセオリーを智恵でかわす桂離宮の柔軟な姿勢は小気味良いものだ。


視点場❶から円型活込燈籠①を見る


視点場❻から織部燈籠、鼓の瀧⑤⑥を見る


視点場❼から岬型燈籠⑦を見る


視点場❿から白川橋⑩を眺める

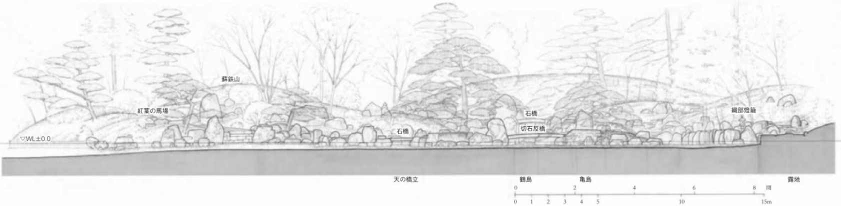

松琴亭からの軸、左手に鶴島の羽と首が、奥に石橋と織部燈籠が見える


水面に写った亀頭石と亀甲石


松琴亭から感じられる囲われた石組群


【左】中門のフレームで見た手水鉢
【右】庭門のフレームで見た手水鉢

**【松琴亭から見た天の橋立の立面図】**



## Ⅱ.書院御輿寄坪庭と書院群

**野村**　書院坪庭は緻密に計算された中に自由なデザインもあり、格式のある空間でありながら、ゆとりと遊び心が見られる日本一の坪庭と言うべき素晴らしい空間である。この小さな空間には以下のキーワードが盛り込まれ、現代にも通じるデザインの展開がなされているのでじっくりと見て行きたい。

**①舗装のヒエラルキー**

入口までの砂利敷(現在は霰こぼし)から、中門では大粒の霰こぼしの中に自然石の踏石を、次に切石で「田の字」とした格式高い舗装の流れは、草･行･真と変化しながら書院に近づくヒエラルキーを構成している。

**②建物のフレーミング**

中門からは方形立手水鉢、庭門からは織部燈籠、方形立手水鉢が見事なフレーミングで捉えられ、目が先に進んで坪庭に入ってしまうほどである。

**③飛石の等比級数**

「田の字」の敷石から続く方形の飛石は目地が等比級数的に広がり、さらに進行とは逆の方向に向いた「くの字」意匠は遠州好みのデザインで、現代に応用できる程の普遍性を持っている。

**④空白と補足の美**

「くの字」の飛石の先に行き先のない飛石が2つあるが、これが桂らしさの現れである。方向転換する歩みに対し視線が先の飛石を捉えて余韻を残し、足よりも目が先に歩む作りは桂離宮独特のデザインと言える。

**⑤遠近を感じさせる敷石**

「真の敷石」は真北を指し、建物と軸をずらして斜めに設置しているのがおもしろい。その結果、建築に支配されず敷石の距離が長く奥行きが深くなり、さらに左手の盛土で御輿寄を隠して、心理的に坪庭をより広く感じさせている。


御輿寄から見た敷石と飛石の「八の字」

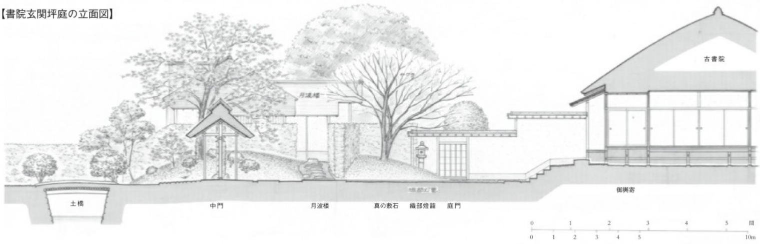

「くの字」と補足の飛石。目地に注目


2つの敷石を「八の字」に打ち意図的なデザインとしている

【書院玄関坪庭の軸線図】




【書院玄関坪庭の立面図】



⑥敷石における軸の工夫

「真の敷石」のセンター軸は沓脱ぎ石のおおよそ右角に当たり、その先の室内の柱をアイストップとしている。御輿寄から見返すと右手の長石と共に作った二等辺三角の構成は安定している。建築に対し中門や生垣、土橋も微妙な角度でずらし、フォーマルであるが揺らぎのある空間をつくり上げた。

⑦実用的工夫と視覚矯正

細かい事だが沓脱ぎ石の天端はわずかにカーブして水溜まりを防ぎ、石の幅は建物側をわずかに長くして落ち着き感を出している。

池に面した古書院前の飛石も見どころ満載で、敷石は「稲妻形」の二筋を平行に設け、その先端を少し突き出して余韻を持たせている。飛石も平行に打ち敷石との間にいくつかの正三角形を作り出し、フォーマルでありながら動きのあるデザインとしている。建物に近づくこのあたり、形態操作の中に小堀遠州の姿が見え隠れするのが桂離宮の特色と言える。

### Ⅲ.笑意軒の周辺

**野村**　桂離宮の最深部に位置するのが笑意軒で、「梅の馬場」より見る外観は水平方向が長く、一見農家風の松琴亭に比べ近代の数寄屋建築のプロポーションを思わせる。桂離宮の中でこの一角は生け垣で囲われ、元禄期の絵図には冠木門と芝垣が続き、他とは隔離された空間であった。普段は宮家一家のプライベートな空間で、前に広がる池や舟着はほぼ今と同様の姿と規模で描かれている。

桂離宮のアトラクションで欠かせないものに舟遊びがあり、中でも二重の土橋の橋潜りは大いにうけたはずである。矩形の池は遠州好みの仙洞御所の写しとも言えるが、むしろ舟着と見るべきで湊気分満点だったはずだ。三光燈籠も桟橋のデッキランプのようで、全体としてこのエリアの演出は庭づくり的では無く、現在のテーマパークの発想に重なるリアルな津や湊の再現だったと言える。これに因み笑意軒の板戸には舟を漕ぐ櫂と矢の引手を表現している。また、見方を変えれば矢場や馬場さらに蹴鞠など、アクティビティ溢れる空間に対応するクラブハウスでもあり、関連意匠の外は飾り気がないのが意図的と言える。

笑意軒での楽しみのひとつは開かれた窓から見える田園風景や天王山、男山であった。まさに修学院離宮の小型版といえ、民の営みを見る楽しみを別荘生活の中に加えたもので、田園方向から見る外観も松琴亭以上に農家そのものである事が微笑ましい。笑意軒からは書院群が北側に位置し、南からの順光を受けた姿は当時としても観賞に値する建築美で、桜の木立を透かした眺めも格別であったはずだ。部屋の北側にはこれを遮るものは一切無く、地表も飛石ではうるさくなり「草の敷石」にしたと考えられ、対岸の雪見燈籠は書院の景色を妨げていない。

庭園的設えとしては軒先の「浮月の手水鉢」がその名のままに名月を映す東側にあるが、部屋からは北東側にあたり月は映らない。むしろ手水鉢は2つの土橋を透かす軸線上のポイントとしての役割を持っている。

**【コラム-2】瀧の造形を支える音、音を支える造形**

嵯峨院の「名古曽の瀧」、法金剛院の「青女の瀧」など、名園に名瀑ありと更なる高みへと導いたのは夢想国師であった。山中での修行を好んだ夢想国師の自然の観察力は景観のみならず技法においても新たなる高みへと導いた。

瀧石組は西芳寺の枯瀧がよく知られているが、実際に水を落とす例としては同時期に造られた天龍寺の龍門瀑は約4.2mの高低差。築山の頂部から落ちる瀧は一般的には枯瀧と思いがちだが、かつては背面の山麓に湧く水を懸樋で導水し実際に水を落としていた。

しかし方丈との距離は下段で45mあり、景色こそ立派でも少ない水景では水音も無く迫力不足は否めない。改めて平面図上で確認すると方丈の中心軸にあるのは岩島で、瀧の下段は中心軸より5m左に位置する。下段より約3m手前で右に5mの位置に、今は涸れた水路の吐水口が小さな築山の山陰にある。

昭和初期の重森三玲の図面には導水路跡に排水路？と疑問符を符して記入している。築山の排水路である事は間違いないが、池への落口には栗石が撒かれており、これは水音を響かせる導水路と思われる。天龍寺の瀧は見せる龍門瀑と、聞かせる陰の導水路と一体であったと言える。

瀧に水の響は必須で、かつて四条大納言公任は

瀧の音はたえて久しくなりぬれど
名こそ流れてなほ聞こえけれ

と詠んだ名古曽の瀧は落差が少ししかなかったが、瀧の下流の遣水の幅が広い所から察すると、水量が豊かで瀬音がよく響く瀧だったと思われる。



笑意軒を対岸より見る



農家らしい設えの外部デザイン

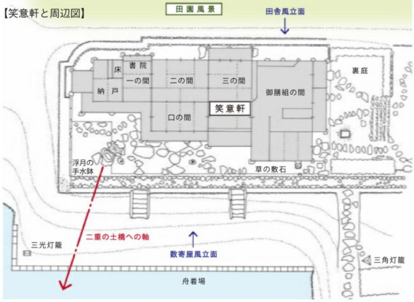


笑意軒内苑と腰掛跡



蹲踞(浮月の手水鉢)の設え。後方に新書院が見える

【笑意軒と周辺図】



## (4) デザインの技法

**戸田**　今まで重要なスペースにおけるデザインの構成を記したが、細かな技法についていくつかのキーワードを使って確認したい。

### ①「ゆらぎ」と「ずらし」のデザイン

建築と庭園の関係は建築による厳格な軸組に対して、庭園側は施設や園路をわずかにずらし、ゆらぎをもたらしている。松琴亭への露地の入口付近は移行空間として、ゆらぎのある異次元の世界をソテツの集団的扱いで表現した。他では小石川後楽園のシュロ、中国庭園の洞窟を用いた庭園への導入部などの事例がある。また、桂の飛石は踏み出しを進む方向とは逆に打ち、足元への視線を一旦ずらすなど、歩み以上に視覚的に左右を強調しているのが特徴である。

### ②軸とベクトルのデザイン

庭園全体の大きな軸組構成は前回説明したが、ここでは細かく見ていきたい。桂離宮で多く出現する直角に曲がる園路は緊張と驚きを与え空間シーンを引き締め、燈籠等の配置はスムーズなシークエンスが得られる角度に決められている。

書院坪庭で軸を様々に扱って構成しているのはすでに述べた。燈籠、手水鉢を建築のフレームに納めた技法や、沓脱石まで続く斜めの「真の敷石」は強いベクトルを示している。さらに沓脱ぎ石から見た敷石のベクトルは意図的な2方向への角度を持ち、どこまでも作者の意図は明快である。

### ③空白と補足のデザイン

外腰掛に入る空間は少し緊張を伴うが、内に入ればホッとするスケールで、必要に応じた燈籠や手水鉢等の小物が要所に配されている。飛石に目を転じれば一歩先の余分なスポットに1～2石を補足し、敷石でも余りを残して手前でターンする等、用だけではなく景にも目を配っている事がよく分かる。

また桂離宮では現代の庭師の禁じ手、飛石の角と角を合わせた意匠（筋違い）が多く見られる。これは1点合わせとなり緊張感をもたらすが、逆に石の浮遊感も見られる。この角違いの技法は日本美学のひとつで小堀遠州が得意とする所であった。さらに視線を下に向かせ、足元や施設のディテールを見せてシーンの切り替えの句読点とし、水の音などを聴くことで次の出会いを予感させる工夫も、桂離宮ならではの世界である。

### ④時間とスピードのデザイン

ゆっくりと歩かせる為に飛石を使うが、天橋立を望む途中に少し上がる峠があり、路が上がると共に視野も広がり、周囲を見渡して欲しい空間である事がわかる。また松琴亭を過ぎて先に進む飛石は背後の林に向かって真っ直ぐに打たれ、スピードを上げて通過せよとのサインといえる。これら飛石の大きさと表面の仕上がりにより先に進むべきか、止まって左右を見るのか、各自が感じて行動すれば新しい体験となる。また各所に見返しの景を必ず作っているので、そこで止まって見返して自分の景を発見して欲しい。見返しは体験した時間の振り返りとも考えられ、まさに時間のランドスケープに出会う事になるのではないだろうか。

## (5) ディテールの考察

**戸田**　いよいよ各部のディテールについて見ていきたい。ここでは桂離宮以前に作庭された名庭園と桂離宮との関連を今一度おさらいして、各々のディテールがどの様な成り立ちで、どの様なオリジナリティがあるのか、施設を取り上げながら解いていきたい。

### ①三橋の歴史

**野村**　桂離宮は月にこだわる点において銀閣寺以上といえるが、松琴亭前の天橋立と鼓の瀧の構成はコラムで述べた銀閣寺東求堂前の景観を左右反転させたものと瓜二つである。2橋を3橋とするトリックは天橋立には無く、単なる2橋となったが瀧の石橋を加えれば平面的には同じ構成である。

因みに天橋立の左側にはかつては紅葉の馬場から松琴亭へと長大な朱塗りの木橋が架け渡されていた。違う見方をすれば中央の石橋（草）、右の切石反橋（行）と木橋（真）と、3態の橋となり遠州好みの「真行草」取り合わせたゴージャスな3構成がかつて見られた。


天龍寺の三連橋


銀閣寺の橋


天の橋立の石橋三橋


螢谷の土橋


ソテツを使った異次元の世界


外腰掛から直線で進み直角に折れ曲がる手前の山道と右の浜道


松琴亭に向かう浜道には峠をつくり、上方からの見返しも行う


補足のデザインを繰り返す飛石の技法

②瀧の音

桂離宮で唯一の瀧が「鼓の瀧」だが落差は20cm程度で水音はさほどではない。流れのモデルは桂川上流の大堰川で、その低い堰の見立ては源氏物語り「松岡」からの引用である。桂離宮は全体として険しい石組を排除しているが、ここでは狭く深い渓谷として景色だけで無く水音を増幅する反響板を設け、更に効果を高めるのが石橋と無駄がない。音を届ける松琴亭の座敷までは天龍寺と同じく45mで、今でこそ聞き取るのは困難となったが、静寂に包まれた古の庭園では涼やかな響きを部屋に届けていた。

③飛石の景

一般に部屋や腰掛等、特別なビューポイント（視標）がある場合は手前を大きく、次第に小さくなるように飛石を打つ。これは実際の空間以上に奥行きを深く見せる手法で、桂離宮では古書院と外腰掛にその見所がある。中でも古書院南庭は本来白洲だった所で、中央から左奥へと向かう飛石は南に拡がる余白にあらがうように稲妻状に打たれ見事である。残念ながらとっておきの景は部屋からのもので、逆から見るデザインは破綻しており観賞に値しない。

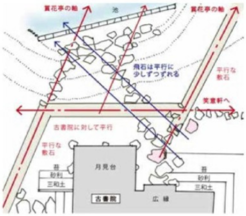
飛石は進行方向からの見方を主として景が成立する事が多いが、桂離宮は素晴らしい景観を見返しに用意するのも度々である。御輿寄の前の飛石は玄関に向かう景観がストイックなほど飾り気がないが、縁から見返す景観は拡がりがあり開放感溢れる華やいだ景となっている。

また外腰掛では巨大すぎると思える程の大飛石が見返しの景において遠近感を一層強調する効果を生んでいる。この大飛石は異様に大きいもののあまり重さを感じない。それどころか漂うような浮遊感さえ感じさせるが、これは飛石の見せ方のセオリーである合端を合わせる事なく飛石の角1点のみで繋げて打っているからだ。その結果巨大な飛石の接点を結ぶ線上を歩く事になり、無言のナビがゲストを案内する事となる。桂離宮では小さい飛石も合端を合わせず、互いを馴染ませる取り合わせをしていない。ある意味、遠州好みのクライマックスとも言える松琴亭の市松模様を飛石の構成で予め見せ、庭屋一如を演出する周到な仕掛けと見るべきであろう。

④敷石・延段の景

庭園内を縦横に延びる敷石は必ずしも一度に出来たのではない。御幸道や紅葉馬場の霰こぼしの石畳は明治期の桂離宮整備に伴って

【月見台と飛石の図】





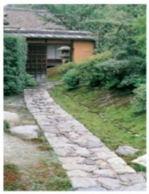

古書院から見た飛石と敷石



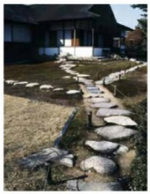
古書院前の舟着の飛石



園林堂横の角度を変化させた飛石



庭門からフレームで見た織部燈籠



古書院に向かうダイナミックな飛石

【コラム-3】コンセプトから生れた橋のデザイン

我国最古の庭園の記録は推古天皇20年(612)に小墾田宮の南庭に須弥山と呉橋を百済人の路子工が造ったという日本書紀の記述である。この時の橋は精巧な造りの石橋だったと思われ、庭園の黎明期から橋は重要なアイテムであった。平安時代の浄土庭園は木造朱塗りの平橋と反橋の2橋をセットとし、取り分け反橋は浮世と聖域、浄土との結界であり、互いを結ぶ存在でもあった。

南北朝時代、夢想国師は西芳寺に巨大な中国式亭橋を架けた一方、同時期の天龍寺では龍門瀑の下に天然石の3橋連続の橋を架け渡した。3橋とは三界（欲界・色界・無色界）、三教（仏教・道教・儒教）、三世（過去・現在・未来）等、解釈は様々あり、庭園は鯉（雲水）が登り龍（悟り）と化す修業の場で、瀧は道場そのものである。鯉の棲む池（浮世）と聖域を隔てる橋は池から見れば三間の三門に等しく、人が渡る橋では無く鯉（雲水）が潜る門となる。

夢想国師以来我国の庭園造りは一変し、橋も三橋を踏襲するようになった。その代表的な庭園が足利義政の銀閣寺で、東求堂の前にある白鶴島を中央にし、右に2連を1橋に見立てる仙袖橋、左に仙桂橋を架けて合計3橋にこだわる奥行きの深い景観としている。その上、各々の名称は洗月泉、臥雲橋、仙桂橋と名付け、月に因んだ構成にしている事にも注目したい。

【コラム-4】飛石の深い表現

世界の庭園で特筆に値する歩道が飛石であり、最もプリミティブにして人のコントロールを可能にするものは未だ他に無い。飛石は茶庭から生まれたもので、茶室へと導く露地は埃を押さえるために水を庭に打ってもてなすが、雪駄が濡れる不都合が生じ、その対策として考案されたものだった。延段等の敷石も考えられなくないが、茶庭が思い描く奥山の野趣や自由度は失われるし、施工が容易な事等から茶庭ではもっぱら飛石伝いに各々の空間を繋ぐようになった。飛石は歩行に支障の無い限り自由に景観を作る事が出来、芸術性を優先する広間前の空間等に描くように打たれ、モダンアートのような景を生みだした。

打つとは碁石になぞらえた飛石の表現で、碁石は面的に拡がるが、飛石は点々と打たれ線でつなぐが、面的に拡がるように見せる場合もある。例えば、古書院の広間から庭への空間は飛石の見せ場で、手前に大きな石を左右に拡がるように打っている。これは部屋の空間に合わせ横の広がりに対応するためで、人を庭園の深部へ導く時には、見た目程左右に揺れる事無く、スムースに渡る事ができる。

また、桂離宮で感じるのは力押しで石組や名木を見せるでもなく、ある種の心地良さを伴う緊張感が漂う事である。あえて飛石を凸凹に打ち、足からも注意を喚起する信号を送り、目線を足元に落とさせ場面喚起や転換に応用した。そして歩行速度を緩めたり歩幅を少し広くし速度を速める等、300年以上前の作者の意のままに私達は行動させられている。シークエンスを支配する飛石ならではのテクニックを駆使した桂離宮庭園は飛石の庭と言って過言ではない。

のものである。真行草になぞられる御輿寄、外腰掛、笑意軒の敷石も元禄期の絵図には御輿寄と外腰掛の延段は大粒の霰こぼしで今の姿とは異なる。敷石を一括した図の表現だったとしても、切石の真の飛石が霰こぼしとは納得できないし、笑意軒にいたっては描かれてもいない。桂離宮は一日にして成らずの一例かもしれないが、各々の延段は仮に後の改造があったとしても、その空間に相応しく整えられた。

**⑤土橋の景**

園内に橋は石橋、土橋、木橋の3種に大別され、中でも実用性から重宝されている土橋が5本ある。これらは全て高く架けた反橋で、渡るだけでなく舟が潜るための実用性から用いられ、他の庭園より多く見られる。このモチーフは繰り返しになるが中国江南の水郷巡りからとったものと思われる。

**⑥竹垣の景**

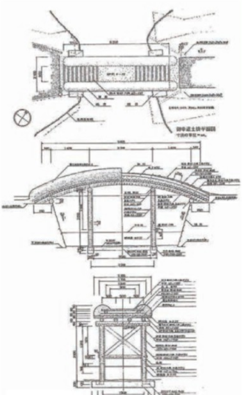
桂離宮の代表的な竹垣は笹垣･穂垣･木賊垣の3種類で昔からあったのは笹垣、他は明治期の桂離宮編入時の整備によって生まれた。3つは草行真と並ぶ構成となるが偶然ではなく、取り合わせを仕組んだ作者がいた筈で、このような人達が桂離宮の美を今に伝えたのだ。

**⑦燈籠の景**

園内にある燈籠は全部で24基あるが、美術鑑賞を目的としたものや、これ見よがしのデザインのものは無く簡素にして実用性に徹している。結果として永遠のモダン燈籠となり、今も石屋の店頭に並ぶ岬型燈籠･水蛍燈籠･三光燈籠･三角燈籠がその代表である。

**⑧手水鉢の景**

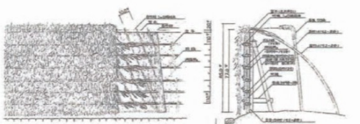
桂離宮の7基の手水鉢には草庵の露地で当たり前の「活込み手水鉢」は無く、一見そう見えても台座に乗っている。また高く据えられた「立手水鉢」は園林堂前と、御輿寄脇の2基見られる。他の蹲踞は前石を高くして蹲う姿勢を強要しており、これは景は真でも使い勝手は利休の精神を尊び、佗使いとした遠州好みを尊んだ結果と言える。



御幸道土橋図



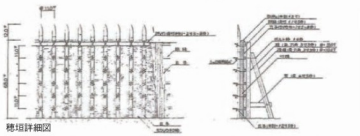
ハチクを生きたまま編んだ「笹垣」の裏側



笹垣詳細図



桂垣と称される穂垣



穂垣詳細図



西湖の三譚印月燈籠



本歌取りした岬型燈籠（水を抜いた状態）



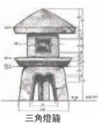
水面を照らす三光燈籠



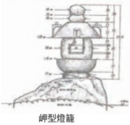
小振りな雪見燈籠



三光燈籠



三角燈籠



岬型燈籠



水蛍燈籠



雪見燈籠



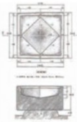
賞花亭前の鉄鉢型手水鉢



坪庭にある方形立手水鉢



外腰掛の二重桝形手水鉢と円形活込燈籠



二重桝型手水鉢

## あとがき

桂離宮庭園の魅力を3回にわたって連載してきたが、あのモダンでスマートな空間が意外に人間味溢れるものだと感じられたのではないだろうか。身近な人に対する想いやもてなし、権力者へのリスペクトなど人に対する様々な眼差しの集大成が庭園というかたちを作り上げたのである。私達はブルーノタウトの桂離宮論からそろそろ脱して、日本人の心や趣向を手掛かりにしてもっと幅広く考えるべきと感じた。これは桂離宮のみならず日本庭園全般にも言える事だ。なぜならば庭園は人間がつくり人間が楽しむものだからである。

次回は江戸時代初期に土木の技術と造園の美が結晶化して出来た岡山後楽園を見てみたい。この当時すでにコラボレーションは深い所で発生しており、岡山藩主補佐役津田永忠という優れた人物の活動を通して見ていきたい。

第8回

# 地域の多様なアクティビティを引き立てる新たな拠点『リバーポートパーク美濃加茂』

取材・文＝小口健蔵
取材協力＝金野拓朗（株式会社オリエンタルコンサルタンツ 関東支店 都市政策・デザイン部）

## 公園におけるアウトドア・アクティビティの可能性について

ここ数年、アウトドア・アクティビティへの人々の関心や希求の高まりを実感しています。東京の新宿中央公園でこのところ毎年3月下旬の週末に野外での遊びがテーマのアウトドア・イベント「TOKYO outside Festival」が開かれているのですが、年々来場者が増えています。会場では各種アクティビティの体験企画やワークショップが用意されるほか、さまざまなアウトドア関連グッズやスポーツ用品などのブースが並びます。

企画運営をしているアウトドア実践家の田中ケン氏に話を聞くとテント出店をする事業者を最初のころは一生懸命営業して集めたのだが、いまでは出店者側から問い合わせを多くいただけるようになってきたと言います。それだけ、アウトドアに関心を持つユーザーが増えてきているのでしょう。今年の出展では、アウトドアビークルや小さな小屋まで展示され注目を集めていました。

またアウトドアといえばBBQが王道と言ってもいいでしょう。BBQ人気はこのところ、ますます高まっていて、東京のお台場では、複数の商業施設の中にBBQが組み込まれていると言います。またお台場の隣の豊洲市場の周辺には週末ともなると多くの人が集まるBBQ場が開設されているのですが、バーベキューアイランドと言ってもいい位に新たなBBQ施設が計画されています。そんなに作って共倒れしないのかと心配になりますが、豊洲市場の新鮮な食材を活用できるとあってインバウンド需要も見込めるのだそうです。広い空のもとで心地よい風に吹かれながら友人や家族と非日常の時間を持つことの価値が多くの人々を魅了し、引き付けるのでしょう。

このように、アウトドアへの関心が高まっているのですが、さて都市公園はこの動きをどう見ているのでしょうか。世の中の関心や動きにビビッドに反応して施策を打ち出せているのかが気になります。

そんなとき、昨年10月に発表されたグッドデザイン賞の中に川遊びやBBQができる公園として「リバーポートパーク美濃加茂」が受賞したというニュースがありました。

早速取材にかけつけました。

場所は、岐阜県南部に位置する美濃加茂市です。「リバーポートパーク美濃加茂」の正式名称は「中之島公園」です。ここが街の課題解決に向けた周到な事業計画やランドスケープや建築設計の工夫、指定管理者制度を活用した公民連携の取り組みによって、いい雰囲気のアウトドア・アクティビティの新しい拠点に生まれ変わりました。

どのように再生させたかを、詳細設計やデザイン、現場監理を担当したオリエンタルコンサルタンツの担当者、金野拓朗さんに話を聞きました。

**【プロジェクト概要】**

| | |
|---|---|
| 事業名称 | 中之島公園整備 |
| 事業主体 | 岐阜県美濃加茂市 |
| 実施期間 | 平成29年9月〜平成30年3月 |
| 用　途 | 体験学習施設及び都市公園 |
| 公園計画 | 株式会社オリエンタルコンサルタンツ（事業計画・基本計画・基本設計・実施設計及び現場デザイン監理） |
| 建築計画（ビジターハウス） | 株式会社オリエンタルコンサルタンツ（基本設計・実施設計・現場監理） |
| プロジェクトマネジメント | 株式会社オリエンタルコンサルタンツ |



**小口健蔵**
公園プロデューサー。小口健蔵オフィス代表。
長野県生まれ。千葉大学造園学科卒業。東京都職員として、街づくりや公園緑地の計画・設計・整備・維持管理・運営管理など30数年間にわたり従事。建設局公園緑地部長を最後に退職。公益財団法人東京動物園協会常務理事、一般財団法人公園財団常務理事・公園管理運営研究所長、World Urban Parks Inc.初代理事を歴任。「思い出ベンチ」の発案者。日比谷公園100年記念事業でプロデューサーを務め、パークマネジメントの重要性を世に知らしめた。「パークマネジメントのヒントー小口健蔵の実践的公園経営論ブログー」で情報発信を続けている。

## 美濃加茂のポテンシャルを引き出すプロジェクト

### ■ 施設がつくられた背景

美濃加茂市が抱える課題は、「まちの活力の源となる若年層の定住」、「中心市街地の再生」、「環境の保全」、「市民みんなが暮らしやすい街の実現」「地域資源の活用」、「地域の自然、歴史や人材を活かしたまちづくり」等です。

エリアには、古くから人々の暮らしや生業に多大な影響を及ぼしてきた木曽川や、江戸時代には文化や産業の交流の場となった中山道太田宿など、多様な自然や歴史資源が点在しています。一方で、市内の観光は木曽川下りの乗船場が廃止になるなど衰退傾向にあるため、対応が求められていました。

そこで、木曽川の周辺地域を中心とした豊かな自然環境や景観、地域に残る歴史資産と駅前の商業地とを結び付け、「かわ」と「まち」が一体となった魅力を遊びと学びを通じて体験できるよう、地域住民の知恵と活力を活かした官民協働による「かわまちづくり計画」に取り組むことになりました。

この計画の中でリバーポートパーク美濃加茂の場所は、交通の要衝である「太田の渡し」があった名所であり、往時には人・物が集まり、賑わいをまちへ広げていった場所でありました。受注者であるオリエンタルコンサルタンツは、こうした来歴や名古屋から約1時間といったアクセス性も踏まえ、「川の湊」として再び整備することで、市域や名古屋からの来訪者を増やし賑わいを創出すると共に、当公園が起点となってまちの回遊性を向上させることを計画策定にあたり提案しました。

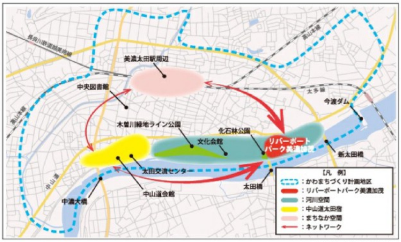
### ■計画方針とゾーニング

リバーポートパーク美濃加茂は、既存の公園のリニューアル事業です。園内外には川辺林、芝生広場、木曽川といった様々なアクティビティが可能な資源が存在し、『地球と遊べる「まち」』美濃加茂を代表するポテンシャルがありました。

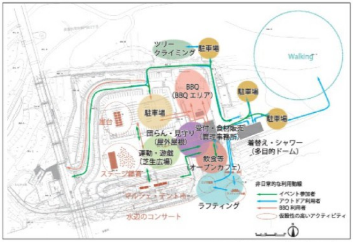
オリエンタルコンサルタンツは、市民もアクティビティの運営や参加に積極的であったため、川遊びやBBQ、プレーパークなどのプログラムを共に考え、それらを繋げるように公園及び建築を設計しました。設計コンセプトは「人と人、人と自然が交わる多世代・多文化交流拠点」です。

設計時には、敷地西側の既存施設は活用しながら、敷地東側の施設を撤去し、新たに体験学習館（ビジターハウス）や手洗い場兼倉庫、膜構造からなる倉庫といった建築と、BBQ広場やエントランス広場、水際の散策路等のランドスケープ施設を整備することを提案しました。整備の際には、敷地東・北側には豊かな既存林が、南側には木曽川が位置しているため、西側の既存芝生広場と合わせて、周辺の豊かな環境を最大限享受できるよう配慮すると共に、指定管理者による利活用・維持管理を想定しながら設計。また、多様なアクティビティが可能な資源が公園内外にあることから、それらの資源を円滑に繋げるような動線・配置計画としています。

具体的には、ビジターハウスを公園の中心に設け、各アクティビティの中心となるようなゾーニングにしています。このことで、外部からはビジターハウスが公園の中心のように視認されると共に、ビジターハウス内からは四方の豊かな資源やアクティビティが視認できるようにし、活発な利活用がなされるよう配慮したのです。



かわまちづくり計画範囲と位置図



イベント時のアクティビティダイアグラム


南方から望むリバーポートパーク美濃加茂


リバーポートパーク美濃加茂の全景


木曽川から望む

## 「かわまちづくり」の核となるビジターハウス

**■ ランドスケープと一体となった建築計画**

公園の中央に配置したビジターハウスは、その形状も周辺に開くよう配慮しています。具体的には、川や公園へのビジターハウス内からの眺望と、公園でのイベントやBBQといったアクティビティ動線を考慮しました。

またビジターハウスは「かわまちづくり」の核となる施設であり、車で来訪する利用者も多いことから、ビジターハウスは地域の新たなランドマークとなることが求められた一方で周辺資源との関係性から、建築高を抑えることが必要であったため、複数の屋根が折り重なったような形状になっています。

ビジターハウスの1階には大きな庇のある屋根が設置されており、この半外部空間は日常的な憩いの場となり、またイベント時のステージともなります。2階は多目的スペースとなっており、大きなガラス窓からは木曽川やフォレストエリアの景観を楽しみながら、学習やイベント活動に活用することができます。

**■ ビジターハウス外構やBBQエリアのデザイン**

ビジターセンター南方には緩やかな傾斜の芝生と弧を描くスロープを設置しました。また、芝生広場と合わせて、外部に開いた建築とすることで、各アクティビティの中心に建築があるようなデザインとなっています。さらに水際のテント下にはウッドデッキを設置し、テント下で小規模なコンサートやヨガといったアクティビティができるようにしました。

BBQエリアは、5m角のウッドデッキを15基配置し、適度な距離感を保ちつつ求心性のある空間としています。設計時から計画が変更となり、じゃぶじゃぶ池が新たな要件として追加になりましたが、工事監理時に配置や素材の協議等をし、全体的にまとまりある空間となるよう調整しました。なお各BBQサイトには指定管理者により膜屋根が設置され、雨天時や夏にも快適にBBQができるようになりました。中央には大きなテントを設置して、多人数でのBBQに対応するようにしています。また既設の井戸を活用し、水路を作ることで、子供のアクティビティを誘発しています。なお手洗い場兼倉庫は中央に面するように設置し、ビジターハウスとのデザイン統一を図りながら、各デッキから使用しやすい位置に配置しています。

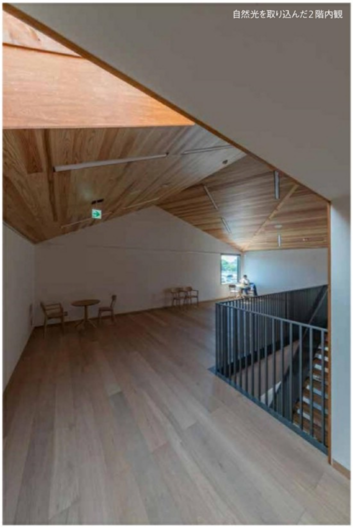

外構の芝生広場と接続する大屋根



バーベキューエリアの子どもが遊べる水路



日常・イベント時の居場所となる半屋外空間



自然光を取り込んだ2階内観



木曽川の風景を感じられるビジターハウス1階のカフェ

## 様々な利活用を想定したシンプルなデザインが継続的な活用を育む

### ■ 整備段階から将来運営者となる指定管理者候補と相談

この事業の特徴は、アウトドア・アクティビティを実際に展開することに長けている事業者を指定管理者として選定し、ビジターハウスやBBQ場の整備などに意見を反映させたことです。指定管理者の代表企業である有限会社EAT & LIVEは、岐阜県の郡上八幡で木曽川でのラフティングなど本格的なアウトドアの体験事業を展開しており、今回の施設は、より街に近いという特性を生かした「まちなかアウトドア」拠点としての可能性があるととらえているようです。

### ■ 各方面から得た評価と今後のまちづくり

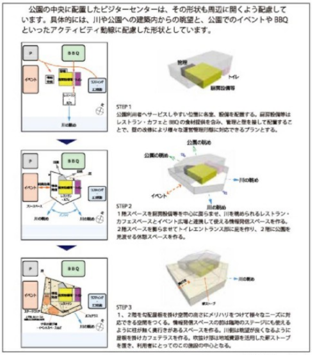
もともと美濃加茂市内では地域住民・団体により様々なイベント・活動を行う文化があり、指定管理者だけでなく地域団体によっても公園内外の豊かな周辺資源を活用した利活用がされています。それは、利活用の受け皿となるように、様々な利活用をデザイン段階から想定し、継続的に不便なく利活用が行われるようゾーニングや施設規模を想定すると共に、建築・ランドスケープは自らが主張する奇をてらったデザインではなく、継続的な利活用に資するシンプルな形状としたことが、少なからず寄与していると思われます。

そのようなデザインが評価され、平成30年10月に、2018年グッドデザイン賞を受賞しました。審査員の評価は以下の通りです。

「川遊びやBBQ、プレーパークなどのプログラムを介して人と人、人と自然、文化が交わるように設計された拠点施設。快適にBBQを行えるよう芝生内に設えられたウッドデッキとランダムな大屋根の連なりや地形に合わせて大らかに描かれた導線が、開放的で集いやすい場づくりに寄与している、奇をてらわない素直なデザインを評価した。」

さらにビジターハウスは、同年11月にウッドデザイン賞・ライフスタイルデザイン部門も受賞しました。ウッドデザイン賞は、木の良さや価値を再発見させる製品や取組について、特に優れたものを消費者目線で評価し、表彰する顕彰制度であり、ビジターハウスの周辺と調和した在り方が評価されたと思います。

かわまちづくり事業はまちと水辺が融合した良好な空間形成を目指す時間の射程の長いものであり、実際にまち側の取り組みとして、近隣に位置する中山道・太田宿において空家を利活用したイベント等が行われる等、少しずつ地域の新陳代謝が始まっています。将来に向けた意思として、本事業が地域のツボとなり、水辺を含めまち全体が変わっていくことを願っています。




建築形状の考え方



平面図

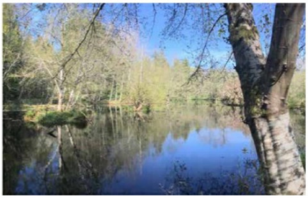
### 取材を終えて

リバーポート美濃加茂のある中之島公園はもともと、岐阜県美濃加茂市から愛知県犬山市にかけて約13キロを遊覧する「日本ライン下り」の乗船場でした。最盛期の1970年代には年間40万人を超える利用客があったのですが、休止前は最盛期の10分の1以下の3万人に落ち込んでいたといいます。2011年に天竜川の川下りで乗客5人が死亡する事故の影響で客離れが進み、ライン下りは休止になりました。それ以来中之島公園はさびれた場所となっていたのですが、新しい時代のアウトドア拠点として生まれ変わりました。週末などには木曽川を10km下るラフティングのコースが人気といいます。公園の目の前の水面は流れも緩やかでSUPを楽しむこともできます。ビジターハウス1階のカフェは、ピアノや薪ストーブが設えられてあったり、本格的ピザをおしゃれな雰囲気の中で楽しめるスタイルになっています。BBQエリアも海外スタイルのBBQを楽しめるとあって若者グループやファミリーに人気です。まだ運営を始めて一年ちょっとですが、集客は当初の見込みを超えていて幸先は良さそうです。

日本に本格的なアウトドア・アクティビティが登場したのは20数年前になりますが、最初に体験した若者世代が今では子どもをもつファミリー世代となって、子どもたちにアウトドアの体験をさせたいと考える時代になったといいます。この需要を上手にとらえて事業を組み立てるのが肝心なのでしょう。

# *Bloedel Reserve*

*Designer : Thomas Church, Richard Haag, etc*
*Location : Bainbridge Island, Washington, United States*



## ブローデル・リザーブ

文・写真／市川 寛（office ma）

アクセスのあまり良くないプロジェクトに行くのは稀にリスクを伴うが、Bloedel Reserve は時間をかけてでも訪れる価値がある。

このプロジェクトは、シアトルのダウンタウンからフェリーで40分程かけてベインブリッジ島に渡り、その後バスで30分程北上し、更に歩いた先の自然豊かな場所に隠れたように存在している。かつて個人の敷地であった広大なこの公園は、自然の中を回遊できるようになっており、開けた場所から林の中へ、林を抜けると池へと繋がり、歩行体験の中で風景が変化していくので飽きることがない。特に、ヒマラヤスギ、モミ、シダなどで構成された二次林は、歩いていて気持ちの良い空間である。

加えて、敷地高台からは、ピュージェット湾を眺めることもできる。風景の変化の中で現れるフローティングデッキやベンチなどの設えは細部までのこだわりが見て取れ、自然と美しく調和しているようである。また、150エーカーの敷地内にはかつての住居であった建物の他に、羊小屋やリフレクションプール、日本庭園なども存在している。

都市の喧騒から逃れ、美しい自然の感触や、地面に落ちる木々の影を眺めながらの散策は、人間と自然の関係を改めて考えさせられる体験となった。







【左頁】ヒマラヤスギ、モミ、シダなどで構成された二次林
【上】高台から望むピュージェット湾の眺望
【下】開けた場所から林へと続く遊歩道



林を抜けると現れる池









風景の連続の中に現れ、敷地のいたるところに設置されているファニチャーやデッキなどは、自然にこの場所と調和している。







敷地内には、石庭や日本式のゲストハウスなどがあり、
親近感を感じられた。また、水が流れている箇所も多くあ
り、歩いていて心地の良い回遊式歩道となっている。




市川 寛 Hiroshi Ichikawa

国際基督教大学卒業、千葉大学大学院園芸学研究科修了。海外MLAプログラムへの短期留学やワークショップを経験。国内外問わず多くのランドスケーププロジェクトを取材。2018年よりoffice maにランドスケープデザイナーとして参加。


前号で10回を数えた市川寛氏による海外のランドスケープレポート。
シリーズ名はそのままに、今号より装いを新たにお伝えします。

【連載】森林美学とランドスケープ
【H・フォン・ザーリッシュの森林美学を読み解く】

# 第2回　森林美学における森づくり ―現代にも通じる樹林造成と管理の技術―

小池孝良（北海道大学）

手入れが行き届き整然とした人工林は、H.フォン・ザーリッシュの提唱した“経済林の”森林美学の理念を満たす。しかし、それは具体的な施業指針ではなかった。その後、C. ワグネルが提示した森林美学の施業指針・空間的規制の考えと実践のための５項目には、130年以上の時を経ても、なお、取り組むべき森林管理の理念と指針が示されている。生産と収穫時の効率を考えた針葉樹一斉林地への風害が1990年代から顕在化し、対策として針葉樹と広葉樹の混交林化がドイツやポーランドで進められた。ただ、狩猟をもにらんだ森づくりは、我々には実感しにくい部分がある。本項では、このような流れの根底にあるザーリッシュが概念的に示した森林美学的管理方法の具体的内容を、事例を挙げながら紹介する。




森林美学
A5 判／並製
本文：331 頁
定価：4,000 円＋税
発行：海青社（2018年6月1日（初版第1刷））

## はじめに

北海道では洞爺丸台風後の風倒跡地を整備して、トドマツやカラマツなどの針葉樹を用いた一斉人工林を造成した。後述するが、その約50年後に襲来した2004年の台風18号によって壊滅的な被害を受けた。そのため、施業の進め方が変わって、針葉樹一斉人工林（同年齢の同じ樹種で造成された林）から、風害跡地の再生には広葉樹類を混交させる造林方法へ向かうことになった。

北海道中央部低山帯の本来の植生は、針葉樹と広葉樹が混交した、舘脇操のいう「凡針広混交林」である。この植生を手本に旧御料林の森林の造成は、自然の模倣を徹底的に行ったため、札幌・定山渓温泉街から中山峠に向かう道路周辺の森林は、一見すると人工林とは思えない風景である。この森林造成の陣頭指揮を執ったのは原田泰で、我が国で、はじめて森林美学の教科書を1918年に出版した新島善直の門下生であった。原田の著書「森林と環境―森林立地論―」に明確な記載はないが、H.フォン・ザーリッシュ（以下、ザーリッシュ）の考えの到達点とされるA．メーラーの「恒続林思想」（森林はいつまでも自然の状態のまま生産を続ける“恒続林”が本来の姿）を実践するための基本、森林生態系と天然下種更新を成功させる科学的根拠が示されている。その内容は、明治期から多くの研究者の留学先であったドイツの森林学者、C. ワグネルのいう空間的規制とその具体的施業指針と、原田による膨大な実験に基づく科学的データの上に示されている。順を追って紹介したい。

## 過去の経験

1970年代の造林学の教科書には、拡大造林や黒化促進（雑木林を改良して生産性が高いとされる針葉樹に国土の森を造り替え、資源増強を目標に掲げたとり組み）が誇らしく紹介されている。東北の「ブナ退治」や釧路のカラマツ植林による「パイロット・フォレスト」などなど（図１）、1950年半ば、スウェーデンの研究者リンキスト博士の来日を機会に、外来種導入、“高性能・高品質”の期待できる雑種創成、生産性の向上を狙った林種転換など、科学技術の発展と高度経済成長を実現した国力を信じて、いわば「自然に立ち向かい、克服できる」と信じた足跡が垣間見られる。しかし、台風に代表される「自然のしっぺ返し」が、その自信を打ち砕いた（写真1,2）。筆者も力を注いでいた試験地が2時間で倒壊し、こみ上げる無力感に、その研究を求めて来た学生さんと一緒に涙し、台風（2004年の18号）の破壊力を思い知った。

知床“原生林”の伐採問題が生じたとき、伐採しようとする当時の林野庁北見営林局と自然保護団体が“対立”した時に、生態系の基礎知識に乏しく、自らは、なんら主張できなかったことが甦る。発達した森のシンボルのシマフクロウが棲むことの出来る森づくりを主張し、チプコ運動（インド：女性リーダーの下で、伐採を阻止するために木に抱きついて森林を守る運動を開始）にまで展開した関西の有志達に、目標は同じであることを伝えられなかった。

当時の林野庁の担当者の1名は、ザーリッシュの言う「技術合理の森林は最高に美しい」に施業指針を求めた。その主張は「①美しい森林づくりを心がければ、経営上の誤りを防ぐことができる、②林業技術者にとって管理する林区が美しいことは職務上の喜びを得られる、③美しい森林は人間の心に豊かさと潤いを与える、④都市近郊の美しい森林は人間に住みよい環境を与える」であった。理念は共感できるが、具体的内容が解りにくい。そこで「自然の声に耳を傾けよ」と、詩人・哲学者であったJ.ゲーテ（自然は常に正しく、誤りがあるとすれば、それは人間の側にある：エッカーマンとの対話から）の影響を受けたワグネルの具体的森林管理の指針を紹介する。

## 空間的規制と秩序づけ

ミュンヘン工科大学造林系の研究者によると、空間的規制とは、本来、天然下種更新を意味する用語である。その内容は、風向を考

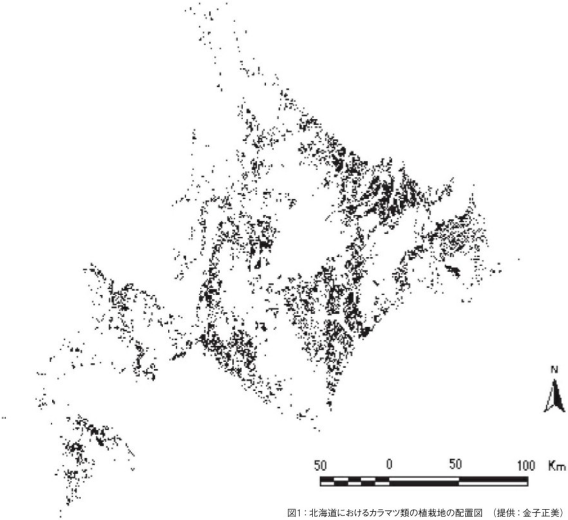



図1：北海道におけるカラマツ類の植栽地の配置図　（提供：金子正美）





写真1,2：ポーランド西部のヨーロッパトウヒ人工林を襲った突風害
上：低空飛行による被害地の概況、茶色くみえる場所が人工林の場所
下：幹折れを生じた人工林内部
（写真提供：ポーランド森林文化協会）

えて伐採・収穫を行い、母樹から供給されるタネが収穫跡に芽生えをつくり、その成長によって森林再生を期待する。日本でも導入が試みられたが（図2）、特に東北や北海道の多雪地帯では、林床を被うササ類による被陰のために天然下種更新による施業法の成功例は極めて少ない。

では、ワグネルの言う空間的規制の内容は何か。彼は、森林を択伐林型と同齢同種の一斉林型の二種に分けた。この二つの林型は

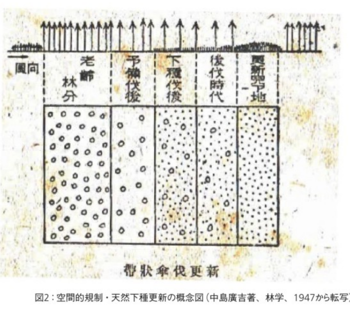



図2：空間的規制・天然下種更新の概念図（中島廣吉著、林学、1947から転写）

対立関係にあり、調和させるためには、より高次の「森林の空間的秩序づけを必要とする」とある。また、2005年に“自然林の美学”を著したミュンヘンのW．シュテルプによると、「“秩序づけ（Ordnung）”は、“整理整頓は人生の半分”というドイツ人の気質からくるものなので、深い理解は難しいよ!」と言う。

しかし、森林文化論を推進された筒井迪夫の解説からは、ワグネルの「秩序づけ」は、以下の内容と理解できる。すなわち、①土地が最適であること、②樹種が混交した森林構成であること、③生育条件が環境に適応していること、④災害からの保護が十分であること、⑤搬出路などの技術組織が整備されていること、の5項目である。ここで、①と③は、ほぼ同義であり、かつて日本でも目標とされた「適地適木」の考えにほかならない。目先の収益のみに焦点をおいた森づくりでは、自然の摂理にそむく面も多く、病虫害、風害、その他の気象害などに弱くなる。

## 秩序づけの具体的内容

①と③に関しては、適地適木をにらんだ環境と資源増産に繋がる事例を紹介する。内閣府～林野庁が1980年頃から約5年間隔で調べてきた「国民の森林への期待」も、京都議定書以来、二酸化炭素の固定・貯留機能（＝成長と蓄積）が、ほぼ10年以上に渡って上位3位以内を占めている。岐阜県の調査例であるが、本州を代表する造林



写真3：亀甲造林地の遠景（北海道南部の絵紙山地域：写真提供＝小野寺賢介）

樹種3種（スギ、ヒノキ、アカマツ）での成長と現存量の比較が、適地適木の結果を雄弁に語る（図3）。昔から「尾根マツ、沢スギ、中ヒノキ」と言うように、樹種による養水分の要求性を反映した植林が行われて来たはずである。しかし、いわゆる適地に植えることが出来なかった場合、スギの例のように成長・貯留能力が極端に落ちる。

②樹種の混交した森づくりは、森林美学の発祥の地、ポステル（現在のポーランド西部）とドイツ中南部、そして北海道でも進められている。これらの地では、台風も含む突風のために針葉樹一斉林型の人工林が壊滅したのであった。ドイツの近自然森林管理を行ってきたゲルトリンゲン男爵の名言「時代が変わると価値観も変わる。将来どの様な樹種が好まれるか、予測は難しいが、様々な樹種構成の森林を持っていれば、その時代に必要な樹種を出荷すればよい」とある。この様な視点によって宮城県鳴子の森では、さまざまな樹種の特徴を活かした工芸品造りも長年行われており、収穫時の手間暇はかかるが、混交林からの希少な材の高度利用の魅力も紹介されている。この誘導方法に関連しては、さらに後述したい。

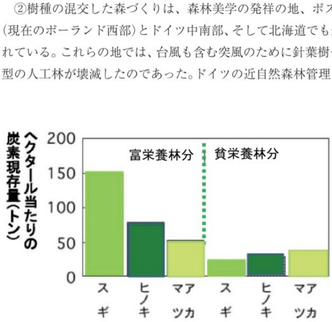



図3：土壌の肥沃程度に注目したスギ、ヒノキ、アカマツの成長（＝炭素貯留機能）岐阜県の事例

④災害からの保護機能を考える時、台風に対する備えが最も気になる点であろう。琉球大学の中須賀らによって現代語訳されたが、17世紀、琉球王朝で「林政八書」という森林管理の指針を著した蔡温の「山気論」がその原典とも考えられる。当時、国としての独立性を保つために、森林資源管理は不可欠であった。その要点は、主風に向かって開口部をつくらないことである。同様の考え方は九州大学北海道演習林にも見られ、造林学の佐藤敬二、森林管理学の今田盛夫らが展開した「細胞式舌状造林法」が、その実践例といえよう。また、北海道南部では虫害発生を抑えることも加味した「亀甲造林」が行われ、広葉樹の林帯にある枯死木に営巣する鳥類によるパトロールが害虫の大発生を抑制しているという（写真3）。

⑤搬出路などの技術組織の整備は、生産機能の効率化という視点で、最も注視されている。かつて森林美学実践の場であったザーリッシュの森は記念公園になっている。今でも路網の整備などの痕

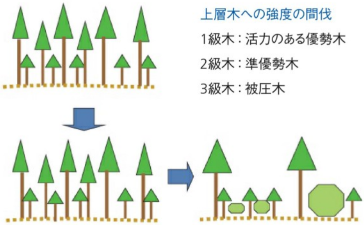



図4：ザーリッシュの提唱したポステル間伐の概念図



写真4：林道開設後、家畜舎の敷ワラを播いたところへ現れたイノシシの親子（写真提供＝W. シュテルプ）

跡が至る所に見られる。特に、木馬道跡には、滑らかな石を敷き詰めた道があって、伐採された巨木の運搬に配慮が行き届いていたことがわかる。また、直線好きのドイツ人は曲がった道を好まないそうであるが、ザーリッシュは、野生動物の保全のために林道の曲線の役割も説いており、現在でもその考えは生きている。

## 生物保全の視点

ザーリッシュの山造りの特徴として、彼の活躍の舞台になった地名（現在のポーランドのポステル）に因んだ上層間伐法がある。特徴は林分の構成木を3段階に分け、上層を占める1級木と、中層の2級木を伐採し、下層の3級木に光が当たるようにする（図4）。下層には野生動物の餌になる草木の発達を促すことが示されている。林分構造を大きく変えるには上層間伐が有効であるが、残す木の成長だけではなく野生動物の保全を意図している点は注目に値する。また、林道開設後、“むき出しの路面や法面は景観維持の視点からも望ましくないので、家畜舎の敷わらのクズを播くとよい”とある。牧草のタネから芽生えた若草がむき出しになった路肩や路面を速やかに被ってくれる。そして、“ベーコンなど食事の恵み”（＝イノシシ）がやってくる（写真4）。また、林道にも曲線部を設け、野生動物に馬車や自動車の恐怖を与えないようにすることも提唱されている。生活に占める狩猟の役割の大きな欧州の人たちと我々は異なるが、狩猟税を用いて森林管理に資するドイツ南部のバイエルン州の様子を聞くと、学ぶ点も多いと感じる。

## おわりに

ザーリッシュは、「美しい森林は最も利用価値の高い森林でもある」と主張した。単純一斉林には単純の美、混交林には変化の美、規則正しく植林された森林には展望の美、林内に適切な作業道や歩道を開くことには合目的な美、とある。2005年に自然林の美学を著したシュテルプの描いたカレンダーの題材には、林道脇に並べられた収穫後の丸太の山が、風景画に溶け込んでいる。作業道の開設によって木材を集積する土場を減らして収穫場所から製材工場へ運ぶことができるため、造材コストも下げることができる。もちろん、作業道の維持には相応の予算が必要になる。これらを先取りした天竜林業では、いわばトレイサビリティーを可能にして地産地消が根付いているという。木材自給率を高める目標を掲げ、高性能重機を導入するなど、数々の取り組みがなされているが、130年以上前に提唱された「森林美学の目指した方向は、むしろ今の指針である」と、ドイツ語の“経済林の美学2版”を英訳したW. クック教授をして言わしめた。これは生態系の保全の注視した今を先取りした方向とも考えられる。

参考文献
原田泰 (1954) 改訂・森林と環境―森林立地論―,北海道造林振興協会
梶光一・伊豆田宏正・鈴木正嗣 (2013) 野生動物管理のための狩猟学、朝倉書店
小池孝良 (2010a) 森林美学における空間的規制－森林施業の秩序付けー、北方林業 62: 180-183.
小池孝良 (2010b) 森林美学における混交林化－環境変化の影響と対策ー、北方林業 62: 238-241.
小池孝良・清水裕子ら監訳 (2018) H・フォン・ザーリッシュ森林美学、海青社
清和研二(2012) 多種共存の森、築地書館
清水裕子(2006) 人工林の風致施業のための林相変換の研究-ヒノキ人工林を対象として-、信州大学農学部AFS紀要4:1-46.
田嶋謙三・神田リエ (2008)　森と人間、朝日選書
高橋満彦ら (2009) ドイツ・バイエルン州における狩猟と森林管理. 北方林業61: 125-128
筒井迪夫 (1995) 森林文化への道、朝日選書529
筒井迪夫 (2009) 森林文化学研究-山と木と人の融合-、林業経済研究所刊
山下肇 訳 (1968) エッカーマン・ゲーテとの対話、岩波書店



**小池孝良（こいけ たかよし）**
1981年に林業試験場（現森林総合研究所）に職を得て、変動環境での広葉樹2次林の有効利用の研究に従事した。その後、東京農工大学では樹木生態生理学を、北海道大学演習林（北方生物圏フィールド科学センター）にて森林保護学、農学研究院にて造林学と森林美学を講じてきた。どの様な時代になっても我々には守るべき国土と森林があることを基本にしている。

2

今回から岩崎弥太郎と対極の思想、行動から日本の近代産業の産みの親といわれ江戸、明治、大正、昭和の風景を見てきた渋沢栄一をキーマンとして、江戸・東京の街、緑の創出物語を紐解きたい。明治の黎明期を駆け抜けた二人の共通点は「漢詩」を詠むこと、その号（名）が体を良く表している。岩崎弥太郎：東山は山に登るごとく求心的に会社や庭園を求め、渋沢栄一：青淵は水のごとく遠心的に社会資本の整備へと向かった。

## 「東京都の恩人」とは?

2019年4月1日、新しい年号「令和」が発表されてまもなく政府は、2024年に発行予定の新しい1万円札の肖像は渋沢栄一と発表した。このタイミングで、今回から日本の資本主義の父と称され、ビジネスの羅針盤「論語と算盤」を唱えた渋沢栄一をキーマンにして江戸・東京の街、緑の東京を紐解くことになるが、渋沢栄一については、すでに本誌95号で「尊皇攘夷から田園都市構想」というタイトルでその生い立ちと生涯の概要を紐解いた。また好敵手の岩崎弥太郎との出会いと戦いを本誌99号から102号で描いているので参照願いたい。渋沢栄一は慶応3年 徳川慶喜の弟の徳川昭武に付き添いパリ万博へ、国内政変を聞き急遽明治2年欧州から帰国後、静岡に蟄居していた徳川慶喜のもとで働く、その後、混乱期の新政府の役人となるが、明治6年、井上馨と在野に下る。渋沢の活躍はここからである。その活動の詳細を紐解くことにしよう。

先ず、その手がかりとして今私の手元に『東京都の恩人・松平定信公』という財団法人楽翁公遺徳顕彰会が発行した小冊子のコピーがある。このタイトルからすると江戸の三代改革の一つ、第十一代徳川家斉の時代、寛政の改革で知られる松平定信（楽翁）が東京都の恩人であるという冊子である。




図1：『東京都の恩人・松平定信公』
冊子の表紙（国会図書館所蔵）

## 恩人＝新たなお財布?

ではその恩人の意味を読み込んでみると「長禄元年大田道灌公が江戸の地を選び城を構え（中略）五百年、首都東京は今や世界第三の人口を擁する大都会にまで発展し（中略）百年後の今日もなお私達に強い感銘を与えられずにおかないものは徳川幕府の名宰相、楽翁松平定信公の治績であります」と、この治績、すなわち成し遂げた業績が恩人の所以であるようだ。続けて「公の奨励された倹約貯蓄の方法として実施され大成功を収め後世東京都民が深い恩恵を受けるようになったものはいわゆる七分積金の制度であります」と結んでいる。つまり、楽翁こと松平定信が創設した「七分積金」が明治政府（東京）の新たな財布となり東京の街づくりに大貢献したということである。

後でふれるが、実はこの小冊子は渋沢栄一が企画したものであった。

## 渋沢栄一と楽翁の出会い



松平定信



渋沢栄一

それでは渋沢栄一はこの七分積金（楽翁）と何時どのように出会ったのか、以下『渋沢栄一伝記資料:49』より渋沢栄一（以下渋沢と称す）と楽翁の出会いを詳しく見ていこう。

渋沢は楽翁公百年祭の式典の挨拶で「私が公を知ったのは、明治七年東京府共有金の取締まりを、時の府知事大久保一翁氏から申し付けられてからでありまして、（中略）私としましてはこの金を如何に処理したらよいかと考えねばならぬ地位に立つことになりましたが、然らばこの金は何処から出たかと調べて見ると、これは楽翁の経営せられた、例の七分金と称する江戸市中の積立金でありました。（中略）即ちこの資金は貸し金、又は土地を買い入れ更に穀類をも買い持ちして、資金の維持と増殖を図った、これが七分金と名づけられたもので明治維新後総額百五・六十万円が東京府に引継がれて共有金となっていました。私はこのような楽翁公の余徳を知り、公がただの政治家でなく、経済的にも社会的にも充分手腕のある方であると覚つたのであります」と、楽翁（七分積金）との出会いを語り、当時渋沢が養育院の事業を担当し始め、その養育院の経営上の費用を新たな財布（共有金）から支出していたことを回想している。

## 楽翁からの引継ぎ・養育院とは?

この養育院とはどのようなものであるのか、渋沢の回顧録『青淵回顧録（上巻）』の東京市養育院の沿革によれば、「東京市の養育院は現在においては、日本屈指の一大慈善事業として知られる。（中略）この養育院の濫觴は遠く徳川幕府時代にその源を発している。即ち寛政時代の老中松平定信によって設けられた寄場と深川鶴歩町に設けられた救護所と、名奉行大岡越前守の在職中に創設された小石川御楽園の養生所とがそれである」と養育院の設立背景に触れている。ところが、維新の混乱はこの慈善救済の制度、機関も破滅してしまう。渋沢は市中の職が無い、食う糧が無い窮民が激増したため、七分金を保有する町会所に救済の役割を当てた。上野の護国院の建物を購入修繕して東京府養育院と命名、経営は営繕会議所が当たった。まさに楽翁の事業を渋沢が引き継いだといえよう。

## 渋沢のつのる楽翁敬慕の念

続けて伝記で渋沢は「現在の東京市養育院は楽翁公あつたればこそ今日の壮大なる規模を有するに至つたのでありますから、公の命日たる五月の十三日には毎年必ず楽翁公祭を養育院で開いています」と敬慕の念を抱いてきたこと、更にこの共有金が「商科大学（現一橋大学）前進たる商法講習所とか、瓦斯会社、東京府市庁舎、その他道路、橋梁、墓地等諸施設公共事業に用いられたのであります」と挨拶を結んでいる。

## 財団法人楽翁公遺徳顕彰会の設立

楽翁が文政12年5月13日に亡くなり百年目の昭和4年、渋沢は楽翁公百年忌墓前祭を催すことを関係者に開催通知を送付し，楽翁公百年祭が昭和4年6月14日深川の霊巌寺で開催された。渋沢が明治7年（1874）に楽翁と出会ってからおよそ 55 年の歳月が流れた。

## 楽翁公遺徳顕彰会、伝記、小冊子

渋沢の楽翁公を敬慕する念は次々と広がり、先ずは、楽翁公遺徳顕彰会が百年祭を機に組織され、総裁に徳川家達、会長が渋沢栄一、理事に井下清等が座った。

また『楽翁公伝』（図2）を編纂し始め、さらに都民向けの『東京都の恩人・松平定信公』（図 1）という小冊子も渋沢の企画で発行されてきた。

昭和6年渋沢が永眠した後、東京市が毎年6月14日に慰霊祭を行ってきた。現在は（公財）東京都慰霊協会がその役割を担っている。

## 新聞に見る楽翁敬慕の動き

敬慕する楽翁の百回忌を機に渋沢は、これまでの思いを後世に残すため、様々なことを急ぎまとめ始めた。

この間の動きが読売新聞（昭和 4 年 5 月 28 日）で詳しく報じられて前後関係が良くわかるので以下詳しく見てみよう。

**“十四日盛大に楽翁公の墓前祭 - 二万六千円で立派に新装、渋沢子が遺徳顕彰会組織”** という見出しで始まり、「深川霊巌寺の白河楽翁公の墓は震災に荒廃したままであったが今年文部省から史蹟に指定されたのを機会に、多年楽翁公に私淑していた渋沢栄一子始め三上参次博士、星野氏、福島氏、井ノ下東京市公園課長、矢吹文部省史蹟調査会嘱託等が発起人となり二万六千五百円の寄付金を得て、立派な墓に修繕し（中略）6月14日盛大な墓前祭を行うとともに、渋沢子は楽翁公遺徳顕彰会を組織し、当日は記念講演会、遺物展覧会、更に三上博士に依頼して公の伝記と全集を編纂する〈中略〉渋沢子は楽翁公のに関する小冊子を配布して公の奉公の至誠を説いている」と報じている。



徳川家達



井下清

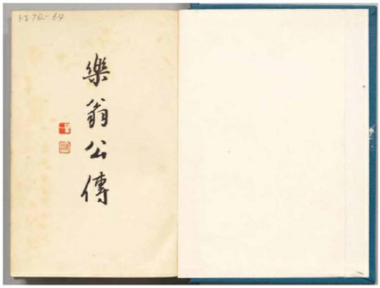



図2：『楽翁公伝』
（国会図書館所蔵）




写真1：深川霊巌寺門前、左側には楽翁公の史蹟の碑が立つ



写真2：毎年、楽翁公慰霊祭が行われる深川霊巌寺にある松平定信の墓（史蹟）
陸奥国白河藩が桑名に転封、桑名藩主松平家の代々の墓が合葬されている。

## 明暦の大火後の深川寺町の形成と霊巌寺

さて、毎年、楽翁慰霊祭の行われる霊巌寺（写真 1,2）は何処にあるのか、見てみよう。明暦の大火後（1657）江戸の都市改造の一つとして深川の開発が始まり、小名木川の南側が埋立てられ寺町が形成された（朱色）。霊岸島にあった霊巌寺も白河藩松平家の菩提寺で、この時焼失し、深川に万治元年（1658）移転した（赤い丸）。この図3は明治2年、江戸の切絵図を下図として版籍奉還後の状況を表示。現在、霊巌寺の西側に清澄庭園がある。この場所は、幕末老中を勤めた久世家の屋敷であった。明治元年、徳川宗家を継いだ徳川家達（徳川新三位中将）の屋敷となる、その後四條家、岩崎家へ。




図3：明治 2 年東京大絵図より

## 渋沢栄一：深川との深い結びつき

霊巌寺や多くの寺、堀がある深川は渋沢と深い結びつきがある。渋沢が深川の地を選んだ理由を推測すると、①敬慕する楽翁の墓があり②今後のビジネス展開を図る資源（水運、倉庫）が存在したこと。この立地の良さから好敵手の岩崎弥太郎も為替店、倉庫を隣接の小松町に設け、その近くの清澄にビジネス・交流の庭、深川親睦園を築庭した。渋沢は明治6年、官を下野してから、湯島、神田、兜町と移り住む。明治8年第一国立銀行頭取となり、明治9年に、第一国立銀行を設計した現清水建設に設計施工を依頼して深川福住町に和風の自邸（図4、写真3）を新築する。明治15年、この自邸に「渋沢倉庫」という会社を設立している。

明治34年、敬慕するもう一人の「徳川慶喜公伝」の編纂をこの自邸で始めている。そこで渋沢と住まいの関係を見ると、ほぼ共通するのが自分の好みではなくビジネス視点で居住地を選んでいることである。福住町自邸しかり、東京株取引所、商工会議所に近い兜町の洋風建築の自邸も辰野金吾の設計で明治21年から住まいと事務所として使用。そして最後が飛鳥山の本邸で、明治10年に現王子製紙会社の設立にかかわり、その近くの飛鳥山に来客用の施設として別邸を建設した。明治12年にはアメリカ前大統領グラント将軍をこの自邸に招待している。明治34年に増改築して本邸として使用してきた。

さて深川との結びつきは明治9年、福住町へ居住した37歳から、明治16年浅野総一郎が深川親睦園に隣接した官営のセメント会社を買い取る時に協力し、明治22年には深川区議となり、明治37年区議を辞職するまでの15年間を深川に大きく係わっている。自宅が飛鳥山に移転した後も、浅野セメント工場がいわゆる公害問題で窮地に陥った際，監査役となり、会社代表として協議会に出席するなど、深川住民と協議を進め解決を見る大正6年の78歳まで関係している。このように渋沢が深川に係わったのは通算して41年、ほぼ人生の活動期全てである。



写真3：福住町の渋沢邸
（渋沢栄一伝記資料:29）



図4：福住町の
本邸平面図、明治30年頃
（渋沢栄一伝記資料:29）

## 霊巌町がなくなる!!

昭和5年8月、渋沢に一大事が起こった。それは深川地区にも関東大震災の復興による区画整理が行われることとなり、楽翁の眠る霊巌町が廃止となるとのことであった（図5）。

報知新聞（昭和5年8月10日）によると

**"霊巌町廃止に渋沢子等が反対**

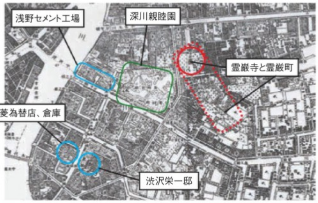
**けふ代表市役所訪問"** という見出しで「渋沢子爵を会長とする松平楽翁遺徳顕彰会は、霊巌という町名は江戸時代から由緒深いものでありかつ、霊巌寺には東京市の恩人楽翁公が葬ってあるのだから是非存置するよう希望し」と報じている。しかし、この陳情はかなわなかったが、渋沢の思い入れが伝ってくる出来事である。ただこの町名の変更の中で「白河」という新たな町名が誕生している。何故であろうか?

## 深川の新しい地名：清澄白河とは

渋沢は、その翌年も昭和6年6月13日に楽翁公墓前祭を霊巌寺で執り行ない、記念講演会は霊巌寺に近い好敵手であった岩崎弥太郎が構想し概成させ岩崎家3代で築庭し、震災で当初の半分の庭園となった清澄庭園大正記念館で開催している。

さて、先ほどの町名に戻るが、2000年の大江戸線の開通で清澄白河駅が誕生し、現在はこの「清澄白河」が地域的な呼称となっている。この清澄という地名は古く、この一帯を開拓した清澄弥兵衛から来ていると伝わる。ここからは推測であるが、昭和7年の町名変更の際、渋沢の陳情を受けた町名変更の市委員会は廃止と誕生をうまく交わしている。つまり霊巌町（図5に見るようにこの町は斜めの寺町割りで）は廃止としたが、「白河」（清洲橋通りに並行）という新たな町名を誕生させている。

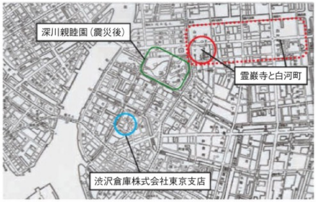
それでは、この「白河」という地名はどこから生まれたのか?それは渋沢の敬慕する楽翁が、当時の老中田沼意次においやられ陸奥国白河藩主松平定那の養子となり、その後、田沼が失脚し、幕府の老中となった白河藩主松平定信の墓があることから昭和7年、霊巌町を廃止し、その代わりとして楽翁ゆかりの「白河」という地名を町名とした。現在、霊巌寺は白河町1丁目にある。（図6を参照）深川の区政と街に深く関係してきた渋沢への心憎い配慮である。




## ビジネス拠点としての深川

水運と倉庫などに恵まれた明治のビジネス拠点として、三菱（為替店、倉庫、交流の庭園)、渋沢（自邸、倉庫)、浅野（セメント工場）などの創業者がここ深川に集っている。

上／図5：区画整理前（明治42年）の町名、各種会社
下／図6：区画整理後（昭和20年）の深川の町名と会社
（上下とも国土地理院地図より）




## 七分積金で設けられた谷中霊園に眠る：徳川慶喜と渋沢栄一

この楽翁公百年祭の2年後の昭和 6年11月11日「日本の資本主義の父」渋沢栄一は92歳の生涯を閉じ15日青山斎場で告別式が執り行われた。養育院の事業で七分積金と出会い、その後この七分積金（共有金）の運営をマネージメントしてきたのが渋沢であった。東京の墓地（染井、谷中、青山等）はこの七分積金で設けられたものである。谷中霊園（図7）には渋沢が楽翁同様に敬慕する徳川慶喜墓所（写真4）があり、その隣接した墓所（写真5）で眠りに就いた。



写真4：徳川慶喜墓（大正2年没）



写真5：渋沢栄一墓（昭和6年没）



徳川慶喜

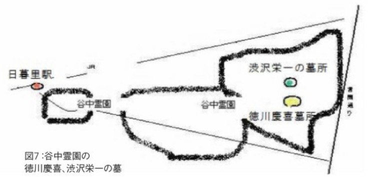



図7：谷中霊園の
徳川慶喜、渋沢栄一の墓

次回は、楽翁・松平定信が寛政の改革の目玉として打ち上げ、東京のインフラ整備に大貢献した「七分積金」を紐解く。

# 室内緑化によるエコロジー環境づくりとその効能④

## ハイドロカルチャーによる植栽デザインと管理システム

文・画像提供／大林修一（株式会社プラネット 代表取締役）

ハイドロカルチャー植物は、一般土壌ではなく粘土を1200℃で発泡された粒状の煉石を使って植えられている。植栽の場合、この無機質の植込み培地を全体に敷き詰めることによって底面に養液を溜めた管理が可能になり、また肥料濃度調整や潅水、光（照明）、水温、空気浄化システムなどもコンピュータを使ったコントロールが可能になる。室内環境で植物の根をいかに元気に保つかが、空気浄化能力や自然の加湿効果、耐陰性を高め、病虫害にも強くなる。そういう観点からもハイドロカルチャー緑化は優れた緑化システムであると言えるだろう。植物による環境改善、健康増進などの効用に関して国内外の研究機関からエビデンスが集まってきており、今後ますます室内への植物の導入が進むと予測される。

より安価で良い状況を保つには、栽培システムと容易なメンテナンスを行える体制が必要になってくる。その点も兼ね備えたシステムの開発が要望されることになるであろう。




植栽箇所説明（断面図）

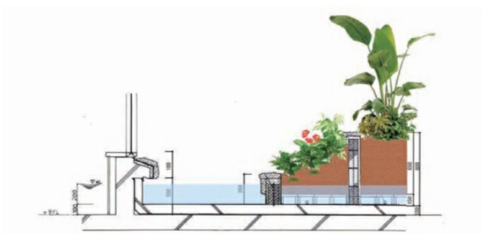
## 神戸オーガスタプラザ空中庭園植栽計画

この事例は1992年10月にオープンした商業施設の9階から12階までの吹き抜け空間に「人と自然、緑の共生」をコンセプトに掲げ、独立した温室空間として設計されたハイドロカルチャー植栽事例である。

現在は用途変更でなくなっているものの、27年前ではあるがメンテナンスに関する多くの部位を、各種センサーをコンピュータコントロールおよびデータ管理することにより、植栽環境の自動コントロール・メンテナンス（特に人件費）費用を大幅に低減することを可能にした。

植栽のポイントとしては、9階部分は谷底のような空間のため、通路全体を森の小川に架かる橋のイメージとした。落差8mの滝を中心に、流れや池を取り入れた空間で、全体に"動"をテーマとしている。10階のエスカレーター屋根部およびプランターは、全体のつながりをもたせるために植栽を考慮した。対照的に11階プールサイドの植栽は"静"をテーマとしており、砂浜に続く森をイメージした。樹木越しの花物のプランターを鑑賞できる明るい空間とし、11階・12階のサロン側からは谷を越えた大地にある湖（プール）から滝が落ちるシーンをイメージするデザインとしている。照明はメタルハライド灯を使い、健康的なイメージ、夜間はタングステン灯を多用し、アッパーライトや水中照明でドラマチックな雰囲気を醸し出している。

これらの植栽は底面養液循環をしており、潅水管理を自動化を行っている。コンピュータで管理した機能は、肥料濃度調整、滝の水循環や昼夜の照明時間調整、換気扇や窓の開閉による気温管理、植栽底面水温調整のための温水管理などである。植栽管理スペースとして10ヶ所の植栽槽を管理した。また異常状況の連絡を含め、これらの計測状況は埼玉県三郷市の事務所で電話回線を使い管理確認できるようにした。このようなパソコンを使った植栽管理システムは現在のITの進んだ時代だからこそ、更に優れた管理が容易にできるはずである。



9階植栽槽システム





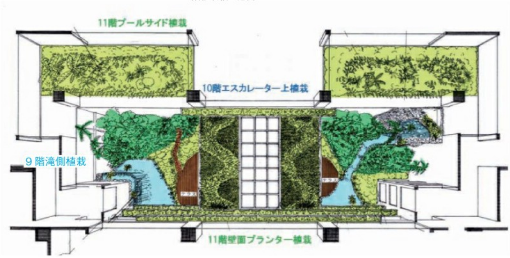
上左／エスカレータ上植栽　薄層、軽量
上右／ガラスの屋根は室温を換気扇、天窓で調整
下左／プールサイド外側　吹き抜け植栽
下右／壁面からの補光、演出照明






9階植栽槽・池側


9階植栽槽・滝側



神戸オーガスタプラザ
植栽箇所　平面図


10階植栽と壁面植栽


9階レストランから見る高木・池植栽


9階植栽槽
説明イラスト



プールサイドの砂浜植栽



9階植栽槽



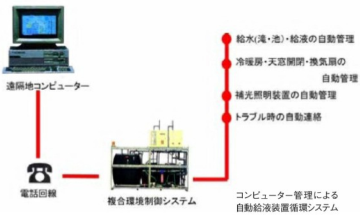
9階植栽槽



プールサイド植栽

9階植栽槽　ー滝ー






コンピューター管理による
自動給液装置循環システム

# 名古屋マナハウスのレストラン内植栽計画

この事例は、2000年11月にオープンしたレストランのハイドロカルチャー植栽事例である。

レストランオーナーからはハワイのジャングルをイメージにしてほしいということや、清潔であること、害虫が出ないこと、カビが発生しないことなどの要望があり、施工した。

この植栽システムの特徴は、ハイドロカルチャーシステムを使い、滝の流れを利用して2階層全体の底面の養液の循環を一体化した点である。したがって潅水は自動一括管理になっている。また、照明と上部散水を生かして、定期的に照明が暗くなり、雷の音が鳴り雨が降るという演出を行った点も特徴である。従来の土壌植栽であれば根腐れをしてしまうが、ハイドロカルチャーは団粒構造で空気層がしっかりとあるため、何度散水(雨)されても問題ない。このような演出はハイドロカルチャー植栽だからこそ可能になる。

シックビル症候群で問題になっている建築関連資材から発生する揮発性化学物質などは植物により除去されるが、根が吸収分解することが明らかになっている。したがって、室内空気をハイドロ植物の底面のパイプから吸気することによって、根に汚染空気を持っていき、そこで浄化させ、吸気口からフィルター層を通じて新鮮な空気を排出する空気浄化システムも導入した。また、自然界の植物の根に生息する菌根菌を根に感染させることによって、根は更に活性化し、空気浄化能や耐陰性、自然の加湿効果が高まり、病虫害に強い植物になる。この菌根菌を使った点も特徴と言えるだろう。



滝のある植栽（養液循環）



梁上への植栽（養液循環）



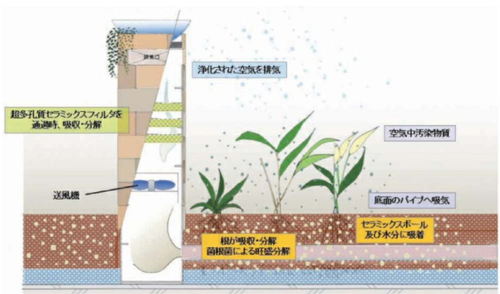
梁上への植栽（養液循環）



6階竣工写真
（エスカレータ降り場）

6階竣工写真（レストラン）

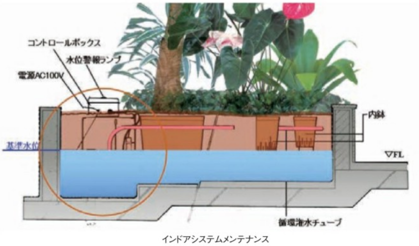




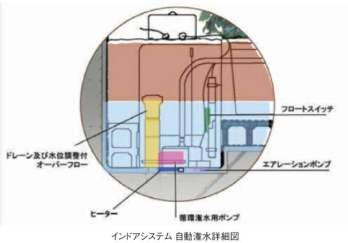

植物を使った空気浄化システム



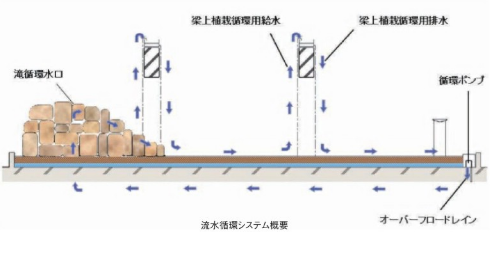
6階竣工写真（レストラン）




インドアシステムメンテナンス




インドアシステム 自動灌水詳細図




流水循環システム概要

# 日比谷ランドスケープデザイン展 2019

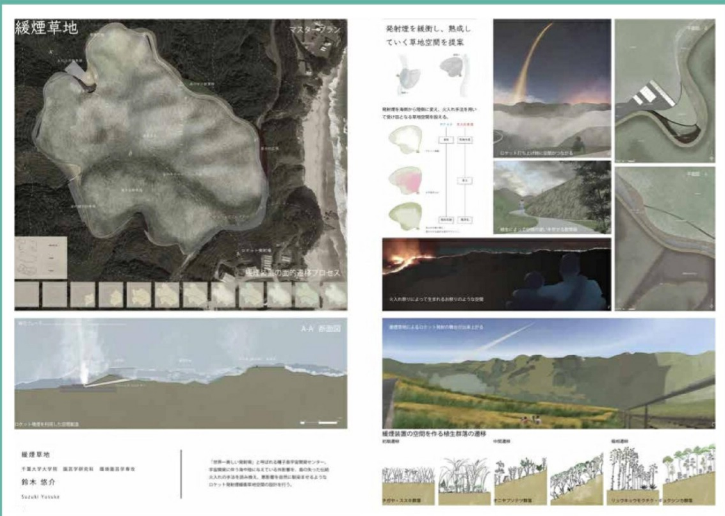
取材・構成＝編集部
協力＝「日比谷ランドスケープデザイン展」実行委員会

2019年3月5日～23日、日比谷公園内、東京都緑と水の市民カレッジにて『日比谷ランドスケープデザイン展 2019』が開催されました。今年度で7回目の開催となる本展覧会は、卒業制作・修了制作を中心に会期を前半・後半に分けて開催しました。本年度は全期間を通じて3,038名（1日平均203名）と、今年も最多入場者を更新する方々にご来場いただきました。ありがとうございました。

本号では、関東の大学のランドスケープ系卒業・修了制作作品が一堂に会した前期展覧会の出展作品と受賞者コメント、先生方の講評を掲載します。今年度も京都ランドスケープデザイン展より1作品、特別出展いただき、3月9日の講評会には滋賀県立大学の村上修一先生にお来しいただきました。講評会特別ゲストには、スタジオゲンクマガイの熊谷玄さんをお招きしました。両先生にご寄稿いただいた講評も掲載しています。

また会期後半の3月21日には、現場で働くRLAの先輩方に多数参加いただき、「学生とランドスケープアーキテクトによるデザイン講評会」を開催しました。本年度はRLAの中堅専門家と本展覧会OBOGの若手がペアになり、展示会場内を巡回して講評するスタイルで、前期展とは異なる角度から、専門的で熱い議論がなされました。RLAのみなさまのレポートもご覧ください。

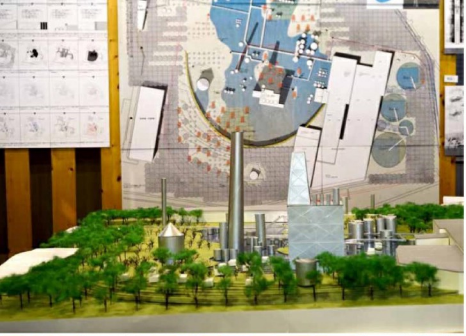
**（文責＝篠沢健太）**




**最優秀賞** **熊谷賞** 緩煙草地

**千葉大学大学院園芸学研究科環境園芸学専攻　鈴木 悠介**

修士の作品を通して、そこに来た人に「気づき」が生まれる空間を設計できるかに注力してまいりました。その土地の環境に抗って人の場を作るのではなく、環境を顕在化させ芸術へと昇華できるものとはどんな空間かを考え、そこからどんな風景が見えるかを考える景観的根拠と科学的根拠から図面における線と面を導き出していきました。講評を頂いた時、まさに現象を見える化することは人の意欲を喚起させるのだと感じ、ランドスケープデザインとは「気づき」に深く関連しているのではないかと考えました。これからは「気づき」を多く含んだ、人を魅了する空間を追求していこうと思います。今回の設計では建築、広告、内外通じて多くの人のご指導によって作っていきました。ありがとうございました。


















集合写真。表彰状を持つのは今回受賞者のみなさん

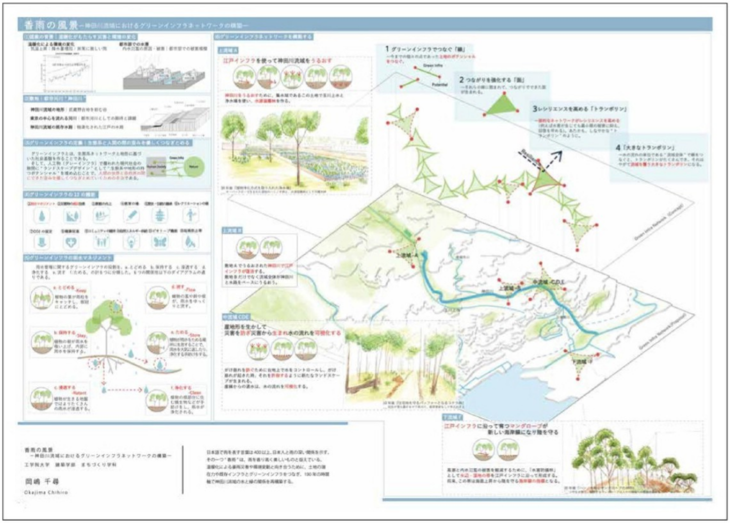


講評会の様子









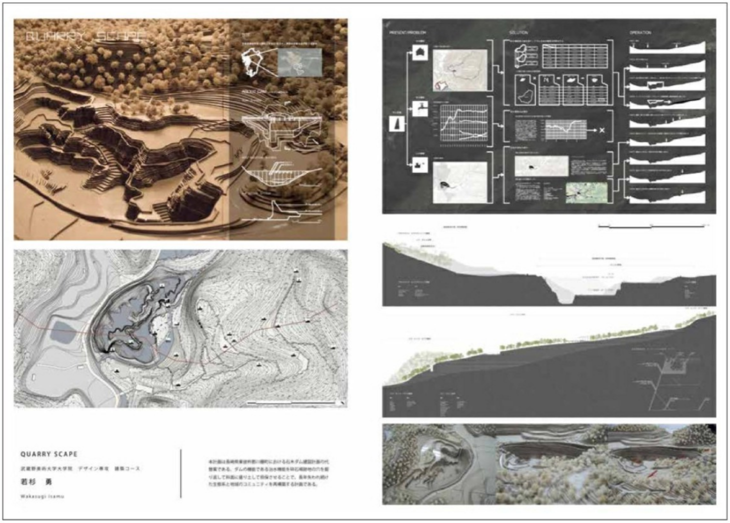

**優秀賞**「香雨の風景―
神田川流域におけるグリーンインフラネットワークの構築―」
**工学院大学 建築学部 まちづくり学科　岡嶋千尋**

香雨とは、雨を敬い、美しいものとして捉える古語です。近年のゲリラ豪雨や土砂災害により、雨と人との関係が変わりつつある今、本作品では、水と緑と人との関係を築き直すために、神田川流域でグリーンインフラネットワークを構築することを提案しました。制作を通して、都市計画や地学、気候変動、防災など分野を横断し、リサーチしたり、考察しながらランドスケープを考える手法の基礎を学びました。

応援してくださった皆さん、講評をくださった先生方、諸先輩方、そして、１年半エスキスをしてくださった先生に感謝の気持ちでいっぱいです。まだ知らないことはたくさんありますが、これからも精一杯ランドスケープデザインと向き合っていきます。



左上／三谷先生
中上／吉村先生
右上／長谷川先生
左下／篠沢先生
中下／福岡先生
右下／高橋先生




**優秀賞** QUARRY SCAPE

**武蔵野美術大学院デザイン専攻建築コース 若杉　勇**

この度は優秀賞をいただきありがとうございます。
今回の設計は長崎県東彼杵郡川棚町川原地区に構想されている石木ダム建設計画の代替案でした。かなり土木的な設計だったため、デザイン的にどのような風景、場所にしようか悩みました。結果的には現在埋められてしまっている採石場を［掘る］という操作で、高低差 100m の巨大な風景を出現させ、ダムの機能の代替と生態系の回復、様々なアクティビティを生み出す仕組みを提案しました。
講評会では様々な実務者の方々とお話しさせていただき、大変実りのある時間となりました。関係者の皆様本当にありがとうございました。



**村上修一「ランドスケープデザイナー」**

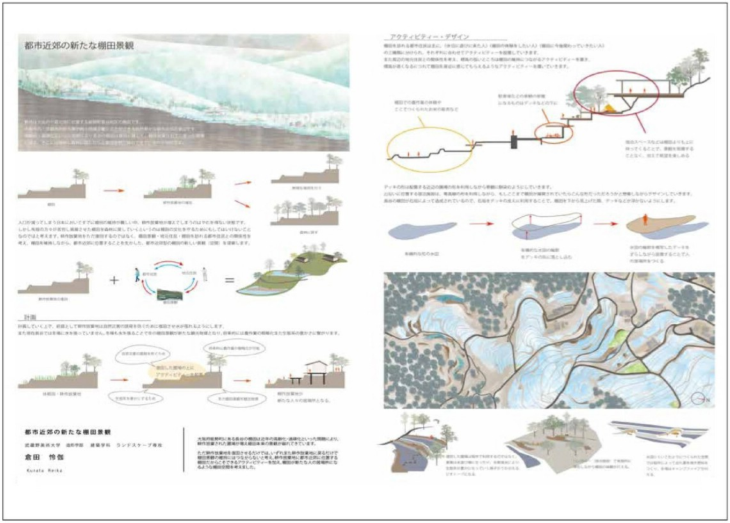
滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科教授
熊本県出身。ハーバード大学デザイン大学院ランドスケープアーキテクチュア専攻修士課程修了。長谷エコーポレーションにて造園設計を担当。その後、京都大学助手を経て 2004 年より現職。現職のランドスケープ研究室において、「風景の新しい見方を生み出す」、「未来の風景を描く」活動を学生達と展開し、サイト（http://www.form.e-arc.jp）にて発信中。UDC 第 1 回まちの活性化デザイン競技まちづくり月間実行委員会会長賞、日本造園学会研究奨励賞、日本造園学会賞（研究論文部門）を受賞。

京都ランドスケープデザイン展の実行委員として、前半展の講評会（3 月 9 日）に参加しました。このような貴重な機会を頂き、日比谷ランドスケープデザイン展実行委員の皆さんに感謝の意を表します。同じ名前を冠する展覧会ですが、京都との違いを実感できたことが、大きな収穫でした。

京都では、卒業制作・修了制作だけでなく、設計演習や自主制作の作品も並びます。出展者は学部 4 回生や修士 2 回生とは限りません。個人作品だけでなく共同作品の場合もあります。卒業制作・修了制作が全て出展されるというわけでもありません。開催時期が秋であることから、卒業制作の出展者が講評会のプレゼンテーションを都合により辞退することや、修了制作の途中段階で出展される場合もあります。2018 年より参加校が 9 校に、出展作品の枠が 36 に増え、出展作品や出展者の幅がさらに広がりました。講評の俎上にのる作品こそ教員の投票によって決まりますが、優秀賞等の選定はなく、講評会終了後、出展者全員がランドスケープデザイン賞の楯を授与されます。このような大らかな枠組みのもと、大学の垣根を超えた教育や交流の場となっていることが京都の特徴だと考えます。

一方、卒業制作・修了制作展覧会である日比谷の会場は、迫力と緊張感に満ちていました。1 年ないし 2 年間、研究から制作まで、自身のサイトや課題に取り組んできた軌跡が、個々のストーリーとして図面ボードや模型に立ち現れていました。見慣れた風景が違って見えるようどんな一手間を加えるのか、記憶の失われた土地や使われなくなった空間にいかなる意味を新たにつくりだすのか、シミュレーション技術の進化にともなう感覚の拡張で何が可能になるのか、彼方の人とどのような空間を共有するのか、都市の森をヒトの場としてどう守り育てるのか、宇宙開発の足元で起きていることがどのような景を成すのか、水を媒体に土地との関わりをいかに再生するのか。こういった問いかけと答えが見事に紡ぎ出されていました。

このように東西で異なるランドスケープデザイン展が存在するのは、意




**村上賞** 都市近郊の新たな棚田景観

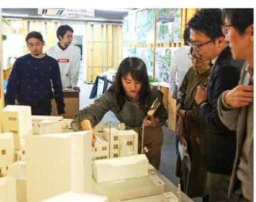
**武蔵野美術大学造形学部建築学科ランドスケープ専攻　倉田怜伽**

この度は村上賞をいただき誠にありがとうございました。ご協力してくださった能勢町役場の皆様、そしてご指導してくださった長谷川先生にこの場をお借りしてお礼申し上げます。この度の卒業設計では、私の生まれ育った大阪の能勢町で、自然豊かなまちを活気付かせる提案を行いたいと思い、棚田百選に選ばれている長谷の棚田を敷地に選定しました。長谷の棚田は高齢化・過疎化といった問題により耕作放棄地が増え、棚田の景観が崩れているのが現状でした。これは長谷の棚田景観の提案でもあるとともに、日本全国で増加している耕作放棄地の新たな活用方法でもあると考えています。今回の受賞を励みに、今後も研究を続け精進していきたいと思います。

味のあることだと考えます。したがって、両展を毎年見比べることが大切でしょう。現在は、交流企画として代表作品を互いに出展していますが、さらに、双方の出展作品の情報や講評会の様子も共有できればと思います。

一方、海外に視線を移すと、例えば、アメリカ造園家協会による学生表彰（ASLA Student Awards、https://www.asla.org/individualaward.aspx?id=5060）のジャンルは、デザインに加えて、分析・計画、研究、コミュニケーション、地域協働と各方面にわたっています。当協会の雑誌（Landscape Architecture Magazine）で最近取り上げられる話題も多岐にわたり、様々な社会問題に対する解法の形は、従来の図面や模型で表現され得るものばかりではないようです。

両展には前述のような違いはありますが、実は同じ土俵にあるとも言えます。そろそろ土俵を広げる時かもしれません。





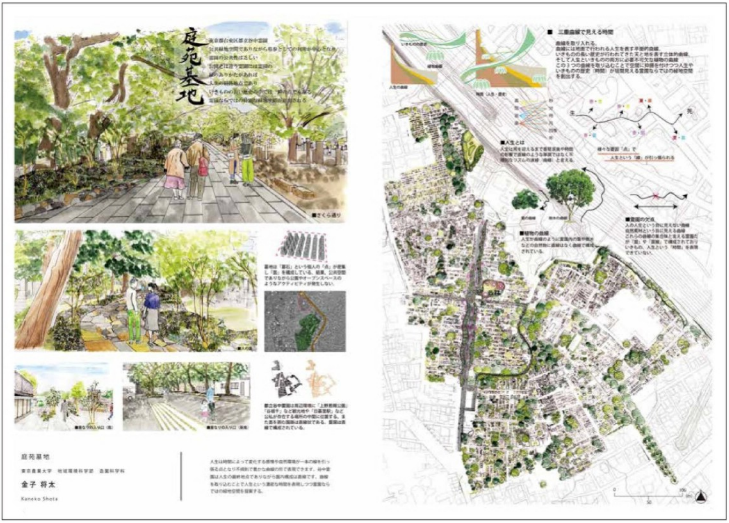
熊谷　玄「ランドスケープデザイナー」

1973年横浜生まれ。Studio 崔在銀（1995年～2001年）からearthscape inc.（2002年～2008年）を経て、2009年3月よりSTGK inc.（株式会社スタジオゲンクマガイ）代表。

2018年第62回神奈川建築コンクール優秀賞：日野これび納骨堂、2018年グッドデザイン賞：左近山みんなのにわ、have a Yokohama（横浜駅西口仮囲いプロジェクト）、グランモール公園、2018年SDA賞入選・九州地区賞：仙巌園／尚古集成館、2018年第12回キッズデザイン賞優秀賞・少子化対策担当大臣賞：ナーサリールームベリーベアー深川冬木、ほか。

錚々たる顔ぶれの講師陣に向けて、ここまで重ねてきた思考と温めた熱量を純粋にぶつける。日比谷ランドスケープデザイン展の講評会に参加して、純粋にこの場が楽しく、また羨ましいと思いました。学生にとっては本当に貴重な機会なのだと思います。参加した学生たちのいずれの作品もプロジェクトの視点と立脚点が素晴らしく、そのためのリサーチや表現など僕自身学ぶことが多かったです。

人類が地球上に生息することで、地球上にどんな風景を生み出すことができるのか。ランドスケープデザインという行為が、単なる「課題解決」や




**公園協会特別賞** 庭苑墓地

**東京農業大学地域環境学部造園科学科　金子将太**

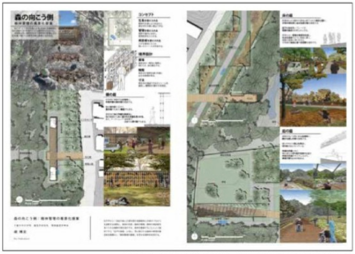
今回、受賞できたのはご指導して下さった阿部先生並びに福岡先生、ランドスケープの楽しさを教えてくださったサマースタジオや演習で指導をして頂いたRLAの皆さんのおかげです。この場を借りてお礼申し上げます。本制作では、都内の大規模緑地でありながら私性の強い墓参の機能が主となり公共としての機能が抑制されている谷中霊園を対象地に、生きている人々のための空間を挿し込み、ゆりかごから墓場まで人生に寄り添う空間を提案いたしました。本提案が少しでも今後の霊園のあり方が変わるきっかけになれば幸いです。今回の受賞を糧に研鑽を続け、再び本誌に名が記載されるよう励みます。

「状況調整」のために行われるのではなく、人が生きるという「物語」そのものをデザインする行為であってほしいと思っていますし、今回、「熊谷賞」を選出するにあたってもその点を重要視し、いくつかの案で悩んだものの最終的には、優秀賞にも選出された千葉大学大学院園芸学研究科の鈴木悠介さんの「緩煙草地」を選びました。

彼の案は「世界一美しい発射場」と呼ばれる種子島宇宙開発センターで行われるロケット発射台とその周辺、さらにはロケット発射という行為そのものに対する提案でした。

ロケットが打ち上げられる時に発生する発射煙を海側に排出するのではなく、山側に向け、あらかじめ設定された「緩煙草地」に導くことで、煙の排出による環境への負荷を一定範囲内にとどめ、発射煙を眺める場を生み出すとともに、発射後は「緩煙草地」に火入れし野焼きを行い「緩煙草地」全体に多様な植生群落の遷移を生み出す。というアイデアは、宇宙という未知の大地を夢見て挑戦する行為と、その足元でおこる「地球」という大地がみせる強さや美しさが一連の行為の中で繋がって展開していて、実際にこのロケット発射を見にいってみたいと思わせるものでした。また、ロケットを打ち上げることによってかかる環境負荷を丁寧に調べあげ、それらに対して、単なる解決の提案ではなく新たな価値を提示しようとする姿勢もとても好感が持てます。そして何よりも、ロケット、種子島の植生、地形、伝統、漁民、観客などこの場所に存在する様々な要素を取り込み、ロケット発射という行為を一つの「物語」として語っていることが素晴らしいです。一方で、場のデザインという点に関しては、もう一歩踏み込んで思考することで、場のリアリティや形態に対するアイデア、実際にぶつかるであろう問題点からの気づきなど、まだまだ考えられることも多いと思うので、この案をここで止めずに、しつこく何度も見返しながら、時間をかけて成熟させてもらいたいと思います。そして、いつの日か是非、実現して欲しいと思います。彼に限らず、最終的な造形という部分では届いていない学生が多いように感じました。社会に出るといろんな業種、職能を持った人たちと共同でプロジェクトを取り組むことになりますが、僕らは、その場所に立ち現れる最終的な風景についてディティールまでイメージできることが求められます。ですので、その部分は妥協せずに立ち向かってもらいたいと思います。

いずれにしても、ランドスケープデザインの未来を感じることができる楽しい１日でした。



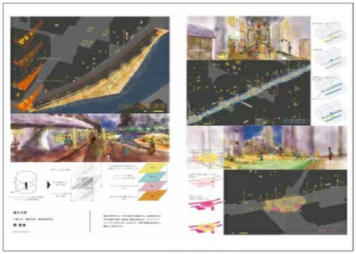

胡 博文（千葉大学大学院園芸学研究科環境園芸学専攻）




笹原洋平（千葉大学園芸学部緑地環境学科）



陳　端（千葉大学大学院園芸学研究科環境園芸学専攻）



関　智美（千葉大学園芸学部緑地環境学科）

**三谷　徹（千葉大学　教授）**

熊谷賞を受賞した「緩煙草地」に対するゲスト熊谷玄氏の講評、「デザインには物語性が重要」に触発され、以下を記します。デザインの初まりである「心象（イメージ）」と、デザインの終わりである「記譜（テキスト）」についてです。「緩煙草地」は確かに、課題発見からその解決に至る説得感※と、訪問者の視点から描かれた風景の納得感※※のある強い物語性のある心象風景を生み出していたと思います。一方、デザインは、映画でもなければ小説でもありません。最終的には、平面図や断面図なり、あるいはダイアグラムなり、何らかの形式で、そのイメージを結晶させる方法が、記述されている形態言語でなければならないと思います。テキストであるというのは、デザインプロセスが説明されているということではありません。デザインそのものが、様々な読み解き（インタープリテーション）を可能とする自立した形態言語に結実していることだと思います。もちろん、初まりにイメージがあり、それを追い求めた結果としてのデザインでなければ人を動かす力のないことは言うまでもありません。人を風景の中に誘う強い心象（イメージ）を生み出すと同時に、幾度でも読み解く興奮を与えてくれる記譜（テキスト）。日比谷展は、今後もそんな高度なデザインがみつけられる場であってほしいと期待します。（※・※※：説得と納得については 2018 年度篠沢健太氏の講評参照）

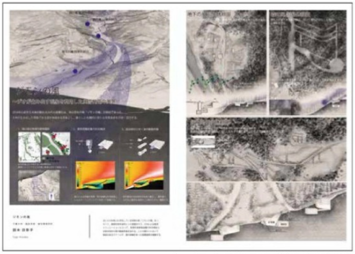


**吉村純一（多摩美術大学　教授）**

2013年から数えて7回目を迎えた日比谷ランドスケープデザイン展は今回で一旦この会場を離れる。この「緑と水の市民カレッジ」のおかげで、この公園に足を運ぶ機会が増え、僕にとって「伝説の日比谷公園」が「馴染みの日比谷公園」となった。ありがとうございました。

学生諸君の持つ、真っ直ぐな見方、感じ方、探究心から生み出される作品たちに僕はいつもハッとさせられてきた。

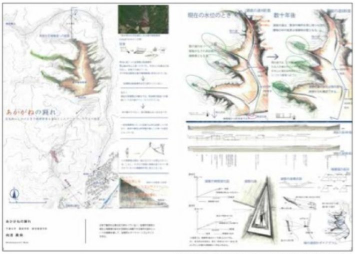
2013 年の中村君のホワイトモデルとモノクロのドローイングのプレゼンテーション。2014 年の本田君の「海を耕す」はその作品の命名が印象的であった。2015 年の早川さんのデザイン手法への提案としての感情図。2016 年は下村君の「砕石跡地に捧げる舞台」、2017 年の黒田くんの砂防ダムへの視点、2018 年の鈴木さんの宇宙の庭には驚かされた。同年、山崎さんの桂川を対象とした作品は緻密な分析と手書きのスケッチのコントラストの魅力。2019 年は鈴木君の緩煙草地は説明を受けることで魅力が大きく膨らんできた。どの作品も、是非その場に立って風景を感じたくなるものばかりである。どうも僕は大地に少しだけ人が手を入れた風景に惹かれているらしい。この連休に桂川の山崎さんと再生した川の見学に同行できた。川のプロフェッショナルからレクチャーを受けながら共に学ぶことができた。この展覧会が卒業・修了時の貴重な発表と学びの場であるのはもとより、同時に OB・OG の更なる研究や学びのプラットフォームになり得ると感じた。



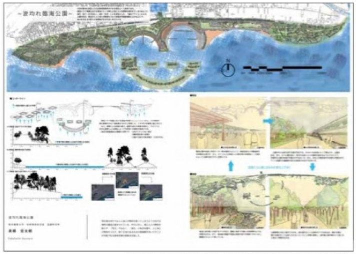
田木日奈子（千葉大学園芸学部緑地環境学科）



青木隆生（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）



向吉真央（千葉大学園芸学部緑地環境学科）



高橋宏太朗（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）

**長谷川浩己（武蔵野美術大学　特任教授）**

ランドスケープデザインの教育の場がいくつかの大学に小さく散らばっているという現状の中で、年に一度の日比谷展の重要性とその価値は本当に得難いものであると毎年感じています。今年も各大学より力作が集まり、学生たちはもとより、私たち教員にとってもランドスケープデザインが対象とするレンジの広さとその深さを再認識させてくれる場となってくれました。その中で最優秀賞となった鈴木くんの作品は「その風景を一度は見て見たい」と思わせる点で、一歩抜きん出ていたと思います。ロケットの発射という、ある意味人間が作り出す圧倒的なパワーのイベントと地形や生態系を読み込んだデザイン操作により、そのパワーと土地の自然、人の営みとが呼応しあい、新しい風景を生み出し、それが新たな島の文化にも発展しうる可能性すら感じさせてくれました。

優秀賞の2点もそれぞれ、ダム建設に代わる代替案を同じく（しかし既に）人間が大地に刻印した採石場跡地を再利用することで地域の美しい環境を守りながら新たな観光資源とすることの可能性を示していたり、流域という概念に着目しつつ長い時間のスパンを射程に入れて、都市を支える基盤そのものを徐々に変えていこうとする未来に向けた態度表明であったり、見応えのある提案であったと思います。

そのほかの案も力作揃いでした。好むと好まざるに関わらず時代が大きな転換的にあることは間違いなく、どの案もこれから私たちはどう行きていくのか、そのことに対する提案であったことが実感できたのは大きな収穫であったと思います。

**福岡孝則（東京農業大学　准教授）**

日比谷ランドスケープデザイン展の講評会に参加させて頂いて２年目となった。出展された作品群を私なりのレンズで視ると「時間」、「用」という２つのキーワードが浮かび上がってくる。最優秀となった鈴木の「緩煙草地」はロケットの噴射煙と一年に数回起こる草地への火入れが重なる瞬間を切り取り、時間の複層的な変化を風景に閉じ込めている点で秀逸であった。これと対照的に岡嶋の「香雨の風景」では神田川流域に時間と共に展開されるグリーンインフラの骨組みを時間とともに戦略的に展開する対照的な作品であったと思う。また、倉田の「都市近郊の新たな棚田景観」も耕作放棄地に新しい利活用を核に時間と共に変化を描く美しい作品であった。「用」は場所の機能や働きと言い換えることができるだろうか。若杉の「Quarry Scape」は採石場跡地の資源を活かした場所の再編集であり、許の「豊島浄水ミュージアムパーク計画」は敷地に堆積した産業廃棄物という遺産の上に水と水が混じり合う風景を重ね合わせ、記憶が溶け込むような場所を提案している。場所の機能をデザインの主軸に据えた時、そこに派生する美しさとは一体どのようなものなのだろうか？生態的な美という言葉が頭に浮かぶ。会場には多くを想起させる作品が並び、エネルギーが満ち溢れる場での講評会は素晴らしいものだった。このような雰囲気をつくられた運営スタッフの皆様のお力に心から感謝の意を表したい。




小宮山雛子（工学院大学建築学部建築デザイン学科）


入江貴道（多摩美術大学院環境デザイン学科ランドスケープ専攻）


許　清揚（武蔵野美術大学造形学部建築学科ランドスケープ専攻）



余　凡（多摩美術大学環境デザイン学科建築専攻）

**篠沢健太（工学院大学　教授）**

「螺旋の一廻り」

今年も日比谷ランドスケープデザイン展を無事終了できました。ご来場者の皆さま、ご協賛・協力下さった企業団体の皆さま、後半展で新たな企画を展開して下さったRLAの皆さま、運営担当のスタッフに深く感謝します。

また同じ場所に戻って来ました。前年のスタッフは出展者として、かつて出展したOBOGは講評者として…。私もこの1年の間に、かつて参加していた京都ランドスケープデザイン展に「戻って」きたりしました。

今回の作品は、「特別な非日常」と日常のなかの「ハレとケ」にわかれます（どの展覧会もだいたいそうですが…）。千葉大学鈴木悠介くん「緩煙草地」や向吉真央さん「あかがねの顕れ」は「特別な非日常」。日常の「ハレ」は、葬送を扱った工学院大学小宮山雛子さん「深い森の…」や、大道芸と夜の街を演出した千葉大学関智美さん「道化の夜」に…。「ケ」は多くの作品に現れ、流域でGIを検討した工学院大学岡嶋千尋さん「香雨の風景」に潜んでいます。

なかでも京都LD展の京都造形芸術大学福田彗美流さん「蓄積される風景」は、尼崎住民の個性や「洗濯物」を許容する作品性など、京都展で気づかなかった日常生活を営む人々の「存在感」が、日比谷展では際立って感じられました。

2019から2020へ…もう一廻りしたとき、私たちは同じ場所には立てません。「日比谷展」の名を冠しつつ、再びこの場所に戻ってきた時に何が見えるか？

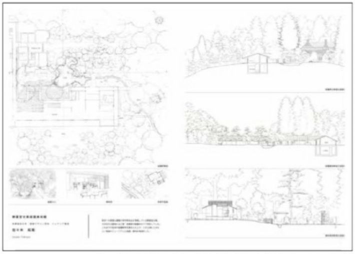
私たちがどう変わっているか？楽しみでもあります。

**高橋靖一郎（株式会社LPD／JLAU）**

環境改善に取り組むには、解決手法と変容のプロセス、人々の関わりをデザインする必要がある。ランドスケープデザインは、そこに新たな価値を醸成する可能性を示唆する。

鈴木悠介「緩煙草地」は、ロケットの噴煙による海洋汚染に端を発している。草地への影響も懸念されるが、鮮やかに描かれるシーンと共に積極的な提案を評価したい。田木日奈子「ジモンの風」は、自然環境を活かした新技術で遠隔地のエネルギー問題を自立的に解決し、風景化を試みた点が興味深い。向吉真央「あかがねの顕れ」は、公害を環境浄化する姿を、ダークツーリズムを介して地域資産として活かす可能性を見せた。若杉勇「QUARRY SCAPE」は、地域との関わりを通じて、ダムを地域環境に還元する手法として可能性を感じさせる。許清揚「豊島浄水ミュージアム計画」は、処分地の浄化過程を顕在化させ、地域の歴史とランドスケープの意味の再考を促そうとする点が評価される。その他、胡博文「森の向こう側」は、公園の維持管理の過程を境界部において風景化することで、地域住民の生活との関わりを深める点に説得力が感じられた。陳瑞「故郷の息吹と共に」は、中国の急速な都市化と消滅する地域性を、ランドスケープデザインを用いて融合を図る点を評価したい。

一方で、自然災害に対する提案の減少が顕著だった。発災は予測不能であり、常に防災・減災の課題も意識して風景にのぞむことを心に留めておきたい。



佐々木拓哉（多摩美術大学環境デザイン学科インテリア専攻）



福田彗美流（京都造形芸術大学大学院芸術専攻建築・ランドスケープ領域）

**田畑友里絵　（公益財団法人東京都公園協会）**

展示会場のみどりのⓘプラザのある日比谷公園は、明治 36 年に開園し、現在、都会のオアシスとして都民の憩いの場所となっています。この歴史ある地で開催される日比谷ランドスケープデザイン展は今年で 7 回目を迎え、例年、パネルから模型作品まで、学生達の力作が会場全体に展示されています。今回も、学生達が設置した大型の模型作品が 20 点余並び、期間中 3000 人以上の来場者が作品を熱心に見ていました。講評会では､学生の発表と先生方による講評が行われ、各大学・ランドスケープ関係者の積極的な交流の機会となっています。 東京都公園協会は、「東京における緑のまちづくりや公園文化の醸成に対して示唆に富む」作品として東京農業大学の金子将太さんの作品「庭苑墓地」東京都公園協会特別賞を授与しました。本作品は、谷中霊園の直線的な公共緑地空間に曲線を取り入れ霊園の緑のあり方を提案した興味深いものでした。今後も私たちは、将来活躍する学生達を応援し、生活に欠かせないランドスケープのよりよい発展に寄与できるよう努めて参りたいと思います。

**小澤亮太（合同会社 HOC）**

後半展を通じて

学生達は自分では気づいていない、それぞれの“光ル”可能性を持っている。だがそれは、プレゼンテーションや講評を行うだけでは表には出てこないことも多々ある。過去の後半展では、講評中に学生と講評者が”対話”をするように提案に至った経緯や、提案に対する思いを様々な視点から深く辿って行くと、学生達の”光ル“ものを引き出せる場面があった。それらから、参加学生にとり対話がしやすい環境づくりを目指し企画を進めた。いわゆる講評とは一味違い、学生達が程よい緊張感の中で考えや思いを伝えやすいよう、数年間に渡り後半展に関わってきた企画メンバーに加えて、より若い世代の社会人（後半展 OB）を新たにメンバーとして迎えた。それにより、学生が歳の近い先輩へ相談するような感覚で、講評ではなく“対話”を深め、学生達の可能性をより引き出せるのではないかと考えたからだ。その甲斐もあり、学生達は前半展とは異なり、型にはまった言葉ではなく、自分の言葉で本当は何がしたかったのか、何に違和感を感じているのかなどの、本質の議論を深められたのではないかと思う。そこから学生達の多くの“光ル”可能性が垣間見られたように思う。また、今年の後半展の特徴として、時代の流れを捉えたような提案が多かった。企業とコラボレーションした提案や､ランドスケープとプロダクトを繋げる提案など､『ランドスケープ×α』によって、社会との接点を提案する作品が多く、我々企画メンバーも新たな発見や刺激を受けるものだった。

後半展を通じ、学生の新たなことに挑戦する姿勢や、これからの新しい価値観や思想に触れる良い機会であったと感じている。学生が学校の枠を越え、また実務者と意見を交わす場は両者にとり有意義であり、今後もこのような場が続いて行くことを期待したい。



後期展のポスターセッションの様子

主催：　「日比谷ランドスケープデザイン展」実行委員会
共催：　公益財団法人 東京都公園協会
後援：　公益社団法人 日本造園学会
　　　　一般社団法人 ランドスケープアーキテクト連盟
協賛：　オンサイト計画設計事務所／株式会社M&N環境計画研究所／株式会社爽環境計画／株式会社三菱地所設計／株式会社ランドスケープ・プラス／設計組織 PLACEMEDIA ／高崎設計室有限会社／戸田芳樹風景計画／PLATdesign ／株式会社ランドスケープデザイン／株式会社 LPD ／カネミツヒロシセッケイシツ
参加校：千葉大学／東京農業大学／多摩美術大学／武蔵野美術大学／工学院大学／京都造形芸術大学

「日比谷ランドスケープデザイン展」実行委員会メンバー

千葉大学　三谷　徹
姉歯宗樹／山崎祥平／谷本実有／出立 琳／平木咲耶子／
東京農業大学　阿部伸太／福岡孝則／
横山俊輔／高橋宏太朗／金子将太／山田和佳／宮川美里／岩切菜月／小川直哉
久保翔太郎／菅谷 賢太／
多摩美術大学　吉村純一
入江貴道／コウショク／佐藤　快／長尾　梓／
武蔵野美術大学　長谷川浩己
北島未来／福田早也花／
工学院大学　篠沢健太
武佐 駿一／太田ひとみ／畠澤 龍一／小池　樹／

一般社団法人ランドスケープアーキテクト連盟
高橋靖一郎　株式会社 LPD ／小澤　亮太　合同会社 HOC ／小林　裕太、岸　孝／株式会社プレイスメディア／井野　貴文　株式会社グラック／杉山　茂樹、木滑　公人　株式会社日建設計／高橋　大樹　株式会社ランドスケープデザイン／崎　裕起人　株式会社日本設計／山崎ひかり　大成建設株式会社／

公益財団法人東京都公園協会




ランドスケープデザイン展
2019 の小冊子

## 日比谷公園──緑と水の市民カレッジ




公園や庭園、緑地の歴史や自然環境等に関わる展示、東京都立公園の情報、またそこで活動するボランティアの情報を発信する「みどりのⓘプラザ」、公園緑地や環境に関する図書をはじめとする資料を収蔵・公開する「みどりの図書館東京グリーンアーカイブス」、東京の緑と水について幅広く学べる「緑と水の市民カレッジ講座」を実施する緑と水に関する総合的な施設である。

### 緑と水の市民カレッジ──講座の紹介

## 緑と水の市民カレッジ講座

市民が緑と水に関する知識が学べる講座を開催しています。造園ＣＰＤが取得できる首都圏の大学の先生や、研究者による専門的なものから、夏休み等に子どもたちが楽しく参加できるものなど、幅広い世代が参加できるテーマで年間100*1講座以上企画・運営しています。公園や庭園について知識を深めたい方、花や樹木に関心をお持ちの方、緑と水に親しみたい方、ぜひお気軽にご参加下さい。
※事前申込制です。
※原則、参加費が必要となります。
※詳しい内容については下記URLを参照下さい。
https://www.tokyo-park.or.jp/college/

＊1 2019年度は、緑と水の市民カレッジの建物改修工事のため講座は60回程度開催予定です。


セミのぬけがらをさがそう


ガーデナー入門講座初級編


首都圏大学サテライト講座


トンボの世界を覗いてみよう


石神井川下流、滝野川・王子など江戸からの景勝地を訪ねる


東久留米市湧水の川「落合川で魚とり」

### 緑と水の市民カレッジ改装に伴うみどりの図書館東京グリーンアーカイブス休館および、レファレンスサービス等の休止のお知らせ

●このたび公益財団法人東京都公園協会が運営する緑と水の市民カレッジの改装を行います。それに伴い、工事期間中はみどりの図書館東京グリーンアーカイブスは休館となり、レファレンスサービスを一時休止いたします。
ご来館の皆様にはご不便をおかけいたしますが、なにとぞご理解くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。なお、緑と水の市民カレッジ講座については通常通り実施いたします。
期間　2019年4月1日（月）～ 2019年7月下旬（予定）
※改装工事の状況により期間が延長される場合がございます。

ガイドブック表紙

**緑と水の市民カレッジ**
https://www.tokyo-park.or.jp/college/

開館時間 ..... 9:00–17:00
休館日 ......... 日曜・祝日・年末年始（12月29日～1月3日）
入館料 ......... 無料

〒100-0012
東京都千代田区日比谷公園1-5
TEL. 03-5532-1306
FAX. 03-5532-1307



庭の未来へ

# 庭 NIWA 最新号・バックナンバーのご案内

建築資料研究社の季刊「庭」では、「庭の今」を伝えつつ、過去を紐解くことで、これからの「庭」の姿を見いだしていきます。

## No.235 2019 夏号




定価：本体 2,400 円+税

### 暮らしを彩る 住宅の庭

庭と建築は不可分な存在。本特集では、そのように自然と思わせられる、庭と建築の関係を築けている庭を取材した。作庭家の作庭意図が、住宅のデザインやクライアントの住まい方とバランスの取れた、居心地良く、美しい庭である。

造園武／ LANDSCAPE NIWATAN ／グリーンプラン厚澤／ランドスキップ

**歴史的町並みに息づく商家の庭―滋賀・長浜**

北国街道 安藤家／文泉堂／ナガタ洋品店／湖北観光情報センター／草野商店

連載

- 美×技　Vol.10　佐藤邸／植彌加藤造園
- NIWA SPECIAL REPORT　木の家設計グランプリ
- NIWA INTERVIEW　#20　内山貞文
- 作庭に役立つ素材と技術 23　駐車場
- 古来の庭園造作・環境づくりに学ぶこれからの造園（第 5 回）　高田宏臣
- 未来を植える人びと～植木生産者を訪ねて～（第 7 回）　石川重明

## No.234 2019 春号




定価：本体 2,400 円+税

### 時代を映す空間 寺院の庭

人々が祈り、集う場と寺院には古典をベースにしながらも、多様な現代社会が反映された庭がある

- 建築家と造園家がつくる新しい寺院のかたち　浅利幸男×長崎剛志
- 伝統工法・版築がもたらす新しい " 内装 " 谷尻誠×橋本善次郎
- SPECIAL REPORT OVERSEAS ポートランド日本庭園

## No.233 2018 冬号




定価：本体 2,400 円+税

### リノベーションで蘇る 宿の庭

庭をしつらえの「要」として捉え蘇った宿泊施設から、宿と庭にある相互関係を探っていく。

- 人と自然との共創空間リゾートホテルの庭
  - ・水庭 アートビオトープ那須 石上純也建築設計事務所／静岡グリーンサービス
  - ・はいむるぶし カゼモニワ／やまと庭樹園

## No.232 2018 秋号




定価：本体 2,400 円+税

### 無作為の作為 経年変化を愉しむ庭

竣工直後ではなく、その後の手入れによって良くなっていく庭の法則を丁寧に掘り下げます

- SPECIAL REPORT 緑化先進国 SINGAPORE
- 名庭園　一条恵観山荘庭園
- 塚本こなみ／はままつフラワーパーク
- プレゼンテーションの極意

## No.231 2018 夏号




定価：本体 2,400 円+税

### 現代的自然観の中の普遍性 店舗の庭　vol.2

店舗空間において、庭がどのように求められ、機能しているのかを読み解きます

- グリーンスペースの新しいかたち
- 『伝統庭園技塾』東日本大震災復興記念庭園築庭事業
- 明かりと闇が織りなす夜景の演出

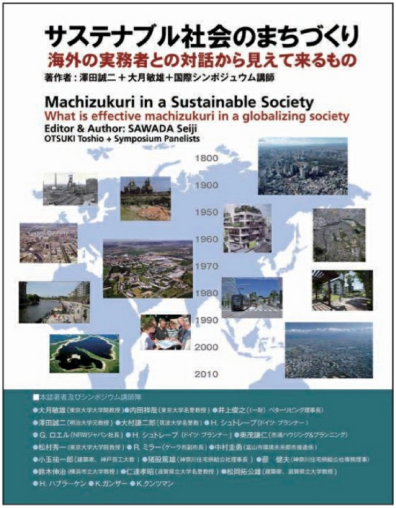
**定期購読のおすすめ**　季刊「庭 NIWA」を毎号、確実に手に入れるなら、定期購読がおすすめです。送料もサービスになってお得です。

◉定期購読料金 送料サービス　1 年 4 冊（1・4・7・10 月 1 日発売）…¥9,600（税別）

◉定期購読・最新号・バックナンバー・別冊などのご注文はこちら

建築資料研究社出版部　http://www2.ksknet.co.jp/book/　庭オフィシャルサイト　http://niwamag.net　富士山マガジンサービス　http://www.fujisan.co.jp/niwa

## 御注文書　Fax：03-3496-7387（㈱マルモ出版）




**好評発売中**

### ■日本のプロジェクト事例（住戸数・住人数／エリア面積）

| □団地再生プロジェクト | | □ Housing Estates Refurbishment Projects | |
|---|---|---|---|
| 01：洋光台 | 4,373 戸 /209ha | 01 Yokodai | 4,373 DU / 209ha |
| 02：汐見台団地 | 3,516 戸 /75ha | 02 Shiomidai | 3,516 DU / 75ha |
| 03：貝取豊ヶ丘団地 | 1,302 戸 /19ha | 03 Kaitori-Toyogaoka | 1,302 DU / 19ha |
| 04：観月橋団地 | 540 戸 /3ha | 04 Kangetsukyo | 540 DU / 3ha |
| 05：鎌倉グリーンハイツ | 310 戸 /5ha | 05 Kamakura Green | H. 310 DU / 5ha |
| 06：たまプラーザ | 1,214 戸 /13ha | 06 Tama-Plaza | 1,214 DU / 13ha |
| 07：相武台団地 | 2,500 戸 /31ha | 07 Sobudai | 2,500 DU / 31ha |
| 08：浜甲子園団地 | 4,600 戸 /31ha | 08 Hamakosien | 4,600 DU / 31ha |
| 09：多摩平の杜 | 144 戸 /18ha | 09 Tamadaira-no-Mori | 144 DU / 18ha |
| 10：男山団地 | 4,600 戸 /185ha | 10 Otokoyama | 4,600 DU / 185ha |
| □都市再生・地域再生プロジェクト | | □ Urban, Suburban, Regional Development Projects | |
| 21：横 浜 市 | 3,690,000 人 /427k㎡ | 21 Yokohama City | 3,690,000 p. / 427k㎡ |
| 22：滋 賀 県 | 1,390,000 人 /4,017k㎡ | 22 Shiga Prefecture | 390,000 p. / 4,017k㎡ |
| 23：富 山 市 | 425,000 人 /1,242k㎡ | 23 Toyama City | 425,000 p. / 1,242k㎡ |
| 24：黒 部 市 | 42,000 人 /426k㎡ | 24 Kurobe City | 42,000 p. / 426k㎡ |
| □ 20 世紀後半に始まる伝統建築環境再生まちづくりの事例 | | □ Machizukuri project started in 1980ers in local tradition | |
| 25：金 山 町 （山形県）（注） | 6,175 人 /162k㎡ | 25 Kaneyama （Yamagata） | 6,175 p. / 162k㎡ |

### ドイツのプロジェクト事例、そのまちづくり促進策　■ Projects, Promotion Measures in Germany

| □サステナブル社会づくりのプロジェク事例 | | □ Community Development for Sustainable Society | |
|---|---|---|---|
| 31：イノベーションシティ ボトロップ市、NRW 州 | 120,000 人 /100k㎡ | 31 Innovation City Bottrop NRW / West Germany | 120,000 p. /100k㎡ |
| 32：IBA チューリンゲン 州地域再生事業・東独 | 2,334,000 人 /16,172k㎡ | 32 IBA Thüringen State East Germany | 2,334,000 p. /16,172k㎡ |
| 33：ゲーラ 2030 まちづくり プロジェクト・東 | 100,000 人 /152k㎡ | 33 Gera 2030 City Project East Germany | 100,000 p. / 152k㎡ |
| □ 1990 年代に始まった団地再生・まちづくり事例 | | □ Housing Estate Refurbishment Projects since 1990s | |
| 41：ライネフェルデ市（注） チューリンゲン州 | 18,5000 人 / 97k㎡ | 41 Leinefelde Thüringen State | 18,500 p. / 97k㎡ |

### ■目次




■著者／
澤田誠二＋サステナブル社会のまちづくり国際シンポジュウム講師
■発行／㈱マルモ出版
和英併記、本文120頁、A4判変型、フルカラー、並製ソフトカバー


**価格／**
**2,800円**（税込・送料別）

【お申込方法】下記の欄に必要事項をご記入の上、Faxでマルモ出版までお申込ください。その後商品と払込取扱票をお送りします。
銀行振込をご利用の方は、上記金額に送料170円（1冊）、500円（2冊以上）を加えた金額を下記1の口座にお振込ください。
郵便貯金口座をご利用の方は、届きました払込取扱票を用いて下記2の口座にお振込ください。

【お振込先】1．三菱 UFJ 銀行 渋谷中央支店（普）5294495 株式会社 マルモ出版
2．郵便貯金口座 口座番号：00170-4-70822 株式会社 マルモ出版　　※振込手数料はご負担下さい

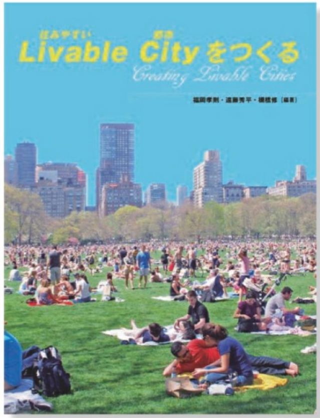
| ご注文日　　年　　月　　日 | | | ご注文冊数 |
|---|---|---|---|
| ご注文者 | お名前 | ご連絡先（Tel） | |
| | ご住所　〒　　－ | | 冊 |


株式会社
マルモ出版
〒150-0036　東京都渋谷区南平台町4-8　南平台アジアマンション708
TEL.03-3496-7046　FAX.03-3496-7387　Mail：maru@marumo-p.co.jp（アドレスが新しくなりました）

# 住みやすい都市 Livable Cityをつくる

**福岡孝則・遠藤秀平・槻橋修／編著**

**本当に生活の質が高く、豊かに生きられる、住みやすい都市とは何か？「Livable City（住みやすい都市）」という新しいコンセプトに基づき、世界の行政担当者やデザイナーが語るリバブルシティのビジョン（戦略）とアプローチを紹介し、国内外のパブリックスペースから展開される最新のリバブルシティ事例や提案を解説。都市に住む豊かさや新しい価値を探し、行動するあらゆる人のための一冊。**




A4 変型（W225mm × H297mm）
オールカラー
本文：144 頁

**価格**

**2,916円**（税込・送料別）

**第 1 章 リバブルシティのビジョンとアプローチ**

■リバブルシティをつくる　福岡孝則［神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 持続的住環境創成講座（積水ハウス）特命准教授 / Fd Landscape 主宰］■ニューヨーク市の Livable City 戦略：パブリックスペースからはじめよう!　ジェフリー・シューメーカー［ニューヨーク市都市計画局　都市デザイン・ディレクター / チーフ都市デザイナー］■人、場所、それともモノ?　ジョージーン・セオドア［ニュージャージー工科大学建築デザイン学部 准教授、Interboro Partners パートナー］■メルボルン市のリバブルシティ戦略と都市ランキングースマートでリバブルな未来の都市創成に向けてー　オースティン・レイ［元メルボルン市　スマートシティオフィス・プラクティスリーダー , Planning for Change］■ '場所を共有する' ー人間のためのパブリックスペースと都市をつくるー　サーシャ・コールズ［オーストラリア・シドニー市　ASPECT Studios ディレクター］■人が人を集める。住みやすい街と移住論　小泉寛明［Lusie Inc. 代表、神戸 R 不動産］■［パネルディスカッション］Livable City のつくりかた　パネリスト：遠藤秀平 × 槻橋修 × 小泉寛明 × オースティン・レイ × サーシャ・コールズ、モデレーター：福岡孝則、通訳：山田知奈■アジアのサステイナブル・シティー水循環から発想する都市環境デザイン　レオナルド・ウン［ランドスケープアーキテクト　Ramboll Studio Dreiseitl Singapore 代表］■ドイツのサステイナブル・デザインー気象と環境性能から建築・都市を構想する　ヤン・メナート［クライメイト・エンジニア　Transsolar, Germany］■ポートランド市のグリーンインフラ（GI）戦略最前線ー夢から実践へ　30 年間の GI 展開について語る　ドーン・内山［米国ポートランド市環境局アシスタント・ディレクター（グリーンインフラ担当）］

**第 2 章　パブリックスペースからリバブルシティを考える**

■ Bottiere-Chenaie Eco District ―水から発想するエコロジカル街区のデザイン、パブリックスペースを核にした「健康的な都市の創成」、パブリックスペースからの都市再生 ―ニュー・オールド・マーケットスクエア、ブラウンフィールド（工業跡地）を活かしたリバブルシティ、Water for All ―水を媒介とした人間、都市、自然の新しい関係性、コートヤード HIROO ―多様な価値観をもつ人々が混じり合うオープンでソーシャルな場所をつくる―　福岡孝則■都心の公園を育てるこころみ ―リバブルシティをめざして―　村上豪英［一般社団法人リバブルシティ イニシアティブ代表理事（アーバンピクニック事務局長）］

**第 3 章 リバブルシティのつくり方　提案編**

■減災デザイン都市　・コルゲート鋼板を用い段階的供給による拡張可能な災害時仮設住宅の提案　遠藤秀平［神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 教授、建築家］、神戸大学大学院 遠藤研究室・景観とのバランスを目指した津波避難タワーの提案　遠藤秀平、高麗憲志［神戸大学大学院工学研究科 技術職員］■リバブルシティの新しい条件 レジリエントな社会を導くデザイン手法　槻橋修［神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 准教授、建築家］、神戸大学大学院 槻橋研究室　1.「失われた街」模型復元プロジェクト、2. 気仙沼みらい計画大沢チーム、3. 氷見朝日山公園コミュニティデザイン、4. SANNOMIYA2016 プロジェクト 〜つくりながら考える〜■持続的雨水管理を核にしたグリーンインフラ　福岡孝則■神戸大学×モナシュ大学　国際ワークショップ 'Livable City KOBE' LIVABLE CITY 神戸の提案

**お申し込み方法**：下記の欄に必要事項をご記入の上、FAX でマルモ出版までお申し込み下さい。その後商品と払込取扱票をお送りします。
銀行振込をご利用の方は、上記金額に送料 170 円（1 冊）、500 円（2 冊以上）を加えた金額を下記 1 の口座にお振込下さい。
郵便貯金口座をご利用の方は、届きました払込取扱票を用いて下記 2 の口座にお振込下さい。

**お振込先**：1. 三菱 UFJ 銀行 渋谷中央支店　（普）5294495　株式会社マルモ出版
2. 郵便貯金口座 口座番号：00170-4-70822　株式会社マルモ出版　　※振込み手数料はご負担下さい。

**お問合せ先**：ご不明点・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡下さい。

**㈱マルモ出版　〒 150-0036 東京都渋谷区南平台町 4-8 南平台アジアマンション 708 号**
**TEL. 03-3496-7046　FAX. 03-3496-7387　E-mail：maru@marumo-p.co.jp**

| ご注文日　　年　　月　　日 | | | ご注文冊数 |
|---|---|---|---|
| ご注文者 | 会社名・お名前 | ご連絡先（TEL） | 冊 |
| | ご住所　〒 | | |

# Information
インフォメーション

## 第3回 景観・ランドスケープ総合展 出展者募集中（7月26日〆切）

日本最大級の建築・インテリア等の展示会として毎年開催される Japan Home & Building Show において、今年も景観・ランドスケープをテーマとした専門展示会が開催される（第3回）。本展示会は建築の屋外空間から街路、広場や公園、その他都市空間を形成する様々な景観資材に焦点を当てたものであり、今年も「ジャパンホームショー」「団地・マンションリノベーション総合展」等の関連展示会と共に開催されることとなった。現在出展者を募集している。

■出展申込期間／2019年7月26日（金）まで
※6月28日（金）まで早期申込割引あり（事務局必着）
■展示会開催期間／2019年11月13日（水）～15日（金）
※ほか6展示会と同時開催（詳細は下記URL参照）
■会場／東京ビッグサイト（江東区有明3-11-1）
■問合せ（事務局）／（一社）日本能率協会 産業振興センター内（東京都港区芝公園3-1-22）
TEL：03-3434-1988（土日祝以外の9:30～18:00）
Mail：jhbs@jma.or.jp
■URL／http://www.jma.or.jp/homeshow/

## 2019年度 土木学会デザイン賞 エントリー募集中（6/30〆切）

（公社）土木学会 景観・デザイン委員会が主催する土木学会デザイン賞（2001年創設）は、公募対象を広く土木構造物や公共的な空間に求め、計画や設計技術、制度の活用、組織活動の創意工夫により周辺環境や地域と一体になった景観の想像・保全を実現した作品、およびそれらの実現に貢献した関係者や関係組織の顕彰を行っている。過去18年間での表彰作品数は計176点。近年は受賞対象作品も広がり、小規模ながらも地域の日常生活の魅力づくりに貢献している作品や、防護柵などの普及品のデザイン性を高めて公共空間の質の底上げを図った製品などが表彰されている。
現在、2019年度のエントリーおよび作品応募を受付している（応募に先行してエントリーが必要）。

■募集期間／エントリー：6月30日（日）まで
応募書類：7月1日（月）まで ※当日消印有効
■募集対象作品／道路・街路・街並み・広場・公園・駅舎・河川・海岸・港湾・空港等の公共空間・公共施設や、橋梁・堰堤・水門・閘門・堤防等の構造物等、実現したもの。あるいは公共空間で標準的に使用される製品や材料（製品・材料はすでに複数の使用実績があることが条件）
■応募方法／エントリーシート、作品説明書、応募書類データを下記事務局へ提出（各フォーマットはWebサイト（下記 URL参照）よりダウンロード可）
■書類送付先・問合せ（デザイン賞事務局）／
〒160-0004 東京都新宿区四谷1 外濠公園内
（公社）土木学会 景観・デザイン委員会 デザイン賞事務局
Mail：prize@jsce.or.jp
■URL／http://design-prize.sakura.ne.jp/

## 国土交通省、ガーデンツーリズム登録制度を2019年4月に創設



5月30日のキックオフイベントより

国土交通省は、地域の庭園や植物園を連携させることによる観光振興を図り、2019年4月、ガーデンツーリズム登録制度（庭園間交流連携促進計画登録制度）を創設した。5月30日（木）には横浜情報文化センター 情文ホール（神奈川県横浜市）でキックオフイベントが開催され、第1回登録証交付式および登録団体（下記）による取組紹介等が行われた。

■第1回登録計画と地域（6件）／北海道ガーデン街道（北海道大雪地域～十勝地域）、ガーデンネックレス横浜（横浜市）、富士・箱根・伊豆「皇室ゆかりの庭園」ツーリズム（神奈川県・静岡県）、にいがた庭園街道（新潟県）、アメイジングガーデン・浜名湖（静岡県）、宮崎花旅365（宮崎市）
■審査委員会長／涌井史郎（東京都市大学 特別教授）
■審査委員／倉重祐二（新潟県立植物園 園長）、小林茂（㈱JTBパブリッシング「ノジュール」編集長）、須磨佳津江（フリーアナウンサー）、田中伸彦（東海大学観光学部観光学科 教授）、八木波奈子（㈲ビズ出版 代表取締役）
■問合せ／国土交通省 都市局 公園緑地・景観課 緑地環境室担当（脇坂、和田、藤井）
TEL：03-5253-8111（直通は03-5253-8420）
■URL／ http://www.mlit.go.jp/toshi/park/toshi_parkgreen_gardentourism.html

## TODAY is -Next Generations of DAIDO MORIYAMA- ソニースクエア渋谷プロジェクトで開催中

ソニースクエア渋谷プロジェクト（渋谷区）では、現在「SHIBUYA/森山大道/NEXT GEN」プロジェクトの第1弾として、デジタルネイティブ世代である新進気鋭の若手フォトグラファー8名が渋谷の街を舞台とした作品を日替わりで展示するイベントを開催する。400枚以上におよぶ作品で会場が埋めつくされるほか、毎日更新されるフォトグラファー自身による作品に関する音声ガイドや、一般来場者が自身で撮影した写真をInstagramに投稿することで、会場内に自分の作品を展示できるInstagram連動プログラム「SHIBUYA PHOTO SCRAMBLE」も実施。その他、ストリートスナップのワークショップなど多彩な催しが予定されている。

■開催期間／ 2019年6月6日（木）～7月29日（月）
■営業時間／11:00～21:00（入場料無料）
■会場／ソニースクエア渋谷プロジェクト
（東京都渋谷区神南1-21-3 渋谷MODI 1F）
■URL／https://www.sony.co.jp//square-shibuyapj/

## 【四国化成工業㈱】空間デザインコンテスト 作品募集のお知らせ（8月5日〆切）

四国化成工業㈱は、同社製品を採用した施工作品を全国から募集し、優秀な作品を表彰する「空間デザインコンテスト」を今年も開催する。第26回目の開催となるこのコンテストでは、住宅・店舗の内外装や、住宅エクステリア・景観エクステリアなどの幅広いジャンルから優秀な施工作品を募集するものであり、ランドスケープ分野に深く関わるジャンルも多い。現在、Webサイト等で作品の募集を行っている。（過去の受賞作品ほか、コンテストの詳細については下記URL参照）

■募集期間／2019年8月5日（月）まで
■応募資格／エクステリア、内装、外装、舗装のいずれかの設計に携わる法人または個人
■応募作品条件／四国化成工業㈱の製品を使用し施工完了している現場で、施主の応募承諾が得られている作品であること。
■応募方法／ Webサイト（下記URL）内の応募フォームより画面の指示に従って応募。その他、所定の応募用紙からの応募も可能。
■応募部門（全8部門）／アートウォール部門、車庫・車庫まわり部門、住宅の門・塀まわり部門、庭まわり部門、景観の門・塀まわり部門、公共空間部門、内装材部門、外装材・舗装材部門
■結果発表／2019年11月下旬
■問合せ／TEL：0120-212-459
■URL／http://kenzai.shikoku.co.jp/contest/

## 吹田市円山町 大規模戸建住宅プロジェクト（仮称）始動。2019年秋に街びらき

大林新星和不動産㈱は大阪府吹田市円山町において、全303区画のスケールで大規模戸建住宅プロジェクトを始動する。このエリアは都会中心部では希少といえる第一種低層住居専用地域が大部分を占める風致地区であり、街びらきは2019年秋を予定している。本プロジェクトは「持続可能な開発のための2030アジェンダ」による SDGsへの取組の一環として推進されるものであり、大阪大学や吹田市と協働する産学官連携事業でもある。さらに、国土交通省よりサステナブル社会を目指すモデル事業として、大規模戸建住宅開発における戸建住宅の新築プロジェクトとしては全国初の「サステナブル建築物等先導事業（省$CO_2$先導型）」に採択され、高い期待が寄せられている。

■所在地／大阪府吹田市円山町76
（旧千里山グラウンド跡地）
■敷地面積／開発面積：77,456.59㎡（23,436坪）
宅地面積：49,763.00㎡（15,057坪）
■総区画数／303区画
■問合せ（吹田市円山町プロジェクト準備室）／
TEL：06-4705-0028 FAX：06-4705-0131
■URL／https://www.osre.co.jp/

## 2019年度 生物分類技能検定 7月1日より受験申込受付開始

1999年より毎年実施されている生物分類技能検定は、生物に関心をもつ人を対象に分類の知識向上を目的として野生生物や自然環境の調査・保全を担う人材を育てるとともに、動物分類学や植物分類学の発展を促し、野生生物調査に関わる生物技術者の育成、自然環境調査の精度向上への貢献等を目的とした資格試験である。試験は難易度ごとに1～4級の4段階に分かれ、1・2級の登録者は環境省の「一般競争（指名競争）参加資格申請」の有資格者として認められている。そのほか、林野庁や地方自治体などの自然環境に関わる調査・保全業務等の入札資格としても取り入れられている。

自然共生型の持続可能なまちづくりの重要性が叫ばれる中、屋外景観に関わる事業者あるいはランドスケープデザイナーにとっても有意義な資格といえる。

■運営／（一財）自然環境研究センター

■試験日／ 2019年11月10日（日） ※1～4級共通

■受験申込期間／ 1 級：郵送 7/1～8/23

2 級：ネット 7/1～9/2、郵送 7/1～8/23

3 級：7/1～9/13（ネット・郵送共通）

4 級：7/1～9/13（ネット・郵送共通）

※ 3・4 級は学校検定あり（詳細は下記URL参照）

■受験手数料／ 1 級：12,340 円 2 級：7,710 円 3 級：5,140 円 4 級：3,080 円 ※問題集（本体1,451 円+税）

■受験申込方法／Web サイトより申込または郵送（その他試験の詳細は下記Webサイト参照）

■問合せ／一般財団法人自然環境研究センター

生物分類技能検定事務局

所在地／〒130-8606 東京都墨田区江東橋3-3-7

TEL：03-6659-6110（平日9:30～17:30）

FAX：03-6659-6320（24 時間受付）

■ URL ／ http://www.jwrc.or.jp/

## 【JLAU特別シンポジウム】Common Issues 世界が日本のランドスケープに期待すること。

JLAU IFLA委員会では、2021年のIFLA-APR大会日本開催に向けて、日本や世界が抱える共通課題を洗い出し、テーマ毎に連続シンポジウムを開催することを予定している。その第1弾として開催される 6月29日の会においては、JLAUのステークホルダーである世界銀行防災ハブの竹本祥子氏、東北にてIFLA気候変動WSを終えたIFLA日本代表の上原三知氏、世界銀行グリーンインフラＷＳに参加した中島直弥氏。JICAにてアフリカ支援を行っていた吉開千代氏と共に、日本と世界が共有する課題を探り、世界が日本に期待していることを知る機会となる。

■会場／TKP九段下

（東京都千代田区神田神保町3-4 柳川ビル）

■開催日時／6月29日（土）15:00～17:00

※懇親会は17:00～18:00（要事前申込）

■参加費／無料（懇親会は2,000円 ※学生1,000円）

■主催／JLAU（一社）ランドスケープ連盟

■コーディネーター／保清人（JLAU IFLA 委員長）

■プログラム ※（）内は講師／

1．東北IFLA気候変動ＷＧの報告とIFLA2021大会（上原三知／IFLA日本代表）

2．国際機関・国際協力の分野がランドスケープに期待していること（竹本祥子／世界銀行東京防災ハブ防災専門官）

3．世界銀行グリーンインフラWSで見えたランドスケープの可能性（中島直弥／㈱日建設計都市部門 都市基盤計画グループ 計画部）

4．アフリカの課題と日本に何が可能か（東ティモール編）？（吉開千代／第一園芸㈱）

■問合せ（事務局）／Mail：jlau.iflajapan@gmail.com

■URL／http://jlau.or.jp/

## 第17回日比谷公園ガーデニングショー2019 ガーデンコンテスト作品募集のご案内



ライフスタイルガーデン部門の出品作品（2018年）

毎年恒例、日比谷公園ガーデニングショーが今年も10月に開催される。噴水広場を中心として各種テーマガーデンやコンテナガーデン、ハンギングバスケット等、計4種類の作品が展示される。現在、各部門のコンテスト作品を募集している（詳細は下記 URL 参照）

■開催日時／ 2019年10月19日（土）～27日（日）

10:00～16:30（最終日は16:00まで）

■展示場所／日比谷公園（千代田区日比谷公園1-6）

※噴水広場・第二花壇・にれのき広場など

■応募締切／2019年8月2日（金）必着

※ガーデン部門、ライフスタイルガーデン部門の出品者は、8月22日（木）の説明会への参加必須

■募集部門／ガーデン部門（テーマ「和・技・美 ～庭から緑の都市へ」）、ライフスタイルガーデン部門（テーマ「美・食・住 ～暮らしを楽しむガーデニング～」）、コンテナガーデン部門、ハンギングバスケット部門

■応募方法／Webサイト（下記URLを参照）より応募用紙をダウンロードし、必要事項を明記して8月2日（金）までに（必着）下記窓口まで Mailまたは郵送で。

■コンテスト窓口・問合せ（㈱ランド内）／

〒136-0073 東京都江東区北砂6-27-14

TEL：03-5635-9955（平日10:00～16:00）

Mail：hibiyags@land.ne.jp 担当：矢部

■URL ／http://www.hibiya-gardening-show.com/

## 『東京インターナショナル・ギフト・ショー LIFE×DESIGN』で、DIY・アウトドア・サステナブル・アートをテーマにした見本市開催

㈱ビジネスガイド社が開催する「東京インターナショナル・ギフト・ショー秋2019 第6回LIFE×DESIGN」では、DIY・アウトドア・サステナブル・アートの4つをテーマにした見本市が特別企画として開催される。

■会場／東京ビッグサイト 青海展示棟

■開催日時／2019年9月3日（火）～6日（金）

10:00～18:00（最終日のみ16:00まで）

■入場料／無料（事前登録制）

■主な出展社／消費財関連業界の国内メーカー・輸入商社・欧米メーカーなど

■出展企業数／約4,000社見込（同時開催展含む）

■主な出展商材／アクティブデザイン＆ハイクオリティグッズ、フラワーグリーン・園芸用品、アート、ステーショナリー、キッチンウェア＆ユーテンシル、カットラリー＆ツール、フロア＆バスまわり、ペットグッズ、アウトドア用品、スポーツ＆プレイング・グッズ（遊戯グッズ）、観光物産品、福祉・介護用品、防災・非常用品、小売店向け販売支援・経営支援関連商品 ほか

■問合せ（事務局）／TEL：03-3843-9711

FAX：03-3843-9850 Mail：n-haga@giftshow.co.jp

■URL ／ https://www.giftshow.co.jp/tigs/life6/

## 日本のデザイン振興政策アーカイブ 5月30日より資料・文献類をWeb公開開始

（公財）日本デザイン振興会（東京都港区）は、戦後の日本が進めてきたデザイン行政と振興に関わる資料文献を、2019年5月30日より専用Webサイト『デザイン振興政策アーカイブ』を通じて公開している。同アーカイブは公立大学法人静岡文化芸術大学（静岡県浜松市）と日本デザイン振興会による連携プロジェクトとして 2018年から整備が進められてきたものであり、このたび第一段階が終了、確認できた資料文献約230件を一覧表として、特に重要度の高い約130件についての文献資料をPDF形式で収録・公開することとなった。文献は下記アーカイブより、「中小企業振興」「人材育成」「国際交流」等の振興の分野や、10年ごとの時代区分、さらにフリーワードを使って検索することが可能。デザイン振興政策の歴史を紹介する「デザイン振興のあゆみ」や、主要文献・事業について解説した「視点論点」などのコンテンツも充実している。今後も収集・整理が継続され、2020年春を目途に新たに約200件の公開が予定されている。

■アーカイブ／ https://design-archives.jp/

■問合せ（（公財）日本デザイン振興会）／

TEL：03-6743-3776 Mail：info@jidp.or.jp

■URL／https://www.jidp.or.jp/

## 【講義】「日比谷公園第一花壇で学ぶ日本の園芸・日本の育種」「日比谷公園第一花壇のギボウシ」



2018年春にリニューアルされた日比谷公園の第一花壇は、日本を代表する育種家が作った植物と日本伝統の薬物などで構成されている。本年は5月より、植栽設計を担当した奥峰子氏による講習会が実施されており、7月には夏の花壇で大きな存在感を誇るギボウシについての講義が行われる（主催：（公社）園芸文化協会）。ギボウシの品種や栽培、管理手法から、夏の花壇の管理についてのノウハウを座学で学び、その後花殻摘みや除草などの実習が予定されている。（グリーンアドバイザー「GA園芸 CPD制度」ポイント対象講座）

■会場／日比谷図書文化館4F スタジオプラス（小ホール）

■開催日時／ 2019年7月17日（水） 13:30～16:00

■講師／奥 峰子（（公社）園芸文化協会 常務理事）

■定員／30名（先着順で受付・要事前申込）

■参加費／2,500 円（申込方法は下記URL 参照）

■申込・問合せ／（公社）園芸文化協会

所在地／東京都文京区本郷1-20-7 安藤ビル202号室

TEL：03-5803-6340（平日10:00～17:00）

FAX：03-5803-6341 Mail：enbun@soleil.ocn.ne.jp

■ URL ／ http://www.engeibunka.or.jp

# Products
プロダクト

暑い日の遊具エリアの安全性を向上させる

### 熱中症対策設備『熱中見守り対』




左／表示ユニット
右／測定ユニット

猛暑日が当たり前のように続く昨今の日本の夏であるが、それでも屋外で身体を動かして遊びたくなるのが子供の性である。内田工業が提案する『熱中見守り対』は、気温を測る「測定ユニット」と、暑さ指数（WBGT）を見える化して伝える「表示ユニット」の２つが無線または有線でつながり、熱中症の危険度を子供にもわかりやすく且つ親しみやすい表示で告知する遊び場用の熱中症対策プロダクツである。一般的な測定装置と異なり、子供の高さに測定センサーを設置し、子供目線での暑さ・危険度を算出できる点が大きな特徴。これは車椅子利用者にとっても嬉しいポイントであろう。公園や遊び場にマッチする、ポップなデザインも魅力だ。

**内田工業株式会社**
Tel.052-352-1811　Fax.052-351-1326
Http://www.uil.co.jp/

空きスペースを花で彩りたい時のために

### 実咲®シリーズ　景観用ボリュームパック




**種類**／ネモフィラ、レンゲ、菜の花、そばのはな
**内容量(1袋)**／ネモフィラ・レンゲ=約3㎡分、菜の花・そばのはな=約5㎡分
**発売開始**／ 2019年 7月上旬以降　　**希望小売価格**／300円(税別)

サカタのタネが提供する草花・野菜・ハーブ類の統一絵袋ブランド『実咲（みさき）』シリーズより、容量がアップしてより広い面積に対応できる景観用ボリュームパックが４種類ラインナップに加わる。家庭園芸用パックではあるが、公園や公共のオープンスペースなどでもグランドカバーとして活躍できる植物であり、隙間ができて殺風景になりがちな街中の花壇などを爽やかに彩ってくれることだろう。比較的育てやすいのも大きなメリットであり、手軽に“お花畑”を創出できる逸品といえる。全国の種苗店や園芸店、ホームセンター、サカタのタネ ガーデンセンター横浜で間もなく発売開始となる。

**株式会社サカタのタネ**
Tel.045-945-8804（花統括部）
https://sakataseed.co.jp

真夏の屋外を快適にする、ダイキンの屋外用エアコン

### アウタータワー





風量／最大毎分28.8㎥　価格／オープン価格

野外フェスなどのイベントやカフェテラスなど、何かと屋外に出る機会も多くなる夏。その一方で、近年の猛暑日の連続は日本全国での深刻な問題となっている。ダイキンの屋外用エアコン アウタータワーは、本体から前後左右４方に向かい、約 3m 先まで冷風を届けることが可能。屋外にクールスポットを設けることができる。一般的なエアコンにおける室外機と室内機が一体となった構造をしており、冷媒配管工事が不要なので設置が簡単かつ置き場所を選ばないのもメリット。公園・広場等での屋外空間での催しでは、とりわけ活躍が期待される。

**ダイキン工業㈱**
Tel：0120-88-1081（コンタクトセンター）
URL：https://www.daikin.co.jp/

STAND BY HOME 初の
和モダンシリーズの家

### LOWAS（ロワス）



内観イメージ



**カラー**／ WHITE× BROWN、BLACK× BROWN、GREEN× OLIVE
**サイズ**／ 1F床面積 86.36㎡(26.12坪)、2F床面積 49.49㎡(14.97坪)、
延床面積 135.85㎡(41.09坪)、ウッドデッキ 13.24㎡(4.00坪)

シンプルかつ飽きのこないデザインと住み心地の良さで人気の平屋ブランド「STAND BY HOME（スタンドバイホーム）」より、このたび初の和モダンテイストハウス「LOWAS（ロワス）」シリーズが発売された。まず目につくのが、古民家を連想させる静かで趣のある風情と、無垢材のぬくもりと優しさを合わせたファサード。地元木材を活用しているほか、大屋根とウッドデッキに設けた下屋が夏の日差しを遮り、冬の緩やかな陽光を取り入れることで快適な暮らしを保つ。内観にも和テイストをふんだんに採用し、地域環境に配慮しつつ末永く暮らせる環境を実現している。

**㈱タカカツ建材**
Tel：0120-956-403（スタンドバイパートナーズ本部）
URL：http://standbyhome.jp

# Books
ブック

## 太田喜二郎と藤井厚二　日本の光を追い求めた画家と建築家

目黒区美術館・京都文化博物館 著　青幻舎 発行
B5変型判・148頁　定価：2,700円（税込）




本書は、目黒区美術館と京都文化博物館において、4～9月に巡回・開催される「太田喜二郎と藤井厚二」展の公式図録兼書籍である。近代京都の洋画界で活躍した画家 太田喜二郎と、近代建築界をリードした建築家 藤井厚二。絵画と建築という全く異なるジャンルであるが、この2人は京都で密接な文化的交流を交わし、互いに刺激し合う関係であった。1924年には藤井の設計した太田邸が竣工しており、藤井が生涯で手掛けたアトリエはこの1軒のみだったと言われている。本書では、明治以降の近代化の進む京都を生きた2人のクリエイターに焦点を当て、豊富な作品写真や図面等を軸としてその制作人生を追いかけている。純粋に近代の作品集としても楽しめるし、互いの影響を受けた面や現代作家の作品との相違点を探してみるのもいいだろう。前述の太田邸アトリエも10P以上にわたって掲載され、内外観共に写真・図面・模型等を交えて詳しく解説されている。

## 「春の小川」はなぜ消えたか　渋谷川にみる都市河川の歴史




田原 光泰　著　㈱之潮　発行
B6判・226P　定価：1,944円（税込）

誰もが一度は耳にしたことのある文部省唱歌「春の小川」。その舞台ではないかと推察されているのが、渋谷区の中心街を流れる渋谷川であることはあまり知られていない。ただ、歌が生まれた100年以上前と同様のスミレが咲きメダカの泳ぐような往時の川の姿は、現在の渋谷川からは失われてしまっている。本書は、近代化に伴いその都度姿を変えていった渋谷川を中心に、都市部を流れる中小河川の歴史や利用の形などを追究していく、都市の小川の研究書籍といえるだろう。時にその存在にすら気づかず過ごしてしまう街中の「小川」であるが、より人の生活環境に近いからこそ、暮らしの変化に翻弄され、小川もまた姿形を変えざるを得なかった背景がよくわかる。また、本書は2部構成で、第2部では実際に渋谷川流域を歩きながら、より詳しい歴史や今の街の姿などを辿る内容となっている。巻末には付録として、渋谷川とその支流の地図がついているので、本書と共に携帯しつつ自ら流域を歩いてみるのも面白いであろう。

## 葉っぱはなぜこんな形なのか？　植物の生きる戦略と森の生態系を考える

林 将之　著　講談社　発行
19cm・211頁　定価：1,512円（税込）




日頃街中を歩いていて見かける街路樹や灌木の葉を見ていると、その色や形の多様さに驚かされることも多いであろう。郊外の自然地に足を運べば、なおさらそれを実感するはずだ。丸い形の葉に、切れ込みのある葉、あるいは秋に真っ赤に染まる葉……例を挙げればキリがないが、では植物の葉はどのような理由でそんな形に進化したのか？ これは図鑑などにも滅多に記されていないことである。本書は、樹木図鑑の作家であり、同時に樹木鑑定サイト『このきなんのき』主宰でもある著者が、自らの実体験を元に葉の進化の謎とおもしろさを探究し、植物が長年かけて培ってきた“生きる戦略”の謎を紐解く1冊である。同時に、多くの課題を抱える日本の森・自然について、ランドスケープの世界の人間とはまた違う“樹木の専門家”の視点から考察し、見解を述べている点もポイントであろう。お楽しみコンテンツとして、花や葉を用いた心理テストのページも掲載。読了後には、身近で毎日見かける何気ない植物にも興味・愛着が湧くかもしれない。

# LANDSCAPE DESIGN バックナンバーのご案内

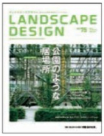
売り切れ No.1-4 No.6-8 No.20 No.23-24 No.41 No.48 No.60-61 No.65 No.75 No.84 No.91-92 No.97 No.103 No.106 No.108



No.73［2010年8月号］
自立できる地域を目指す
小さな町のまちづくり



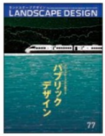
No.74［2010年10月号］
生きものと共につくる
生物多様性の開発デザイン



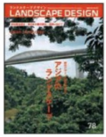
No.75［2010年12月号］
これからの都市デザインに求められる
公園のような居場所
（完売）



No.76［2011年2月号］
新しい都市のイメージをつくり出す
都市緑化とリノベーション



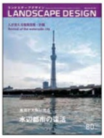
No.77［2011年4月号］
ランドスケープから捉える
パブリックデザイン



No.78［2011年6月号］
都市デザインの最前線を追う
アジアのランドスケープ



No.79［2011年8月号］
街と鉄道をつなぐ
駅のランドスケープ



No.80［2011年10月号］
東京と大阪に見る
水辺都市の復活



No.81［2011年12月号］
安全で心地よい
公園のランドスケープ



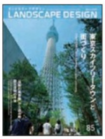
No.82［2012年2月号］
ランドスケープワークス 2011



No.83［2012年4月号］
特別養護老人ホームの
「新しい風景」を求めて



No.84［2012年6月号］
緑とオープンスペースの価値
（完売）



No.85［2012年8月号］
東京スカイツリータウン®と
街づくり



No.86［2012年10月号］
緑の風がふきぬける
美しい東京の公園へ



No.87［2012年12月号］
団地再生とシティスケープ・
デザイン



No.88［2013年2月号］
ランドスケープワークス 2012



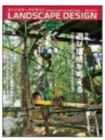
No.89［2013年4月号］
第29回全国都市緑化フェア
TOKYO REPORT



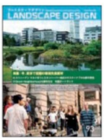
No.90［2013年6月号］
街をリノベーションする



No.91［2013年8月号］
公園をもっと楽しく
（完売）



No.92［2013年10月号］
遊び環境を考える
（完売）



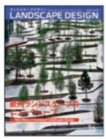
No.93［2013年12月号］
今、欧米で話題の
環境先進都市



No.94［2014年2月号］
ランドスケープワークス 2013



No.95［2014年4月号］
大阪にセントラルパークを！



No.96［2014年6月号］
欧州ランドスケープの
ニューウェーブ



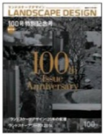

**No.97［2014 年 8 月号］**
**人と都市を繋ぐ緑のランドスケープ**
**定価 1,995 円（完売）**
特集 晴海アイランドトリトンスクエア 植栽管理が育む 14 年目の緑の景、ブラウドシティ浦和、服部緑地 ほか［インタビュー］谷本良平（晴海コーポレーション代表）Works 東急ハーヴェストクラブ熱海伊豆山／ランドスケープデザイン、ワテラス / 千代田区立淡路公園／ GA ヤマザキ等 他 連載 淵上正幸の建築・ランドスケープの旅、東日本大震災復興REPORT 、発想考楽のすすめ 他



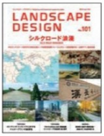

**No.98［2014 年 10 月号］**
**地域に開かれた キャンパスランドスケープ**
**定価 1,995 円**
特集 愛知学院大学名城公園キャンパスのランドスケープ、立命館大学 3 つのキャンパスプラン、［対談］「森の幼稚園」の建築とランドスケープ 新潟青陵学園幼稚園の計画提案をめぐって他 Works ヤンマーマリーナホテル／セトレマリーナ琵琶湖／芦澤竜一＋稲田純一他



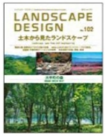

**No.99［2014 年 12 月号］**
**コンパクトシティとまちづくり**
**定価 1,995 円**
特集 柏の葉キャンパスシティ ランドスケープ、コンパクトなまちづくり（富山県富山市）、つるおかランド・バンク事業、サインが支える観光のまちづくり、世界海洋村構想 他 Works 漢南ザ・ヒル／佐々木葉二＋鳳コンサルタント環境デザイン研究所、あさひかわ北彩都ガーデン／まちなかのオアシス・リゾート／高野ランドスケーププランニング、緑花計 他 More［書評］風景とローカルガバナンス 他



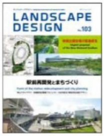

**No.100［2015 年 2 月号］**
**『ランドスケープデザイン』20年の変遷**
**定価 1,995 円**
特集『ランドスケープデザイン』のテーマを括るキーワード Works(ランドスケープワークス 2014) 佐久総合病院 佐久医療センター／神田万世橋プロジェクト／飯田橋駅西口地区 第一種市街地再開発事業／伊豆高原の家／新幸橋ビルディング前庭広場 リフレッシュ整備／プトラジャヤ植物園 他 More 話題のランドスケーププロダクツ




**No.101［2015 年 4 月号］**
**シルクロード浪漫**
**定価 1,995 円**
特集 中日ランドスケープ合作の方向性を探る、中国青島国際フォーラム 2014、甘粛省蘭州市、広西チワン族自治区 他 Works 東京駅八重洲口駅前広場「緑の雲」と「光の帆」／日建設計・ジェイアール東日本コンサルタンツ(株)、創価大学中央教育棟／日建設計・MLS・景観設計・東京 他 More 世界屋上緑化会議 名古屋大会 2015、ランドスケープデザイン100号記念感謝交流会 他



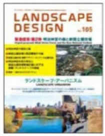

**No.102［2015 年 6 月号］**
**土木から見たランドスケープ**
**定価 1,995 円**
特集 1 譬団公園、通潤用水下井出水路の改修、［座談会］土木から見たランドスケープの可能性、造園家 伊藤邦衛がつくる土木の風景、高速道路の造園・景観・環境 特集 2 大手町の森 Works 箱根山テラス／オンサイト計画設計事務所、札幌市北 3 上広場／日本設計、Okazaki Villa ／植彌加藤造園 More SEGES ／社会・環境貢献緑地評価システム 他




**No.103［2015 年 8 月号］**
**駅前再開発とまちづくり**
**定価 1,995 円（完売）**
新国立競技場の緊急提言 神宮外苑の環境と新国立競技場の調和と向上に関する提言／日本学術会議環境学委員会 都市と自然と環境分科会 特集 狭山スカイテラス、草薙駅周辺整備プロジェクト、日向市駅及び駅前周辺地区デザイン 他 Works さかさ川通りの再整備／蒲田再開発推進委員会、えびの涼風園／ソラ・アソシエイツ 他 More 日比谷ランドスケープデザイン展 2015 他




**No.104［2015 年 10 月号］**
**まちを快適にする緑化マネジメント**
**定価 1,995 円**
特別報告 新たな修景思想への誘い／ジル・クレマン連続講演会、現代フレンチ・ランドスケープの一断面 ジル・クレマンの庭と公園 特集 としまエコミューゼタウン／㈱ランドスケーププラス、OHANA ／㈱長谷工コーポレーション 他 Works おとめ山公園拡張整備計画・設計／石川幹子＋㈱東京ランドスケープ研究所 他 More TOKYO GREEN 2020 FORUM 2nd Round 他



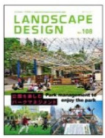

**No.105［2015 年 12 月号］**
**ランドスケープ・アーバニズム**
**定価 1,995 円**
緊急提言第 2 弾 明治神宮の森と新国立競技場 新国立競技場と周辺環境の今後／森本智之 、ランドスケープ・アーバニズムその本質と日本における可能性、風土自治圏を育む／中村良夫 他 Works 玉川大学／久米設計、八海山雪室／ランドスケープデザイン、奈良の庭／荒木造園設計 More 新山口駅に「垂直の庭」、完成／山口市 ターミナルパーク整備部




**No.106［2016 年 2 月号］**
**ランドスケープワークス 2015**
**定価 1,995 円（完売）**
特集 桜上水ガーデンズ／ランドスケープ・プラス、生長の家 赤坂／原宿“いのちの樹林”／フィールドフォー・デザインオフィス＋清水建設設計本部、ブラウドシティ新大阪／鳳コンサルタント環境デザイン研究所、TOYOSU22 グリーンクロスプロジェクト／日本設計＋オンサイト計画設計事務所他 MORE 自然から学ぶ―竹川清和さんの森づくり




**No.107［2016 年 4 月号］**
**震災復興のための「コミュニティ」づくり**
**定価 1,995 円**
特集 石巻・川の上プロジェクト、地域の種 市民の手で進める復興の森づくり、「三陸人つなぎ自然学校」の活動、プレーパーク てんぱくプレーパーク小屋再建プロジェクト、Works オムロンヘルスケア新本社／ランドスケープデザイン、茨木市岩倉町地区防災公園街区整備／ヘッズ大阪、Le Mont Fuji ／ Atelier kaba 他




**No.108［2016 年 6 月号］**
**公園を楽しむパークマネジメント**
**定価 1,995 円（完売）**
特集 東京のパークマネジメント、NPO 法人ハマのトウダイ パークキャラバン、朝霞の森、氷見 朝日山公園、都心の公園の育て方、地域に開かれた東高根森林公園、尼崎の森中央緑地、椿森コムナに見る、賑わう広場づくりのスタイル、NPO 法人プレーパークせたがや他 Works 太田公園／景観設計室タブラ・ラサ、ペンブローク麻布ガーデンズ／庄島設計室他



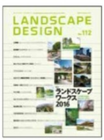

**No.109［2016 年 8 月号］**
**都市がいきる「パブリックスペース」の活用**
**定価 1,995 円**
特集［対談］都市に効く「パブリックスペース」とは忽那裕樹×馬場正尊、水都大阪の取組み、木津川遊歩道空間整備事業他 釜石東部地区 津波復興拠点整備事業フロントプロジェクト 1 Works 深圳漢京九棺台プロジェクト／戸田芳樹風景計画、クレディ アグリコール銀行本社のランドスケープ／ Takano Landscape Plannning+Atelier Kaba 他



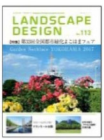

**No.110［2016 年 10 月号］**
**市民が主役のまちづくり**
**定価 1,995 円**
特集 左近山団地再生プロジェクト／ STGK inc.、太陽ローズガーデン他、震災復興 ナミイタ・ラボ他 設景／小林治人（㈱東京ランドスケープ研究所）Works 神田錦町テラススクエア／ N.L.A ＋日建設計、とおり町 Street Garden ／ UID More 長崎「巡礼の道」ランドスケープ／五島聖子（長崎大学環境科学部教授）他




**No.111［2016 年 12 月号］**
**子どもの遊び場って何?**
**定価 1,995 円**
特集1 子どもの遊び場とは／熊尾重治、ボーネルンド プレイヴィル 天王寺公園他 特集2 その場に生まれる様々な関係を「光り」でつなぐ／富田泰行、画家が絵の具を扱うように「光り」を扱う／小野田行雄他 Works Brillia 狛江 Farm&Gardens ／タカ・グリーン・フィールズ他 More アスリート・観客に優しい道づくりに向けた提言／国土交通省道路局他




**No.112［2017 年 2 月号］**
**ランドスケープワークス 2016**
**定価 1,995 円**
特集 品川シーズンテラス ノースガーデンとサウスガーデン／大成建設、東京ガーデンテラス紀尾井町／設計組織プレイスメディア、EXPOCITY ／鳳コンサルタント環境デザイン研究所、東急プラザ銀座 キリコテラス・数寄屋橋公園／日建設計＋石勝エクステリア、伊勢志摩サミット 国際メディアセンター アネックスの庭／西田正徳ランドスケープ・デザイン・アトリエ他




**No.113［2017 年 4 月号］**
**第33回全国都市緑化横浜フェア**
**定価 1,995 円**
特集 第 33 回全国都市緑化横浜フェア、みなとガーデン会場、里山ガーデン会場 Works グランモール公園／三菱地所設計、マリン アンド ウォーク ヨコハマ／アール・アイ・エー東京支社、鹿島建設横浜支店、ランドスケープデザイン More（対談）20 年を経た「アクロス福岡」天神の森／エイ・エフ・ビル管理、内山緑地建設、京都ランドスケープデザイン展他




**No.114［2017 年 6 月号］**
**オープンスペースとしての街路・街路樹**
**定価 1,995 円**
特集 2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けた街路樹の樹冠拡大／藤井英二郎、丸の内仲通り、江戸川区の街路樹行政、社会実験から見える街路の活用、桜を巡る東北の人々と復興の今／桜野良充他 Works 東根市公益文化施設 まなびあテラス／山下設計＋ソラアソシエイツ、明石の庭／荒木造園設計他




**No.115［2017年8月号］**
### 公園をもっと使おう！
**定価 1,995円**
特集「公園」を使い倒す／町田誠、井の頭公園アートマーケッツ、民間参入を、公園の魅力アップにつなげる公益還元システムの構築／東京都公園協会、みまもりの家／清水靖枝他、新連載 小口健蔵が行く。パークマネジメントの最前線!他 Works 深川ギャザリア／グラック他 More「僕の作品の素材は社会です。」殿敷侃他




**No.116［2017年10月号］**
### 第33回全国都市緑化横浜フェアが残したもの
**定価 1,995円**
特集［寄稿］横浜市長林文子／第33回全国都市緑化よこはまフェアを振り返って、第33回全国都市緑化よこはまフェアがめざすもの／白砂伸夫、Garden Necklace YOKOHAMA2017、第34回全国都市緑化はちおうじフェア他 Works 福徳の森／日本設計＋榊原八朗他

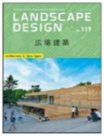



**No.117［2017年12月号］**
### グリーンインフラ
**定価 1,995円**
特集［インタビュー］涌井雅之 グリーンインフラについて話そう、ホトリア広場／三菱地所設計、［対談］グリーンインフラを語ることはランドスケープアーキテクトの職能を語ること、エネルギーの自給自足を実現し、地域の新たなコミュニティの場をつくる他、Works MAJES MOTO-AZABU 他 GARDENS／戸田芳樹風景計画 More PIOTR KOWALSKI 風人他

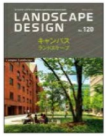
---




**No.118［2018年2月号］**
### ランドスケープワークス 2017
**定価 1,995円**
巻頭特集【座談会】サカタのタネ本社ビル22年の緑化技術を振り返って 特集 左近山みんなのにわ／STGK、上野動物園弁天門・子ども動物園すてっぷ／景デザイン研究所、天王寺公園エントランスエリア"てんしば"／ヒュマス+竹中工務店、GINZA SIX GARDEN／設計組織プレイスメディア、京都グランベルホテル／ソラ・アソシエイツ、コーナン港北インター店園芸館「Gardens」／グランツ他

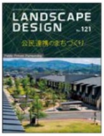



**No.119［2018年4月号］**
### 広場建築
**定価 1,995円**
巻頭特集 日比谷パークフロント／ランドスケープデザイン 特集 名城公園 tonarino／マウントフジアーキテクツスタジオ、天理駅前広場 CoFuFun／デザインオフィス nendo、YOSHI PAVILLION／芦澤竜一＋永井拓生＋松岡拓公雄＋滋賀県立大学（芦澤竜一研究室+永井拓生研究室）他 Works 相山女学園大学附属幼稚園・保育園／環境デザイン研究所他

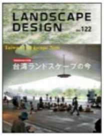



**No.120［2018年6月号］**
### キャンパスランドスケープ
**定価 1,995円**
巻頭特集 太倉裕泌庭／積水ハウス，坂倉建築研究所＋設計組織 PLACEMEDIA 特集 近畿大学東大阪キャンパス西門広場／E-DESIGN, NTT ファシリティーズ、愛媛大学城北キャンパス／／白砂伸夫+ARTFUSION、実践女子大学日野キャンパス／STGK Inc.、［インタビュー］仙田満 大学キャンパスはみんなでつくる Works リヴァージュの庭／佐々木葉二他

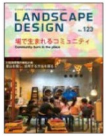
---




**No.121［2018年8月号］**
### 公民連携のまちづくり
**定価 1,995円**
巻頭インタビュー 木下斉（エリア・イノベーション・アライアンス代表理事）：公民連携事業は地方の「自治意識」を変えられるか、オガールプロジェクト，オガール広場、なつかしさのあたらしさをつくる、公園がまちを変える一宮塚公園他　Works 赤坂インターシティ AIR／日本設計他 More 木材資源革命／塩田政利（ニッコー代表取締役）他




**No.122［2018年10月号］**
### 台湾ランドスケープの今
**定価 1,995円**
CLOSE-UP 衛武営国家芸術文化中心／メカノー 巻頭インタビュー 台湾のランドスケープ事情と政治の関係／石村敏哉、特集 冬山河森林公園 生態緑舟／高野ランドスケープ・プランニング㈱台湾支店、宜蘭のまちづくり 田中央工作群＋黄聲遠による「維管束」活動、大安森林公園他 Works オオソラモ野田みずき／拓匠開発、シロアナ＋ウイン他




**No.123［2018年12月号］**
### 場で生まれるコミュニティ
**定価 1,995円**
CLOSE-UP［座談会］川和保育園移転計画 里山を残し、活用する方法を探る 特集 ajirochaya から人と街の新しいつながり方を考える／三島由樹（フォルク）、地域を醸す／油原祐貴（EDGE HAUS）、コミュニティは煙が立つように生まれるもの／田中元子（グランドレベル）他 More フォーシーズンズホテル京都／ランドスケープデザイン他

---

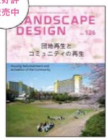



**No.124［2019年2月号］**
### ランドスケープワークス 2018
**定価 1,995円**
巻頭特集 山口ゆめ花博 第35回全国都市緑化やまぐちフェア：花の谷ゾーンのフラワー・ランドスケープ／槙島みどり、庭のパビリオンゾーン 特集 ダブルツリー by ヒルトン沖縄北谷リゾート／光井純アンドアソシエーツ建築設計事務所、水郷佐原あやめパーク／グラック、さくら認定こども園さくら幼稚園／コト葉LAB.、パッシブタウン／設計組織プレイスメディア他




**No.125［2019年4月号］**
### 街をつなぐ再開発
**定価 1,995円**
CLOSE-UP 川口市立高等学校／久米設計＋ソラ・アソシエイツ 特集 東京ミッドタウン日比谷／ホプキンス・アーキテクツ、日建設計、鹿島建設、目黒花房山ランドスケープ／大成建設、ザ・ガーデンズ東京王子／長谷工コーポレーション Works 箱根小涌園 天悠／日本設計、ナチュの森／高野ランドスケーププランニング他

大好評
発売中




**No.126［2019年6月号］**
### 団地再生とコミュニティの再生
**定価 1,995円**
特集 夢の団地—その続き／猪股篤雄（神奈川住宅供給公社理事長。）、第15回団地再生シンポジュウム報告 サステナブルなまちづくり"エリア活性化"の"広域での安定"、緑で再生する団地再生コミュニティ／東邦レオ他 Works 幸田みやこ認定こども園／オットーデザイン、コトニアガーデン新川崎／エスエフジー・ランドスケープ・アーキテクツ他

---

# LANDSCAPE DESIGN 定期購読

定期購読のご案内

**年間定期購読料（6冊） 11,000円（税込）**

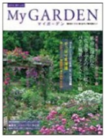
### ここがお得! 定期購読

1. 割引価格でご提供いたします
   定期購読なら1冊あたりの単価は1,833円。
   年間で970円お得です。
2. 送料無料で、ご希望の住所までお届けいたします
   定期購読中は発売日に合わせ、弊社より雑誌をお送りします。
   もちろん送料は無料です。

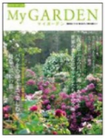


★お申し込みは巻末の郵便局の振込用紙にてご入金ください。
★購読満了の際にはご案内いたします。
★銀行振込をご利用の方は、ご一報いただいた上、右記口座へお振込ください。　三菱UFJ銀行 渋谷中央支店（普）5294495 株式会社マルモ出版
★問合せ／㈱マルモ出版（担当：一ノ瀬）　〒150-0036 東京都渋谷区南平台町4-8 南平台アジアマンション708　TEL.03-3496-7046　FAX.03-3496-7387

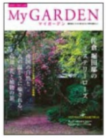
# MyGARDEN
## バックナンバーのご案内



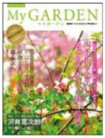
**No.83**（2017 年 6 月発売）
**やっぱり北海道!!**
定価 1,200 円
●里山に抱かれた「佐倉草ぶえの丘」に咲くバラと風景（ランドスケープ）の魅力／前原克彦●やっぱり北海道!!●東京、バラとともに歩む街●第 33 回全国都市緑化よこはまフェア日本大通りフラワーフェスタ●第 19 回国際バラとガーデニングショウほか



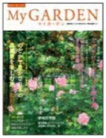
**No.84**（2017 年 9 月発売）
**バラを心ゆくまで楽しむ岐阜・浜松の旅**
定価 1,200 円
●ルベールコレクション―❶ 失われつつあるバラを守るルベール家のバラ物語●「佐倉草ぶえの丘バラ園」のあゆみと世界の著名なロザリアンたちとの交流●バラを心ゆくまで楽しむ岐阜・浜松の旅●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか



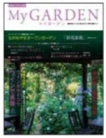
**No.85**（2017 年 12 月発売）
**南国の自然と人の温かさに癒される。高知・花と植物の旅。**
定価 1,200 円
●佐倉堀田邸のミステリーローズ●ルベールコレクション―❷ 失われつつあるバラを守るルベール家のバラ物語●南国の自然と人の温かさに癒される。高知・花と植物の旅。●クリスマスローズをお庭で楽しむ●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか



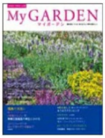
**No.86**（2018 年 3 月発売）
**いにしえより続く植物と共にある暮らしを探る旅へ～京都・奈良～**
定価 1,200 円
●四季折々に美しい草ぶえの丘バラ園の風景●ルベールコレクション―❸ 失われつつあるバラを守るルベール家のバラ物語●明治・大正・昭和を生きた陶工 河井寛次郎 ～その暮らしと庭と～●いにしえより続く植物と共にある暮らしを探る旅へ～京都・奈良～●第 2 回バラ管理ネットワーク会議ほか



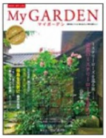
**No.87**（2018 年 6 月発売）
**のどかで豊かな日本の農風景を楽しむ旅～福島～**
定価 1,200 円
●山口・津和野・宇部 ミステリーローズを探す旅／白砂伸夫、国司淑子●のどかで豊かな日本の農風景を楽しむ旅～福島県～●赤城自然園 森の妖精レンゲショウマと深き緑に抱かれる、夏●【第 20 回】国際バラとガーデニングショウ●深町貴子流 ハーブを使って眺めるだけじゃない植物の楽しみ方ほか



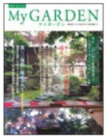
**No.88**（2018 年 9 月発売）
**ながれやまオープンガーデン**
定価 1,200 円
●ながれやまオープンガーデン●日本の美意識を体現し世界に発信する「わばら」●バラの愛らしさに気づく瞬間 後藤みどりさんが提案するバラの楽しみ●ルベールコレクション 最終回 失われつつあるバラを守るルベール家のバラ物語●福島を元気に❶かわうちワインツーリズム●彩花盆栽／清香園●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか



**No.89**（2018 年 12 月発売）
**山口ゆめ花博 花の谷ゾーンのカラープランニング**
定価 1,200 円
●山口ゆめ花博 花の谷ゾーンのカラープランニング／横島みどり●福島を元気に❷フルーツファームカトウ●ウインターガーデンにあこがれて●コペンハーゲンのローズガーデンを訪ねて／白砂伸夫●山梨県 駅前広場のローズガーデン 石和温泉／甲府●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか



**No.90**（2019 年 3 月発売）
**京都のミステリーローズを求めて**
定価 1,200 円
●【特別寄稿】藻谷浩介　福島の食に寄せて●福島を元気に❸鈴木農場●バラと宿根草の華麗なマリアージュ／ル・ジャルダン・サクレ「秘密の花園」●京都のミステリーローズを求めて／白砂伸夫●北海道いわみざわ公園のバラづくり●銀座・天空の庭で色香に包まれ安らぐひと時を／ファンケル 銀座スクエアほか



**No.91**（2019 年 6 月発売）
**ガーデンシティ横浜を巡る**
定価 1,200 円
●美しい福島に魅せられて❹尾瀬檜枝岐村●ガーデンシティ横浜を巡る●ジャパン・ガーデンツーリズム キックオフイベント●ミステリーローズを巡る旅 2　村上・「にいがた庭園街道」にミステリーローズを求めて・前編／白砂伸夫●庭ぐらし　個人宅の庭を訪ねガーデンライフをのぞいてみました ほか

## 定期購読のご案内

### MyGARDEN 定期購読
季節ごとに届く年 4 冊。プレゼントにも最適です！



**年間定期購読料（4冊） 4,400 円（税込）**

**ここがお得! 定期購読**

1. 割引価格でご提供いたします
   定期購読なら1冊あたりの単価は1,100円。
   年間で400円お得です。
2. 送料無料で、ご希望の住所までお届けいたします
   定期購読中は発売日に合わせ、弊社より雑誌をお送りします。
   もちろん送料は無料です。

★お申し込みは巻末の郵便局の振込用紙にてご入金ください。
★購読満了の際にはご案内いたします。※中止の場合はご連絡くださいますようお願いします。
★銀行振込をご利用の方は、ご一報いただいた上、右記口座へお振込ください。　三菱 UFJ 銀行 渋谷中央支店（普）5294495 株式会社マルモ出版
★問合せ／㈱マルモ出版（担当：一ノ瀬）　〒150-0036 東京都渋谷区南平台町 4-8 南平台アジアマンション 708　TEL.03-3496-7046　FAX.03-3496-7387

# NEXT ISSUE No.128
# LANDSCAPE DESIGN

次号128号は
2019年8月23日発売予定



## 特集 暑さ対策

日本の夏の暑さは年々その厳しさを増している。行政も暑さを和らげる対策を実施してはいるものの、まだまだ個人対応を求めているところが大きい。次号では企業が開発する暑さ対策の技術や製品を通して、ランドスケープにおけるその効果の可能性を探ってみたい。

●内容が変更になる場合がございますのであらかじめご了承下さい。

## 『ランドスケープデザイン』主要取扱書店

下記の書店でご支援を得て常備しておりますのでご利用下さい。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 北海道 | 旭川市 | ジュンク堂 旭川店 | ☎0166-26-1120 |
| | 札幌市 | 紀伊国屋 札幌本店 | ☎011-231-2131 |
| | 札幌市 | MARUZEN&ジュンク堂 札幌店 | ☎011-223-1911 |
| 青森県 | 弘前市 | ジュンク堂 弘前中三店 | ☎0172-34-3131 |
| 岩手県 | 盛岡市 | ジュンク堂 盛岡店 | ☎019-601-6161 |
| 宮城県 | 仙台市 | ジュンク堂 仙台TR店 | ☎022-265-5656 |
| 福島県 | 郡山市 | ジュンク堂 郡山店 | ☎024-927-0440 |
| 埼玉県 | さいたま市 | ジュンク堂 大宮高島屋店 | ☎048-640-3111 |
| 千葉県 | 習志野市 | 丸善 津田沼店 | ☎047-470-8311 |
| 東京都 | 豊島区 | ジュンク堂 池袋本店 | ☎03-5956-6111 |
| | 千代田区 | 三省堂 神田本店 | ☎03-3233-3312 |
| | 千代田区 | 丸善 丸の内本店 | ☎03-5288-8881 |
| | 千代田区 | 南洋堂書店 | ☎03-3291-1338 |
| | 新宿区 | ブックファースト 新宿店 | ☎03-5339-7611 |
| | 新宿区 | 紀伊国屋 新宿本店 | ☎03-3354-0131 |
| | 新宿区 | 工学院大学生協 書籍部新宿店 | ☎03-3342-1673 |
| | 渋谷区 | MARUZEN&ジュンク堂 渋谷店 | ☎03-5456-2111 |
| | 渋谷区 | 代官山 蔦屋書店 | ☎03-3770-2525 |
| | 中央区 | 八重洲ブックセンター | ☎03-3281-1811 |
| | 世田谷区 | 東京農業大学 生協 | ☎03-3427-5711 |
| | 世田谷区 | 村田永楽園 | ☎03-3483-2166 |
| | 品川区 | さくま書店 | ☎03-3472-4353 |
| | 武蔵野市 | ジュンク堂 吉祥寺店 | ☎0422-28-5333 |
| | 八王子市 | kikki+(キッキプラス) | ☎042-686-0317 |
| 神奈川県 | 横浜市 | 有隣堂 ルミネ横浜店 | ☎045-453-0811 |
| | 横浜市 | 紀伊国屋 横浜店 | ☎045-450-5901 |
| | 川崎市 | 丸善 ラゾーナ川崎店 | ☎044-520-1869 |
| | 相模原市 | 中村書店 本店 | ☎042-750-2285 |
| 新潟県 | 新潟市 | ジュンク堂 新潟店 | ☎025-374-4411 |
| 富山県 | 富山市 | BOOKS なかだ本店 | ☎076-492-1192 |
| 愛知県 | 名古屋市 | 三省堂 名古屋高島屋店 | ☎052-566-8877 |
| | 名古屋市 | ジュンク堂 名古屋店 | ☎052-589-6321 |
| | 名古屋市 | ジュンク堂 ロフト名古屋店 | ☎052-249-5592 |
| 京都府 | 京都市 | ジュンク堂 京都店 | ☎075-252-0101 |
| | 京都市 | ブックファースト 四条大宮店 | ☎075-803-4819 |
| | 京都市 | 桂書房 | ☎075-381-5094 |
| | 京都市 | 大龍堂書店 | ☎075-231-3036 |
| | 京都市 | 京都造形芸術大学 ADストア | ☎075-711-9297 |
| 大阪府 | 大阪市 | 柏菱商事 | ☎06-6252-5250 |
| | 大阪市 | ジュンク堂 大阪本店 | ☎06-4799-1090 |
| | 大阪市 | ブックファースト 梅田店 | ☎06-4796-7188 |
| | 大阪市 | 紀伊国屋 梅田本店 | ☎06-6372-5821 |
| | 大阪市 | MARUZEN&ジュンク堂 梅田店 | ☎06-6292-7383 |
| | 大阪市 | 柳々堂書店 | ☎06-6443-0167 |
| | 大阪市 | ジュンク堂 難波店 | ☎06-4396-4771 |
| 兵庫県 | 神戸市 | ジュンク堂 三宮店 | ☎078-392-1001 |
| | 西宮市 | ジュンク堂 西宮店 | ☎0798-68-6300 |
| | 芦屋市 | ジュンク堂 芦屋店 | ☎0797-31-7440 |
| 広島県 | 広島市 | 丸善 広島店 | ☎082-504-6210 |
| | 広島市 | ジュンク堂 広島駅前店 | ☎082-568-3000 |
| | 広島市 | 井上書店 | ☎082-254-5252 |
| 愛媛県 | 松山市 | ジュンク堂 松山店 | ☎089-915-0075 |
| 福岡県 | 福岡市 | ジュンク堂 福岡店 | ☎092-738-3322 |
| | 福岡市 | GEN 建築・芸術書房 | ☎092-524-2535 |
| | 福岡市 | 丸善 博多店 | ☎092-413-5401 |
| | 福岡市 | 紀伊国屋 福岡店 | ☎092-434-3100 |
| 鹿児島県 | 鹿児島市 | ジュンク堂 鹿児島店 | ☎099-216-8838 |
| 沖縄県 | 那覇市 | ジュンク堂 那覇店 | ☎098-860-7175 |

## 【書店情報】紀伊國屋書店「天王寺ミオ店」がオープンしました




天王寺ミオは、天王寺ＳＣ開発株式会社が大阪府大阪市に店舗面積37,000㎡で展開する駅直結型の大型ショッピングセンターです。平台に高書架を用いず、店内を回遊するメイン導線を大きく引いていることが特徴。視認性も抜群です。店内中央エリアには物品販売・イベント等にも対応できる特別什器を用いたコミュニティスペースを設けています。

【店舗面積】504.07坪　【営業品目】書籍、雑誌、文具、雑貨
【所在地】大阪府大阪市天王寺区悲田院町10-39　天王寺ミオ　本館9F
【営業時間】11:00～21:00　【Tel】06-6776-7091
【URL】https://store.tsite.jp/shonan/
【Facebook】https://www.facebook.com/shonantsite




# 品切れたあの号も ワンタッチで読める

# LANDSCAPE DESIGN

## 携帯電話・タブレット 専用アプリを配信中！

印刷版より 50%OFF

価格／号 **960円**（税込）

**Google Play** または **Apple Store** より
ダウンロードいただけます（アプリのダウンロードは無料です）

検索 Word ［ランドスケープデザイン］［検索］

### アプリ版は こんな方におすすめです

1. 書店などで売り切れてしまったバックナンバーを購読したい方（No. 64以降なら全て購読可能）
2. 外出先で急に読みたくなった方
3. 本棚の容量を節約したい方
4. 営業やプレゼンテーション用に使用したい方



アイコンから…

ダウンロード後は、トップ画面からアイコンをタップ！
すぐ専用ページにアクセスできます。


出先でも！



コーヒータイムでも！

※画像はすべて イメージです

**【アプリ版のダウンロード・ご利用方法】**

GooglePlay もしくは AppleStore より「ランドスケープデザイン」で検索するか、下記 URL よりアクセスし、ダウンロードしてください。その後、アプリより希望の号を選択し、ご購入下さい。

世界最大級の電子雑誌サービス

**ZINIO**™

https://www.zinio.com

**世界62ヶ国以上で購入・閲覧が可能です**

主な購読可能国／アメリカ、カナダ、アルゼンチン、ブラジル、メキシコ、オーストラリア、ニュージーランド、中国、香港、日本、韓国、台湾、シンガポール、インド、デンマーク、ドイツ、スペイン、フランス、ベルギー、イタリア、オランダ、ノルウェー、ポルトガル、ロシア、スイス、フィンランド、スウェーデン、イギリス ほか

**【GooglePlay】** https://play.google.com/store/apps/details?id=com.audiencemedia.app3409
**【AppleStore】** https://itunes.apple.com/jp/app/landscape-design/id1289138643?mt=8&ign-mpt=uo%3D2

ランドスケープデザイン
第127号
2019年8月発行（偶数月発行）
編集発行人／丸茂 喬
発行所／㈱マルモ出版 〒150-0036 東京都渋谷区南平台町4-8 南平台アジアマンション708 ☎03-3496-7046
定価1,995円 本体1,847円





雑誌19135-08
4910191350890
01847